附 1　鷹山調査委員会の全記録

氏名は鷹山調査委員会における役職ごとにまとめ、五十音順、敬称略で記載した。委員の所属については本報告書凡例参照。各所属における役職については 2 回目記載以降省略した。

1 鷹山調査委員会（総会）

第 1 回

日　　時：平成 28 年 6 月 7 日（火）午後 2 時

会　　場：公益財団法人祇園祭山鉾連合会（以下「祇園祭山鉾連合会」と略す）会議室

出 席 者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、久保智康、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、特定非営利活動法人京町家再生研究会（以下「京町家再生研究会」と略す。事務局長・理事小島冨佐江、理事木下龍一）、〔オブザーバー〕公益財団法人鷹山保存会（以下「鷹山保存会」と略す。理事長山田純司、副理事長西村吉右衛門、副理事長西村健吾）、京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「京都府文化財保護課」と略す。理事磯野浩光〈当時〉、副課長岸岡貴文）、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」と略す。文化財担当部長土橋聡憲〈当時〉、課長川妻聖枝〈当時〉、係長村上忠喜〈当時〉、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（事務局長山口敬一）

第 2 回

日　　時：平成 28 年 7 月 23 日（土）午前 10 時 30 分

会　　場：京都医健専門学校第 2 校舎 2307 教室

出 席 者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、吉田雅子、京町家再生研究会（小島冨佐江、理事内田康博、木下龍一、丹羽結花）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府文化財保護課（岸岡貴文、向田明弘）、京都市文化財保護課（村上忠喜、福持昌之、山下絵美）、〔協力者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

第 3 回

日　　時：平成 29 年 3 月 8 日（水）午後 2 時

会　　場：祇園祭山鉾連合会会議室

出 席 者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、久保智康、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府文化財保護課（向田明弘）、京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔協力

者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

第 4 回

日　　時：平成 29 年 6 月 26 日（月）午後 2 時
会　　場：京都市職員会館かもがわ中会議室
出 席 者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府保護課（向田明弘）、京都市文化財保護課（課長中川慶太、担当係長村上忠喜〈当時〉、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔協力者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

第 5 回

日　　時：平成 29 年 10 月 24 日（火）午後 2 時
会　　場：祇園祭山鉾連合会会議室
出 席 者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、久保智康、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府文化財保護課（向田明弘）、京都市文化財保護課（村上忠喜、係長堀大輔〈当時〉、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔協力者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

第 6 回

日　　時：平成 30 年 3 月 12 日（月）午後 2 時
会　　場：祇園祭山鉾連合会会議室
出 席 者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、久保智康、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一、三木佑美）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府文化財保護課（向田明弘）、京都市文化財保護課（中川慶太、村上忠喜、堀大輔、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔協力者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

開催された調査会（総会）のすべての会議において、事務局支援は一般社団法人システム科学研究所である。

2 ワーキンググループ

木部

第 1 回

日　　時：平成 29 年 3 月 22 日（水）午後 2 時

場　　所：京都市歴史資料館

出 席 者：〔委員〕京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一、丹羽結花）、
〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）

第 2 回

日　　時：平成 29 年 4 月 27 日（木）午後 2 時

場　　所：京町家作事組事務局

出 席 者：〔委員〕京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一、丹羽結花）、
〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）

第 3 回

日　　付：平成 29 年 6 月 3 日（土）

出 席 者：(3 部とも)〔委員〕京町家再生研究会（内田康博、木下龍一、丹羽結花)、〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、福持昌之、山下絵美）

第 1 部　岩戸山ヒアリング

時　　刻：午後 3 時 30 分

場　　所：京町家作事組事務局

出 席 者：公益財団法人岩戸山保存会（大工方奥村貞彦）

第 2 部　南観音山ヒアリング

時　　刻：午後 5 時

場　　所：南観音山会所

出 席 者：公益財団法人南観音山保存会（大工方吉田裕二、理事山﨑伊佐緒、囃子方坪井正夫）

第 3 部　北観音山ヒアリング

時　　刻：午後 7 時

場　　所：京町家作事組事務局

出 席 者：公益財団法人北観音山保存会（作事方笠原清美、大工方八田俊二）

第 4 回

開催日時：平成 29 年 9 月 22 日（金）午後 2 時

場　　所：京町家作事組事務局

出 席 者：〔委員〕京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一）、〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）

御神体人形

第 1 回

日　　時：平成 29 年 4 月 13 日（木）午後 2 時

場　　所：明倫自治連合会会議室

出 席 者：〔委員〕林駒夫、〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）

第 2 回

日　　時：平成 29 年 5 月 30 日（火）午後 2 時

場　　所：明倫自治連合会会議室

出 席 者：〔委員〕小嵜善通、林駒夫、藤井健三、〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）

懸装品

第 1 回

日　　時：平成 29 年 4 月 5 日（水）午後 2 時

場　　所：明倫自治連合会会議室

出 席 者：〔委員〕小嵜善通、藤井健三、吉田雅子、〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）

第 2 回

日　　時：平成 29 年 5 月 8 日（月）午後 1 時

場　　所：明倫自治連合会会議室

出 席 者：〔委員〕小嵜善通、藤井健三、吉田雅子、〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、中川未子（よろずでざいん）

金工品

第 1 回

日　　時：平成 29 年 4 月 21 日（金）午前 11 時

場　　所：大津市民文化会館

出 席 者：〔委員〕植木行宣、久保智康、〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）

第 2 回

日　　時：平成 29 年 9 月 8 日（金）午後 1 時

場　　所：ルビノ堀川

出 席 者：〔委員〕久保智康、〔聴取〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）

3 調　査

大津曳山祭西王母山見送幕調査

日　　時：平成 27 年 10 月 5 日（水）午後 14 時

場　　所：大津西王母山会所

調 査 者：〔委員〕藤井健三、岸本吉博、〔調査補助〕京都府文化財保護課　（向田明弘）、京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門）

横山華山筆「祇園祭礼図巻下絵」調査

日　　時：平成 28 年 2 月 3 日（木）午前 10 時

場　　所：京都市立芸術大学芸術資料館

調 査 者：京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）

三条衣棚町文書調査

日　　時：平成 28 年 5 月 25 日（水）午後 1 時、6 月 24 日（金）午後 1 時 30 分、7 月 7 日（水）午前 9 時 30 分、7 月 27 日（水）午前 9 時 30 分

場　　所：京都府立京都学・歴彩館

調 査 者：京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、山下絵美）

岩戸山山建て調査

日　　時：平成 29 年 7 月 11・12 日（火・水）両日とも午前 8 時

場　　所：岩戸山

調 査 者：〔委員〕京町家再生研究会（内田康博、木下龍一、丹羽結花、野間洋平、三木佑美）、〔調査補助〕京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔動画撮影〕立命館大学映像学部（田村将章、永田一貴（12 日））

北観音山山建て調査

日　　時：平成 29 年 7 月 19・20 日（水・木）両日とも午前 6 時

場　　所：北観音山

調 査 者：〔委員〕京町家再生研究会（木下龍一、坂爪寛人、三木佑美）、〔調査補助〕京都市文化財保護課（村上忠喜、山下絵美）、〔動画撮影〕立命館大学映像学部（黒田一馬）

南観音山山建て調査

日　　時：平成 29 年 7 月 19・20 日（水・木）両日とも午前 6 時

場　　所：南観音山

調 査 者：〔委員〕京町家再生研究会（内田康博、丹羽結花、野間洋平）、〔調査補助〕京都市文化財保護課（安井雅恵、福持昌之）、〔動画撮影〕立命館大学映像学部（永田一貴、田村将章（20 日））

附 2　鷹山基本計画策定委員会の議事録

第 1 回

日　　時：平成 28 年 6 月 7 日（火）午後 3 時

会　　場：公益財団法人祇園祭山鉾連合会（以下「祇園祭山鉾連合会」と略す）会議室

出　席　者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、久保智康、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、特定非営利活動法人京町家再生研究会（以下「京町家再生研究会」と略す。事務局長・理事小島冨佐江、理事木下龍一）、〔オブザーバー〕公益財団法人鷹山保存会（以下「鷹山保存会」と略す。理事長山田純司、副理事長西村吉右衛門、副理事長西村健吾）、京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「京都府文化財保護課」と略す。理事磯野浩光〈当時〉、副課長岸岡貴文）、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」と略す。文化財担当部長土橋聡憲〈当時〉、課長川妻聖枝〈当時〉、係長村上忠喜〈当時〉、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（事務局長山口敬一）

1.　開会

2.　挨拶

（以上、略）

3.　議事

植木委員長（以下、植木）　全体的な枠組みは 2 か年、来年度の末ぐらいの提案となる。2 か年といっても限られるので、そこで審議をしていただくことになる。お手元の史料をご覧いただけばおわかりいただけるが、さすがに祇園祭であって、ほかの祭ではこれだけの史料は到底出てこない。それだけに、絞り込むのがなかなか大変でもある。そのあたりは追々、議論で詰めていっていただければと思う。

今回は鷹山に関する歴史的な史料をそろえていただいたので、これについて、京都市から説明をしてもらいたい。

京都市　村上係長（以下、村上）　（資料確認、略）

まずは会の運営スケジュールについて、京都市から報告する。

京都市　福持（以下、福持）　この会は 2 か年の予定をしている。本日 6 月 7 日に第 1 回検討会。本日の課題として 5 つの類型から 1 つの復興案を絞るということを考えている。7 月 22 日か 23 日のいずれかに第 2 回検討会。第 2 回は実際の鷹山の宵山飾りを見せていただいたく予定である。9～11 月に第 3 回検討会。木部の復原案を製作するための仕様を決めていきたい。その間、鷹山の装飾品調査は、宵山飾りが終わり、巡行後、京都市歴史資料館に一旦搬入して、じっくりと調査をしたい。また、絵画や文献の調査、大津祭の見送の調査等、必要な調査をこの時期にしていく必要があると考えている。また、木部の復原案を京町家再生研究会にお願いするとともに、復原イラストの準備などをよろずでざいんの中川未子氏にお願いする。以上がこの 1 年間の予定である。

来年度、第 4～6 回の 3 回程度、検討会を開催する。春には木部復原案の検討、懸装品の復原案を検討するための史料を考えていく。その後、2 か年の事業のまとめとして、復原基本設計図、復原想定イラストを入れた報告書を出すというような形で、基本設計が終わるということを目標にしている。

各委員からのご意見・ご提案もいただきつつ計画を進めていきたいので、よろしくご協力いただきたい。

植木　今、提示された日程に従って、今年度は今日とあと 2 回、計 3 回の検討会が予定されている。それぞれテーマが提示されており、この流れに従っていきたい。

ではまず、鷹山がどういう山であるかについて説明をしてもらいたい。

村上　最初は山下から説明させていただく。大船鉾と違って装飾品類はほとんど残っていないが、文献史料が膨大にあり、そちらはまだ調査途中である。そのため、今日配布した資料集は、今後バージョンアップしていく予定である。まずは、今回までに調べた結果を説明させていただく。

京都市　山下（以下、山下）　（配布資料の説明、略）

まずは鷹山の概略について説明させていただく。

京都市中京区三条通室町西入る衣棚町を本拠とする鷹山は、応仁の乱以前より「鷹つかい山」として確認できる山のひとつで、後祭に出された曳山である。近世においては、殿（しんがり）である大船鉾のひとつ前、つまり山では最後方を巡行する籤とらずの山であった。

鷹山は、文政 9 年（1826）を最後に巡行を休止した。その後、元治の大火（1864）で類焼し、山本体や懸装品等のほとんどを焼失する。巡行を休止しておよそ 190 年が経過するが、一時の休止を除き、現在まで居祭が続けられている。鷹山は、『祇園会細記』（宝暦 7 年〈1757〉刊）[文献 4]に「鷹狩の態を風流（ふりゅう）に作りなしたる也」と表されるように、在原行平とも源頼朝ともいわれる「鷹遣」、犬を連れた「犬遣」、背に指樽（さしだる）を背負い、

大きな粽を両手で持って食べる「樽負」の3体の御神体人形が主体となる。山の名称は、「鷹山」の他には「鷹つかい山」、「樽負山」、あるいは「太郎山」とも称された。会所では、御神体人形と鉦等が毎年飾られる。

3体の御神体人形の舞台上の配置について、絵画史料によると、鷹遣は、左手拳に鷹を止まらせ、舞台の前方に配置される。獲物となる雉は、山頂付近に止まっている。犬遣は、左手で綱を握って犬をひき、鷹遣と向かい合うかたちで配置される。犬は多くは白黒の斑模様にあらわされ、山に登っている。樽負は、舞台後方隅に配置され、指樽を背負い、両手で大粽を持って食べる仕草であらわされる。

次に、現存する資料について説明させていただく。

現存資料については、平成20年の京都市有形民俗文化財指定時に調査が行われている。鷹遣・樽負・犬遣の頭部を納める箱の墨書には「入日記」として明和7年（1770）の年号があり、頭部はこの時期に入手されたと推測される。また頭部以外では、それぞれ1対の腕先のみが江戸期の制作になる。鉦は元治の大火で罹災したもので、焼け爛れて溶けてかたまったものをそのまま保管している。縁に天明6年（1786）の刻銘がある。

指定品以外として、御神体人形の所持品や鷹と犬がある。雉は現存しない。御神体人形の衣装については、指定に際して藤井委員にご調査いただいており、近代以降の製作であることがわかっている。鷹山は、蟷螂山と並んで、からくりがおこなわれていたと伝わるが、現在の胴組自体は元治の大火による焼失以後に作られたもので、からくりの仕様ではない。その他、会所飾りの品々等の現存資料がある。

参考資料としては、個人所有の鷹山の模型がある。総高1mほど、懸装品に「文化十年」と墨書のあるものもあり、当時の鷹山の懸装品の意匠を掘り起こすうえでは一部参考にできるかと思われる。

次に、文献史料について、鷹山を知ることのできる最も有力な史料として「三条衣棚町文書」があげられる。この文書は慶長5年（1605）から明治28年（1895）まで290年間にわたり、総数約1万点あるうちの約160点が鷹山に関連するものである。その中に、年代は不明であるものの、真松・石持・舞台の寸法が明記される文書がある。そこから概算図を起こした。

また、「鷹山御神体人形図」[文献22・絵画16]は天保2年（1831）制作で、衣装の柄や色、所持品の材質・形状に至るまで詳細に描かれており、休み山となる直前の人形の様子が描かれた史料として貴重なものである。

次に、祇園祭の描かれた絵画史料のなかから、鷹山が描かれた箇所を抽出した。これらの絵画史料に描かれた山（洞）の形態の変遷を確認していきたい。鷹山は、天明の大火後に一時舁山となるが、絵画に描かれた鷹山の姿を見る限りでは、車輪のつく曳山として描かれている。曳山の形態は、屋根のないもの、舞台のおよそ半分を覆う中屋根のつくもの、そして舞台全体を覆う大屋根がつくものと、大きく3つに分けられる。また、屋根の有無と、舞台の主な構成要素である山（洞）に注目して、さらに分類すると、おおよそ5つに分類できる。

すなわち屋根がなく、舞台上に山（洞）が2つあるもの（分類A）、同じく屋根がなく、舞台上に山（洞）が1つあるもの（分類B）、中屋根がつくもの（分類C）、大屋根がつくもので、舞台上に山（洞）がないもの（分類D）、また大屋根がつくもので、山（洞）が描かれているもの（分類D´）である。分類Aのサントリー美術館「日吉山王祇園祭礼図屏風」[絵画1]は鷹山を描く最も古い絵画のひとつである。鷹遣・樽負・犬遣3体の御神体人形が確認できるとともに、舞台上に山（洞）が2つあることや、赤熊が乗るなど、後の時代には見られない描写がある。分類Bの『祇園御本地』[絵画4]は承応年間、17世紀中頃に出版された版本で、御神体人形に鉦・笛・太鼓の囃子方も加わり、この配置は以後定型化して描かれるようになる。

分類Cの『祇園会細記』[絵画14]では中屋根がつき、角飾房や、装飾をほどこした欄縁なども見られる。この史料から、18世紀中頃、天明の大火以前には、屋根のつく形態に変化をしていたと推測される。

『祇園会細記』からおよそ半世紀、天明の大火を過ぎた文化年間には、舞台全体を覆う大屋根の付いた絵画が描かれるようになる。これまで舞台上に必ず描かれていた山（洞）が相変わらず見られるもの（分類D´）、見られなくなるもの（分類D）がある。そのなかから、鷹山が休み山となって間もない頃に描かれた絵画史料2点を詳細に見ていく。

まず、横山華山「祇園祭礼図巻」[絵画17]（以下、「華山本」）は天保5-8年（1834-37）制作で、鷹山が文政10年に巡行を休止した数年後に描かれている。下絵も京都市立芸大に所蔵されているが、残念ながら後祭の巻はなく、鷹山の下絵は確認できない。長刀鉾の下絵を例にとって見ると、詳細を丹念に写し取り、細部をメモした上で描いていることがわかる。

本画の鷹山では、定位置に鷹遣・犬遣がおり、樽負は『祇園会細記』の記述にあるように、後方左隅に位置するせいか、画面では確認できない。また、雉は真松の枝に止まっている。犬は確認できない。また、舞台内部には、紅白の布の巻かれた真松と禿柱が確認できる。

次に冷泉為恭「祇園祭礼図巻」[絵画19]は、華山本

からおよそ十年後の嘉永元年（1848）に描かれている。山（洞）の装飾は、『祇園会細記』に描かれた意匠と一致しており、欄縁や一番・二番水引からも過去の史料に倣って描かれたことがわかる。鷹遣・犬遣と山に登る犬、山の向こうに樽負がいるが、雉は確認できない。ただ、手前後方には、粽を紐でくくり、下に垂らす舞台上の人と、それを指さす人が描かれており、当寺の風物詩であった粽投げが活き活きと描写されていることがわかる。また、舞台上に山が描かれていることも注目される。半世紀前の版本『諸国図会年中行事大成』[絵画 15]に倣ったものかと思われるが、舞台上に山が描かれ、かつ彩色のある絵画史料はこれのみである。「三条衣棚町文書」の木部材の記述には、「ほら竹」や「ほら籠」など、舞台上の山（洞）の部材を思わせる記述がみられ、これらの部材についても検討が必要かと思われる。極端に反り返った唐破風屋根の表現や、真松の位置から山（洞）がずれていること、また全体では、画面下方に雲を描き、山鉾の全容が明らかでないことや、山鉾の描かれる順が巡行順と異なることなど、実際の山鉾巡行の姿が必ずしも正確に描かれておらず、山鉾の描写精度においては、華山本が休み山になる直前の姿を忠実にあらわした絵画史料であると考えられる。

検討資料は以上である。

植木　濃密な資料なので一度持ち帰り、じっくり読み込んでいただいた方が実際的だと思う。今の史料で確認しておきたいことの一つは、ご町内にかなりきっちりした文書記録があり、これが基本になっていくということである。絵画史料は極めて史料批判が難しいものであり、必ずしも確実な史料とは断定できない。あくまで参考史料として、図にあんまりひっぱられないようにすることが大事だと思う。

人形は鷹遣、犬遣、樽負の 3 体の御神体人形と犬遣が引いている犬、雉があるのか。

山下　犬、鷹は現存しているが、雉は現存していない。

村上　現存しているものもほとんど明治期のもので、頭部と腕のみが江戸期のものと確認できる。他は会所飾り用に作られたものと考えられる。

植木　しかし一応、衣装も着けて飾ってある。これを活かすということになろうか。

林委員（以下、林）　私も宵山のときに一般人として外から眺めているが、今着ている装束は本来とまったく関係ないものだと思う。

植木　鷹山本来の衣装となると、基本的なところから検討し直さないといけない。とりあえず現状のものを中心に生かしながら少しずつ手直しをしていくことになるだろうと思う。ただ、人形は明らかに、二層屋形（にそうやかた）式の、D 案よりも前の時代から引き継いできたものだと思う。だから二層屋形式の、つまり観音山のような曳山以前の人形、その他の飾りであるのは押さえておかねばならない。

人形を生かすという点は原則としてよろしいか。衣装等の手直しは追々とやっていくとして、いま生きているものをまず活かすということが一つである。

懸装品の類は全く残っていないのか。

村上　全くない。

植木　そうすると、懸装に関することは、これから新たに考えていかねばならないが、最初に問題になるのは、文化 4 年（1807）に、火災以前のように曳山の形式ではあった。露天式の曳山であった。

それが文化 3 年になって、屋根を本格的に塗ったと出てくる。懸装品もそれに関して取り換えられる、あるいは新調されるということがあったようである。この時点で、二層屋形式の曳山形式に変わった。それが文政 9 年（1826）、大夕立でせっかく補強した懸装品を含めて汚損をし、翌年から休むことになり、そのまま禁門の変で罹災をした。ということは、二層屋形式の曳山の時代は、わずか数年である。

一番問題になるのは、本来舞台の上に飾っていたものを、そのまま二層曳山式に引き継いだということで、大変に舞台平面が窮屈になっている。そのあたりを含めての議論になっていくと思う。選択肢としては、「二層曳山になる前の形式に戻す」、という考え方が一つあるだろうと思う。それから、最後の姿で、わずか数年であるが「二層屋形式の曳山にする」。事務局提示の原案は後者のようである。この辺りが最初に議論が必要になるだろう。

大きな流れでいくと、一番古い絵画史料というのは、サントリー美術館の「日吉山王祇園祭礼図屏風」である。このように「二ツ山」という、二つの山（洞）の上に姿のいい松を飾るというのが、祇園祭の山の最も古い基本的な形態である。なぜ山というのかというと、つまりこの山（洞）が本体だったわけで、その前にいろんな趣向の作り物を飾る。作り物は変わってきたが、山（洞）そのものは変わらずにきた。山（洞）が一つに松が「真松」になるのは、江戸時代の初期の話である。二ツ山はいま黒主山だけ残っている。それに対して、おそらく雨がかかるから、人形飾りのところに仮屋根を施したという形で、文化まで推移した。途中焼けているが、その時も人形は焼け残ったようである。割と古い飾りをずっと伝えていた。それから、山本来の風流の山という、祇園祭にとって非常に大事なものが、この時期に制御された。観音山の場合には、楊柳観音なので納まりが

よかっただろうが、岩戸山は屋根の上に乗せるという形で空間を確保している。だからもし最終の二層屋形式にやろうとすれば、どういう風に平面の飾りをするのか。これはかなり難しい問題になるだろう。そういうことも含めて、保存会の意向もあるし、積極的に意見を出していただけたらと思う。

久保委員（以下、久保）　方向性として選択肢は2つということ。本来どうだったかということは、鷹山だけでなく、祇園祭の33町全体にとっても結構大事なテーマである。祭り全体の形を、復原的な方向でプレゼンしていこうという思いが共有されるならば、古い方を追及するということになろう。

逆に一般的な復原の方法論的には、やっぱり細かいデータがある、類型をさらに情報を集めて精度の高い復原をしていく。横山華山あたりを文献で検証して詰めていくというのが、復原の王道といえば王道。そのいずれかという印象であったが。

小嵜委員（以下、小嵜）　何点か確認したいことがある。洞籠がでてくる文献自体は年表で見ると享保年間か、古い時代のものではないのか。年未詳か。

「祇園会神事諸覚記」には、享保十年等…ほかがある。全体がはっきりわからないのか。書き加えているのか。

村上　（肯定）

小嵜　なるほど。では、やはり横山華山が描いた頃に山があったかどうかは分からないという状況である。屋根がないところまで遡るとなると、懸装品の形式が絵画史料のままとはとても思えない。絵画史料としての信憑性が下がってくる。時代が上がれば上がるほど、危うくなる。

実際、雨の日の巡行をどうするかという心配もある。24日あたりになると晴れの日は多いが、豪雨の年もある。そうすると、また幕末と同じようなことが起こってしまうというのでは、あまり意味もない。その辺の具体的な心配も、頭の片隅にはある。どの部分で、一番信憑性のあるところで押さえられるかとは思う。

植木　「三条衣棚町文書」の「山飾附之事」[文献15]の中に、「屋体天水引」「後屋体天水引」とあり、どうも屋台が二台組になっている。この辺りをどうするか。二層屋形の形になったと。これは本体絡みだが、仮に最終的には二層屋形にもっていくとしても、屋台組はまず一層式で作って、二層式に転用するというのは、技術的には可能か。

京町家再生研究会　木下委員（以下、木下）　まず人形との取り合わせを想定した上で、進化してそうなっていくのは分かる。

植木　その辺りは基本設計の段階で当初から組み込んでいくと。

木下　そうしなければいけないと思う。振動もあり、いろいろ傷みも出るので。図面上は想定して、両方を比べることはできると思うが、工法的に違うものになるのではないかと思う。

林　だいたい山の実効平面は何畳敷きくらいになるのか。山によって大きさが違うのか。

京町家再生研究会　小島委員（以下、小島）　6畳くらい。

木下　寸法はだいたいわかっている。

林　御神体人形が乗る部分と囃子方が混在して乗る部分。現実問題として3体の人形が上に上がって余りの空間がどういうふうに確保できるかと。大船鉾の場合は、真ん中が神功皇后で舳（へさき）と艫（とも）でちょうど縦長。相当大変だと思う。前後は中からちょっと外れる感じで立っているようだ。現実に囃子方が乗るのなら何人ぐらい乗れるだろうか。

小島　御神体が3体ぐらいというのは、あまり他では…。

林　役行者が3体。

小島　お囃子が乗って御神体が乗るというのは。

林　岩戸山は結局、1体が屋根の上に上がった。

小島　岩戸山と鷹山が、舞台の中が匹敵するぐらいかと。それでも御神体は鷹山の方がしっかりあるので。

林　ただ、樽負が脇の後ろに行くのなら2体と勘定しても。

小島　お囃子の人数はかなり制限されるのではないか。上にお囃子が登るとしたら、どこの山でも30～40人だが、この舞台の寸法でそれだけ乗られると。岩戸山でもかなりぎゅうぎゅうみたいで。

植木　囃子方は、いまどうなっているのか。

鷹山保存会　西村（健）副理事長（以下、西村（健））　いま囃子方は46名である。実際山ができて乗るのは30人くらいを想定している。

植木　イメージとして、例えば回りに囃子方が上がって中央に締太鼓が座るのが平均的な形である。そういうイメージか。それはすごく難しい。

西村（健）　御神体の位置からして、囃子方は欄縁に座るので、中に座るよりも前に欄縁周りを固めてしまえば…。

植木　数人が限度かなと。

西村（健）　私は北観音山でずっと囃子方をしていた。北観音山は真ん中に観音があって、人は皆まわりにしか座れないが、30人でもまだ余裕がある感じ。長刀鉾は稚児たちが前に3人いる。そういうイメージで、御神体

は前に 2 人おられて、という感じで空間的にはそんなに…。

植木　そのあたり、想定とはかなり違った乗り方にならざるを得ないということも含めて、問題が残ると思う。とりあえずそれはこれからということで、囃子方はできるだけ出たいと。

藤井委員（以下、藤井）　ご町内の方の搭乗の形からのご希望もあろうし、形態からいけばどれもあり得る形だろう。久保委員が言われたように、史料が多いものは一番押さえやすい。どれを優先するというのではなくて、いろいろなものを照査した上で出していくしかないのでは。ちょっと詳細が掴めていないので、聞いている限りではそのように思う。

染織品については同じ時代のものがあっても形がばらばらということがあり、これはほかの山もみなそうである。ある程度現在の懸装法と、絵画とか記録に残っている形を参照しながら組み立てていくことしかできないので、形を先に決めてそこにどうはめていくかというのはなかなか難しいように思える。

福井委員（以下、福井）　山の形態の推移について、お祭りは、祇園祭の場合は特にそうであるが、お飾りも含め、伝統が進化していくというか、いい方向へ町内の人が進めていったものの歴史である。そうすると寸法的な問題、形態については現在に一番近い形を復興の目途とする、最後に合意をみた寸法、形というのを、復興の形にすべきだと思う。それまでに何度となく大改正が行われているが、これはきっとその時町内の人は「こうした方がいい」あるいは他を見て「こっちの方がいいアイデアだ」と徐々に進化する、しかし進化してきたものは何百年の歴史を経ている、とお互い認知するというのが、祇園祭山鉾の基準だと思う。保存会の意向もあると思うが、一番現代に近い姿かたちというのを想定するというのが一番普通の考えではないかと思う。

囃子方が乗ることについては、乗られる囃子方が工夫して、フルメンバー乗るわけではないので、おそらく隙間を詰めて、現実の実務で落とし込んでいただけば、そんなに心配することはないと思う。御神体はお顔が決まっているので、寸法を変えることはできない。長刀鉾はそんなに広くない舞台のところに稚児の担当者が前に 1/4 か 1/3 くらいいる。そのことを思えばそんなに窮屈ではないのではないか。

姿かたちについては一番近代に近いところを基準値に考えるのが通常の考え方だと思う。いくら特徴のある形でも古い時代のものにしたら、数年後には違うニーズが出てくるに違いない。だから基準値は自然とそこに決まるのではないか。総寸法についてはここに参考数値が出ているから、若干小さめは問題ない限りはこれを再現するというのが全体の特徴だと思う。三条通を山が通過するときにどのようにするのかと思えば、おそらく巨大な寸法ではなかったと思う。幕末期に近い姿を基準値に採られるのがいかがか。

植木　当然祭りの形態というのは変遷がある。ただ、綾傘鉾が幕末の最後の段階で、二層屋形の上に傘を立てるという、ある意味では思いつきの形で作られている。そのあたりは、必ずしも主体的な変遷と言えない部分もある。直近の形をモデルにするのは非常に素直な考え方で、否定するものではないが、それを検討するためにももう少し、歴史的なことを含めて議論をして、それから出していけばいいと思う。

このあたりで保存会の考え方を伺いたい。

鷹山保存会　西村（吉）副理事長（以下、西村（吉））　これだけ復興の話が盛り上がってきたのは、囃子方の力が結構大きいから、なるべく囃子方に乗ってもらえるように努力したいと考えている。これは歴史とは全く関わりないことかもしれないが。

ただ、最終形の形というのも、文化の時代に二層の屋根があるという史料があるので、単に何年かだけのことではなかったと思う。もう少し長いスパンで二層あったと思っているので、その辺ももう少し調べてもらい、最終的な形を町内としてはお願いしたいと思っている。

鷹山保存会　山田理事長（以下、山田）　後祭がいま 10 基巡行されていて、鷹山復興の話が出たときに、曳山でお囃子が乗った鷹山を皆さん待ち望んでおられるし、町内の者も一番それを望んでいるということで、町内の希望、想いになるが、人数はともかく、お囃子が乗って巡行できる姿を望んでいる。

植木　ご町内は二層屋形式の、現在観音山に見るようなスタイルで復活したい、復興したい。応援演説もあった。ということになると、問題は舞台飾りをどういうふうに塩梅していくか。これが決まらないと本体の問題にもかかれない。直近の形というと、この史料にあるように洞がある。洞の材料が洞籠という。必ずしもベストとは言えないが、山（洞）が乗っている史料が関係史料としてある。ですから直近の形は、洞山を平面の中に組み込まねばならないということになる。そのあたりが議論になる。洞籠が入るというのが、この山の特色になっていく。

久保　報告を見ても写真版を見ても、部分的にしか提示されていない。もう少し一つ一つの文書の重要史料の書誌的な評価、基本的な史料の読み込みをやっていただいた方がいいのではないか。記述内容からどのくらい個々の部分、例えば、それぞれの似たような飾り物の記述が

おそらくかなり複数の文書で出てくると思う。それらを比較して突き合わせていくと、ある時期にこの飾り物が出現したとかいう検証の仕方から、問題になる二層屋形の時期のもの、そうではないものとか、基本的な所をもう少し詰められるのではないか。

小嵜　絵画史料のところで、冷泉為恭の「祇園祭礼図巻」に山があるということだが、嘉永元年（1848）の作品ではあるが、為近自身が写実的な絵を描く人ではなく、「復古大和絵派」と呼ばれる、どちらかといえば古い絵を模写したり、そこからアレンジしながら自分の作風を作っていく人なので、これをそのまま当時こうだったと読むのは絵画史的には苦しい。

それなら、横山華山の方が写実的な絵を描いていた流派の画家なので、巡行しなくなってからの作品ではあるが、まだしも見るべきところはある。以上が、絵画史的な所からみた視点である。

もう一つは、個人所蔵の模型はここに資料として出てきてないが。あれは個人のもとにずっとあったのかどうかは知らないが、あの町内は江戸時代、鷹山の寄町だったと思う。

山田　所有者は四条におられたので、たぶん関係ないと思う。

小嵜　それなら良いが、ただもう少し、あの資料自体も検討するべきかと。年号が入っていたのは初めて知った。材料としては、絵画史料と同列に出てきてもいいのではないかという感じはする。構造的なところは模型なので、もちろん違う部分があると思うが。

植木　絵画史料の扱いの難しさに触れられたと思う。ともあれ、舞台飾りを基本的にどういう風に想定していくのか。

林　舞台飾りが大変問題になるなら、「昔はこうだった、この位置に立っていた」という正確なものがない限り、割にアレンジできると思う。たくさん山に人が乗ったら、下から見上げたら全く何が何だかわからないというのは避けたい。

私はご町内が、というよりこの復興が、町内の熱意で前へ進んでいって、なおかつ囃子方が2階から囃子をして巡行をしたいという夢を、可能な限り盛り込むというのが筋ではないかと思う。我々は外から見ているが、町内に長いこと居る人が「うらやましい。2階で囃子して巡行してはる」という夢を叶えるというのも、現在の検討の場で可能な限りご町内の力をより盛り上げるのが話の基本ではないかと。福井委員がさっき言われたように、ご町内の熱意がなかったらこの話はないと思う。だから、例えば飾りの山の寸法が正確なところが出てこない限り、2階建てになって見送が後ろについたら割に山が薄くてもいいと思う。山（洞）がまるいのは真松を建てる場がいるので、その松が上にあがってしまうのなら、薄い山でいいのではないか。それに犬が駈け上がっているか、雉が付いているかというのも、薄い山でやって。2体の御神体人形と、1体は山の後ろへ入ってもいいし、十分囃子方が乗るイメージはできると思う。

植木　つまり松が屋根の上に立つわけだから、山（洞）がなくてもよいという、そういう考え方もあると。

林　なくていいとは言わない。

植木　つまり、床面の、舞台面の整理も、視野に入るということである。具体的にどう配置するかというなかで、議論が詰まっていくだろう。

最後にもう一つ。「鷹山御神体人形図」に舞台に差し込む足のほぞ等が付いていたか。

山下　犬にはほぞがある。

村上　犬だけである。人形の足元は置き型で。

福井　本来は足があるはずだ。

林　足は長くて、ほぞにしないと山の上ではとても危ない。2本の棒で固定して、シテ方の方は指貫だと思う。指貫だったら、ほぞに沓。しかし、足元は何をはいていただろうと。例えば、指貫なら沓だが、沓でまさか鷹狩はしないだろう。

そういうことは別として、それほど足元は難しく考えず、指貫でぼわっとして、つま先に何かが出ればそれでよい。それより、いかに固定するかということで。宵山飾りとの兼ね合いはどうなるのか。宵山飾りは宵山飾りで、巡行前日にあげるのか。

植木　朝、乗せる形になるだろう。

林　だから、それがそのまま飾るときの飾りの台のほぞになれば。

植木　犬なんかはほぞがあるから、そのまま差し込むのか。

林　人形はやっぱり、下から見たときに、嵩（かさ）を上げなければならないから、そういう理由があったのではないか。そうでないと沈むので。

植木　人形の固定の仕方は、他に倣って一番よい形でやればいいと思う。問題は平面の配置図をどう考えていくかということである。

林　人形が稚児のように前の方に出るのか、御神体人形が山の方に寄って囃子方が前面に出るのかという違いぐらい。多分、なんとかなるだろう。なるべく囃子方がたくさん乗ることが、この祭りが次の時代へ引き継ぐ一番重要な条件だと思う。子供も、「早く大人になって、あの仕事がしたい」とか。御神体は乗るが、生の人間が機嫌よく乗れるのが一番だと思う。

福井　後ろの洞籠はこの山の特徴だと思う。文化3年

（1806）頃の『諸国図会年中行事大成』に、犬が壁面にくっついているように見えるが、洞籠で山がある。それを受け継いで、おそらく先ほど小嵜委員が言われたように、為恭の「祇園祭礼図巻」はかなりフィクションだと思う。しかし、フィクションはフィクションで意味があって、「鷹山には後ろに洞がちょっとある」と。林委員も言われたように、山（洞）らしきものがあれば、大きくする必要はない。

植木　結局、山（洞）の有無は、人形飾りをかなり重んじているという表れである。もしその囃子方、つまり保存会の熱意を優先して、やはり囃子方が全面に出てくるやり方があるとなると、人形の配置を考え直さないといけない。そうすると、飾りはどっちみち見えないとなる。やや暴論ではあるが。

福井　人形を前面に出しても、問題はないだろう。おそらく人間のことだからうまく乗れる。

林　稚児の位置に御神体人形がいて、山との間に囃子方が乗ると。

岸本副委員長（以下、岸本）　もう1点、先ほどから議論になっていないが、藤井委員の資料はどういったものか。

藤井　大津祭の調査の時に、文書の中に鷹山から買ったという記述が出てきた。

岸本　ということは、これが見送という可能性があるのか。

藤井　それは確定できない。「鷹山から買った」という記述はあるので鷹山の見送だろうとは思うが、いつ時代のものかはわからない。

岸本　鷹山の大きさを類推することもできないのか。

藤井　大きさの変遷もいろいろある。屋根のないときか二層の時か。時代的には二層の時ではなさそうである。

岸本　するとやはり、鷹山が復興されるにあたって先ほどの山（洞）のような特徴がないと、せっかく作られても、ほかの曳山と同じようであっては訴えるものがないと思う。やはり固有の特徴をどこかで出さないとだめだと思う。そういう点を対応いただきたいと思う。それから囃子方に関しては、私のところ（放下鉾）でも今のところは少ないが、40～50名乗ると、「あの中でどうして乗っているのか」という状況でやっている。囃子方はなんとか乗るので、御神体の配置を第一に考えていかなければいけないと思う。

林　私は御神体や山の形がどうでもいいと言うのではない。どの位置にどのように乗っていただくかのためにこの会議があるので、いまは舞台の上に、どう乗るかではなくて、どれだけ乗せるかという話だと思うので、史料はどうでもいいというわけでもない。山（洞）ももちろんのことである。

植木　結局、流れとしては、最終の方の形態の二層屋形形式という方向で。これはご町内の希望でもある。そうなったときに、本来の人形飾りを中心にしたものが、二層屋形になると平面的になる。そうすると囃子方は降りて、限定的にならざるを得ないという問題が出てくる。

大津祭は大きなからくり人形がいて、さらにからくりの小人形がついていて、その隙間に人間がびっしり乗る。だから、肝心のからくりの時にはみんな降りてしまう。人形を見せるために。

つまり人形飾りという、至高の飾りを意識するなら、やはり平面はこれを基本にして考えなければならないだろう。本体構造にどう穴を開けるかといったことを含めた話になる。この辺りが次回の議論の的になっていくだろう。第2回に人形の具体的調査をするということなので、そういう成果も含めながら、できればその次の回、およその平面配置図を事務局の方で原案をだしていただきたい。これが進まなければ、具体的にならない。人形3体配置して犬を曳くとなると、配置の問題になる。洞を載せるなら、はりぼての、見送の前に立つような立体のものにしてもいいと思う。ただ、もう少しデータを集める必要があるということなので、その平面の素案を考えておいてもらいたい。同時に、二層屋形方式に関わる基礎的な史料を一度ここで絞ってもらい、それをもとにして次回は少し具体的な話で進めるということでどうか。

地元にほかの史料はあるのか。

山田　委員各位にお配りした中に『鷹山のあゆみ』がある。それは、廣田長三郎氏、郷土史や瓦の研究、伏見人形の研究などで名前が知られている方だと思うが、勉強会の講師をお願いしたときに作っていただいた資料である。当時、92歳だと思うが、自筆で書かれた資料である。鷹山の復興を非常に心待ちにされていたが、残念ながら去年亡くなられた。ご一読いただけたらありがたい。

植木　今日は、町内の意見を尊重して、最終的な二層屋形形式の曳山に復原するという、大まかな方針はほぼ合意を得た。それを受けて、飾りを平面舞台にどう展開するのかということが、次回の非常に大きな問題になる。これには人形の調査も関わってくる。文献の渉猟もあり、その辺りにしぼって、次回に向けてデータ整理の上、平面の原案に近いものを提出してもらいたい。

以上

第2回

日　　時：平成28年7月23日（土）午後2時

会　　場：京都医健専門学校第2校舎2307教室

出　席　者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、吉田雅子、京町家再生研究会（小島冨佐江、理事内田康博、木下龍一、丹羽結花）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府文化財保護課（岸岡貴文、向田明弘）、京都市文化財保護課（村上忠喜、福持昌之、山下絵美）、〔協力者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

1.　**開会**
2.　**出席者紹介**
3.　**菊水鉾の部材等の確認**
4.　**会所飾り見学および人形外寸調査**

（以上、略）

5.　**議事**

村上　議事に入る。まず、菊水鉾の旧部材についてのコメントをいただきたい。

京町家再生研究会　内田委員（以下、内田）　部材は、舞台そのものはなかったが、舞台を支える部材は一通り保存されているように思えた。大体は計測でき、古くはなっているが、強度は保たれている状態かと思う。

舞台の大きさは、片方の寸法は測れたが、もう片方は測れなかった。下の骨組みの寸法までは測って、検討の材料にできると思う。

真木受けはあるが、鉾のためのものなので、大振りだった。松を載せるのであればもう少し小さくてもいいのかもしれない。

村上　次に御神体人形について。

林　頭部については、明確には言えないが、違和感はある。天保の絵画史料[絵画 16]の時には、すでに今の頭であるが、天明の大火以前がどうだったかということは、まだわからないと思う。

史料を見ると、今の会所飾りの御神体の立ち位置が、山の上に載った時は逆になっているようである。山の上の絵では、向かって右に鷹匠がいて、犬遣いが左側になっている。鷹匠の目の動きが違うのは、そのためではないかと思う。本来、どの位置で飾られていたかは分からないが、どの絵もそうなっているので、立ち位置が違っているのかと。今の会所飾りは、仮のお飾りであり、間違いというわけではないが、逆じゃないかと思う。

村上　こちらからは、現状報告と今後の進め方についてご説明したい。特に事務局に対して指示などあれば教えていただきたい。

前回ご指摘いただいた点は、現在の南観音山や北観音山のような形態と、山（洞）の上に簡易な屋根をつけた古い形態の間に、どういう形かは分からないが、大屋根の下の舞台に何がしかの山（洞）の残骸を載せたような形があった可能性があり、この 3 つの変遷をどう追えるかという宿題が出ていた。

それに関して、京都府立総合資料館（現京都府立京都学・歴彩館）に所蔵されている三条衣棚町文書を、調査しているところである。総合資料館がリニューアルのために 9 月 14 日から閉館するので、それまでに史料を集めなければならない。収集は進んできているが、まだ分析が追い付いていない状況で、先ほどの 3 段階の変遷について、仮説が出せるところまで行けるのではないかと考えている。

また、現存する大津祭の懸装品である鷹山の遺品とされる資料調査を、大津市教育委員会にお願いして、10 月の大津祭に実施したい。

すでに、かなり細かい図柄等に関する懸装品の変遷等を表にしたものを提示させてもらっているが、こういった調査を通して、さらに追加して、より細かい時代ごとの変遷をお示しできるかと思う。こういった作業を通して、各委員に個別にご相談して、それを平成 29 年 1 月下旬か 2 月上旬くらいの第 3 回検討会にかけさせていただきたいと考えている。

植木　今提案されているような日程の進め方で特に問題はない。

確認しておくと、第 1 回の委員会で基本的に合意したのは、南北観音山のような二層屋形式というやり方である。真松が高くそびえるという、祇園祭の 4 基目の曳山にする。その方針に従って、調べてもらった材料等がどこまで実際に使えるかという具体的な判断になってくると思う。その辺りも含めて、準備を進めてもらえたらと思う。

もう一つは、人形の配置をどうするのか。その前提として、現存している 3 体の人形飾りはそのまま生かす。これも基本的な合意だと思う。3 体か 1 体か、いずれにしても、人形を載せるということは決まっていると思う。ただ、人形の載せ方や配置については、慎重な議論が必要である。次回に、原案を立体的な面も含めて配置図の形で示してもらうのが分かりやすい。進め方としてはそうなるかと思う。その時に、史料提示の仕方として、前回、久保委員から、収集した史料を並列するのではなく、史料批判を含めて、第一級史料と従属的な史料とを分けて出してもらいたいという指摘があったと思う。

基本史料、第一級史料というのは、やはり町内文

書。その中でも飾りつけの記録になると思う。しかも、曳山形式なら、それに関わる史料、二層以降の史料が基本になっていかざるを得ない。大枠について、いろいろ言えたとしても、二層形式になった時点での飾り付けが、あくまで基本であって、それに基づく史料をきちんと固めて議論をしていく必要があるだろう。

だから、3段階に分かれていくという歴史的な展開はあるわけだが、二層の曳山にするという段階で、検討対象となる史料が絞られていくと思う。その辺りを押さえてもらいたい。ただ、絵画史料の史料批判というのは、ものすごく難しい。図像というのは、どうしても省略や誇張が入るので、あくまで参考史料として。町内の文書史料を基として、そこから立ち上げてもらう必要がある。

前回の史料を見ると、露天式の曳山の段階の人形が、基本的に引き継がれて来ている。変わっていないのか。

村上　構成は変わってない。

植木　では、新しい曳山にどうやって載せるかという工夫が必要になるだろうと思う。

図面の方で議論していただきたいのは、石持。これは、露天式の曳山から引き継いでいる可能性が高いのではないかと思うが、5m40cm という寸法から前後の幅、前回の史料では観音山の事例と比較して 3m29cm と出している。幅は広げられないが、前後はもうちょっと余裕を持つこともあるのではという気がしており、専門の方で見てもらいたい。

木下　舁山、曳山、鉾と、高さと部材が段々と大きくなる。前回指摘があったように、大体、4畳半～5畳くらいの寸法になる。大きな曳山になった時、石持がバランスとして大きさが変わっていく。舁山の担い棒と全然違う。

植木　二層式の曳山になる前に、前屋台、表屋台と後屋台という2つの屋台があって、どういう形態かはわからないが、少なくとも表・後ろというのは露天式の曳山をベースに、仮屋形をつけたのかと。そのあたりは史料を読み込んでもらいたい。

木下　そういうところは興味があるところで、突然曳山が大きなものになると、革命的に変わってしまう。構造自体や部材寸法も。だから史料をよく見ながら、判断して申し上げたい。

植木　図面の配置図、人形の配置図も、本体がある程度、案が出て来ないと。

木下　寸法比較とか舞台の比較表をつくってご報告するようにしたい。

村上　二層式のものの中に、ひょっとしたら山（洞）があるかもしれないが、細かいところは別にして、二層式を基本形として考えさせてもらう。

植木　史料によると、二層式になる前に、かなり大型の松を立てているらしい。洞のところではなく、下から立ち上がっている。真ん中に、真松が立って、禿柱が入るのか。

木下　山の場合、禿柱は入らない。

植木　真松をどういう風に留めるのか。屋根か。

木下　屋根に揺れ止めを載せているのではないか。

植木　立ち上がるだけで安定している。

木下　やはり鉾の高さと揺れは全然違う。山に対しては、禿柱はない。

植木　今はどういうふうな留め方をしているのか。

木下　屋根の小屋組みの上から立ち上げてるのではないか。観音山がそうだと思う。

村上　北観音山は真松をまわせる。南観音山は。

内田　まわせる。

村上　網隠しの中で真松と円錐状の木組みとの間は、固定されずにすきまがあるのか。固定してない。

植木　舞台のところで固まってる。

内田　舞台の部分で真松を側面から押さえている。下の方の真松受けで押さえて。2箇所で。

植木　そうすると、若干空間的な広さがあるということか。

村上　南観音山は、四本柱以外に柱が何本立っているか。

木下　2本。

村上　後ろにか。

木下　前である。

小島　北を向いた時に見えるから、前である。

村上　岩戸山は。

木下　4本。

村上　北観音山は。

木下　北観音山は四本柱だけである。

村上　結局、下でくるくるまわって、上で枠止めみたいなものをして固定してないので、その分屋根が弱いのを防いでいるのではと思うが、構造的によくわからない。

木下　舞台の底と真松受けで止めるだけで、上はフリーになると。

村上　上はフリーで、それはちょっと弱い。

木下　弱いようだが、鉾はもっとすごい。全体的な構造で動かしているということである。

植木　それに準じた形式で、真松というのは立ち上がっている。

木下　空間的にはちょっと狭いが、ゆとりはあるだろう。

村上　次の回は来年の1月か2月頃としたいが、そこでは山の形態を決定するというのが一番の目的であるが、それと併せて、人形の目線の話などを含めて、植木委員の仰った載せ方の案を、半年の間で、案として出していきたい。各委員とも個別にお話をして考えていきたい。

懸装品に関しても、藤井委員、吉田委員とお話をしつつ、図柄の候補が出てきたら、具体的に同じような図柄を探して、簡単なスケッチを作るようなところも、春頃からできるようにしていきたいと考えている。

1月の下旬から次の6月までの間で加飾の方の、懸装品と金工品の図柄等に関して検討していきたいと考えている。それから、来年の6月初旬から7月19日、閉幕はお祭りの関係で決まるが、歴史資料館で鷹山の復興支援展示を開催したいと思う。

話が前後するが、明日、今現在ある御神体人形の部材を歴史資料館に運んで、再調査をしたいと思う。人形の部材の調査をして、来年の6月に展覧会をやる。その前に第4回検討会を行って、第5回検討会を秋に。ここで最終基本設計の確認をした上で、報告書の原稿執筆を開始したいと考えている。こういう大まかな計画でよろしいか。

（各委員、承認）

植木　このペルシャ絨毯はどういう資料か。よければ懸装にしてもという話か。

村上　所見を藤井委員にうかがいたい。

植木　胴懸（前）として、今、仮に図面が引けたらとして、どのくらいの高さになるか。

木下　舞台の高さは約4mほど。

植木　胴回りか。

木下　そうである。

小島　絨毯を吊るものの長さで調節できないか。

木下　あんまり我々も採寸してないので。

藤井　これは前懸か。

植木　どこにどう使うかは、前懸が一番無難かと。小さいなら額縁で調整できるけれども、大きければ昔のようにズタズターっと切ってしまうのか。前懸になるとして、山の大きさが問題だろう。

藤井　ご町内所有になっているのか。

山田　個人所有。役に立つなら、寄贈を考えていると。

藤井　昭和60年（1985）に購入されているので、製作者もわかっている。それ以前に遡れる、現代ものである。それが懸装品としてどうかという議論はできると思うが、この物自体について少し付け加えておきたい。

絹の経糸の両端の房がボロボロとしている。普通はそれぐらいの年月で、絹がそうなることはない。絹が劣化する一つの要因としては、精練の時のアルカリが残っている。もしくは、これはいい絨毯なのであまりないとは思うが、完成した絨毯類を洗剤で洗うと、そのアルカリが残る。そうすると絹を破砕していくことがある。そういった経緯が、多分あるのではないかと思う。上部も粉砕していっているようなので、多分芯に巻いているものから湿気でアルカリ性が発生して、粉砕しているのではないかと。ただ経糸に関しては、房がこちらもあちらもそういう状況になっているので、現時点では織り上げという、非常に細かい織りがされていて、その組織によって全体がもっているが、経糸はいつでもちぎれるような状況になっているのではないかという懸念がある。ただ幕にした場合、それがどこまでもつか。幕にするとぐるりも着けるので、その時に裏打ちとかの手立てをすれば、もたせることはできるかもしれない。ただ、今後長く、健全な物としてという考え方では、少し無理がある。一時的に使えるものとしてということなら、可能かと。

植木　スタート時点では、使って…。

藤井　何か出てくれば、変えなくてはならないことも生じてくるだろうし。かなりぼろぼろ。たった数十年でその状況になっているというのは、余程ひどいアルカリ性か何かにさらされたのでは。

植木　使用するには仕立ての工夫がいるということか。

藤井　多少そういうことである。

植木　図柄を横にするわけにはいかない。

藤井　やはり縦で。

植木　前か見送か。見送ではちょっと、小さいか。

藤井　見送ではちょっと小さい。

植木　もし使うならば、前懸か。

林　仮に、御神体人形が新しい装束を纏って、相当美しいものになったとして、その時に、山の前面にこれが懸ると、これがいい悪いではなくて、大変色が地味に見えると思うが、その違和感というものがどうだろうか。縁（ふち）がペルシャで明るくなるかもしれないが、上が有職風で優雅なものになる時の、違和感を考えなくていいのか。

植木　結局、裂（きれ）をどうするかというのは、お金がかかってくる問題である。裂に対する計画のなかで、使えるか、使えないかという判断になってくるかと思うが。

林　いつか復興する時にこれを飾りたいという、町内のお心もちであれば、考え方は変わってこようが。

村上　所有者からは、使ってもおかしくないものかどうかのご判断をいただきたいような話であった。それは大丈夫か。

藤井　品格の問題か。堅牢性から言えば、多少問題はある。洗ってアルカリを抜くこともできないこともない

が、洗った時に糸が溶け出していくこともあるので、危ない。

植木　寄贈を受ける時に、使わないわけにはいかないだろう。だから寄贈を受けるなら、当然、実際山に懸けるという、そういう含みでお願いすることになろう。その辺りは、最終的にはご町内の予算計画の問題になると思うが。

山田　皆川月華の見送があるが、あれも昭和 50 年代に、町内で復興の話が盛り上がった時にご寄付いただいたという形なので、もし使えるなら使えたらと思っているが。

植木　月華の幕は見送にふさわしい大きさか。

村上　小さい。ただし、後ろに山（洞）をつけるのであれば、いわゆる鉾や山と同じような、見送の大きさが必要かどうか。

植木　その辺りは、懸装品の新調計画で総合的に考えていただければと。

使えるならとりあえず、これを幕に仕立てたらと思うが。将来的には替えがあってもいいのだから。ただその時に、現状のままというわけにはいかない。そのあたりの事前の申し合わせというのは必要ではないかと思う。

福井　替えはいくつあってもいいので、その見送も使われたらいいだろうと思う。私は基本的にお飾りは、いいものであれば、その当節の流行りのものでいいと思う。50 年くらいたったら変えれば、という柔軟な考えでいくべきで、金輪際これというように思わなくていいと思う。

植木　従来の模様がこういうもので、こういうものだった、ということにこだわる必要はないと思う。現代の工芸を代表するような、レベルの高い染織品であれば。それが一番僕は望ましいと思う。だからこれは、オリジナルで織るということだけではなくて、広く海外から眼鏡に適うものを購入して仕立てるという考え方もあると思う。その辺りは、多様な考え方があるだろうと思う。

だから「古くはこういう毛織物を懸けていた」とかいうことにこだわる必要はない。遺留品を懸けるというのではないので。その辺りは染織のお 2 人の委員の力を積極的に借りてご意見を出していただいて。場合によれば、現代世界の工芸からセレクトして、一匝つくるというのもあり得るなんじゃないかと思う。それは多分、織るよりも安いだろうという気がする。

藤井　当時でも買われて数百万、多分 500 万円を超える金額を出しておられると思う。

植木　毛氈なんかでしたら、かなり高級なものでも 100 万…。

藤井　現在ベストなものを作るとなると、こんな大きさでも日本製で多分 1500 万はかかる。それも調達するとなると大変だろう。これも故障部分はあるというのを承知の上で進めたら、だめな時は取り替えられる。月華の幕にしても。そうでないと、最初に構造物以上に金額の負担が一気に来てしまうので、段階的にうまく、最終的にベストにと考えながら、臨機応変に。そういう形が現実的。

大船鉾には幕があった。あの幕を最初から揃えるとなると、かなりの金額が掛かる。そういうところはうまく運んでいただけたらと思う。

植木　計画からいえば、とりあえず曳山の形式、平面舞台の確認、人形配置の検討。次は加飾。懸装品をどうするかとか。あるいは将来の金具などをどうするかが次の段階。

そこまである程度のマスタープランに近いものを出しておかないと、おかしくなる可能性がある。修正は当然ありである。基本計画には、加飾部分まで含めて、方針を盛り込む必要があるだろうというふうに思う。それは第 3 回以降の議論だと思う。その時に懸装の方針は、こういうテーマ、こういう形で、こういうふうに、専門の委員にも意見を積極的に出していただければいいと思う。

村上　大体以上である。復原、加飾に関しては基本設計で、尚且つ復原想定図が描けない限りなかなか世間にはアピールしづらいだろう。とりあえず、こんな感じで復原というのはお示ししないといけないので、1 年後ぐらいにはそういう形にしたい。

（以上）

第 3 回

日　　時：平成 29 年 3 月 8 日（水）午後 3 時

会　　場：祇園祭山鉾連合会会議室

出　席　者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、久保智康、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府文化財保護課（向田明弘）、京都市文化財保護課（村上忠喜、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔協力者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

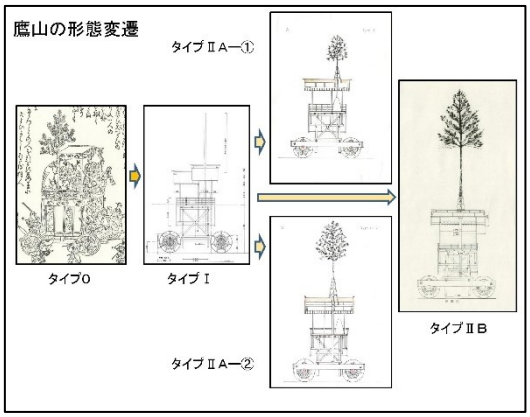
1.　**開会**

（略）

2.　議事

植木　本日の眼目は、木部の 4 タイプから、サイズも含めて形態を決めるのが 1 点。次に懸装品の具体的なデザインに関して、今後どう進めて行くか。この 2 点である。第一に木部の形態に関わる問題について、村上係長から説明いただきたい。

村上　木部に関しては、後程、京町家再生研究会の木下氏から説明していただくが、先だって根拠とした文献と鷹山の形態変遷について説明させていただく。鷹山の形態変遷には、いくつかのパターンがある。タイプ 0、タイプⅠ、タイプⅡ。タイプⅡは A と B に分かれている（挿図 1)。



挿図 1「鷹山の形態変遷」村上 忠喜

根拠の史料を別に示した。

鷹山の形態変遷は、宝暦年間の日覆をつけたものから、天明 2 年(1782)にタイプⅠへと、それが文化 7 年(1810)にタイプⅡA の①か②、あるいはタイプⅡB になる。天明 2 年に鷹山が、前後に分かれた大屋根をつける。それが、天明の大火の後、寛政 10 年（1798）に曳山に復するが、屋根型は天明 2 年の形式を踏襲している。その間、寛政 6 年（1794）には岩戸山が大屋根で巡行復帰している。寛政 8 年（1796）に南観音山が巡行復帰。この時、大屋根かはわからない。南観音山の史料では、大屋根化の時期はよくわからない。ただし、この前後であることは確かかと思われる。寛政 9 年（1797)、北観音山が大屋根で巡行復帰。この時の大屋根は、側面が絹張りの障子屋根の可能性が高い。

その後、鷹山が前後屋根の形式を廃し、大屋根化したのが文化 7 年。文政 3 年（1820）に屋根の塗り替えをして、文政 9 年（1826）に最後の巡行となる。

参考までに、文政 11 年（1828)、北観音山が大屋根を新調する。その屋根が現在に続く形である。その後、胴組や石持を新調している。

寛政 6 年に大屋根化した岩戸山の場合は、補助柱が 4 本ある。南観音山は、四本柱があって補助柱が 2 本。北観音山が四本柱だけで運行している。曳山が大屋根化したときに真松も高くなっただろうが、鉾のように禿柱で支えることができない。補助柱や補助材を使って動かすようである。

衣棚町文書に、元文 4 年(1739)から文化 11 年(1814)までの、祇園祭の入費、払いどころの経緯を書いたもの[文献 9]があり、これを集計した(第 1 章「1 鷹山の歴史」表 1)。銀本位に換算しているが、これを見ると、天明 2 年の山屋根新調に膨大な支出がある。曳山化の時もそうである。粽の売り上げも増えており、対応関係も出ている。問題は、文化 7 年の屋根新調時に胴組を大きくしたかということで、それだけの支出はない。北観音山は、屋根をつけて棟が大きくなったので、胴組を大きくしたのだろうが、鷹山の記録では出入り帳がないので、ここから先はわからない。

胴組との観点では懸装品、特に天水引は、屋根の形式に関わってくる。懸装品の表（第 5 章「(4) 懸装品意匠対照表」）でわかるように、天水引は前と後ろに分けて記されているが、文化 7 年以降には一本化されており、前後屋根が一つの大屋根になっているのではないかと思われる。

次に、町家再生研が十数年かけて行っている木部の調査資料を踏まえ、タイプの区分けと数値根拠について、文書史料では限界があるので、経験を交えながら説明いただく。

木下　町内の文書にあった部材預り帳や、部材修復の帳簿の中で、形態変遷とどう対応するかを考えてみた。

我々は 10 年ほど、祇園祭の山や鉾、舁山の調査をさせていただき、また約 2 年間で舁山を 5 基ほど新調する設計を担当させていただいた。そこから、山、鉾、曳山の 3 つがどういう区分で分かれているかを、文書との対応を見て、その当時の山がどうであったか、復原案をいくつか用意した。絵画史料と文献の部材表との関係が、そのまま繋がらない点と、前屋根と後屋根という文言が出てくる、タイプⅠをどうするかが一番悩んだところである。

預り帳の覚え[文献 5]に、石持の絵が出てくる。石持のなかに二重線で 4 箇所、罫書いたような所がある。現在の石持を調べても、そういう線は縦には出てこないが、中の 2 本線がおそらく櫓の柱の線に対応するだろう。外側は車輪の位置。

それらを類推して寸法を見ると、舁山、いわゆる役行者山のようなタイプと、同じような寸法の柱が描かれている。それも垂直に描かれている。櫓は前後左右ころびがあるのが普通だが、山の中には垂直に柱を組み立てたものがいくつかあった。柱の太さは 96cm 角と文書にあ

る。それを組み立てながら、タイプ 0 からⅠへ、柱が 4 本から 6 本に増えていく。もともと屋台の前部分に 4 本だけ柱があり、簡単な屋根がかかっていて、山の方には屋根がなかった。前の部分を拡充するように、後ろの屋根が付いて 6 本柱になったのだろう。文書の中に、「屋根の枚数前八枚、後ろ六枚」という文言であるとか、「千鳥板が六枚」、「梁が七本」「束七本」とか、そういう文言がある[文献 26]。それらに対応したものを組み立てると、前後の屋根の高さは別にして、タイプⅠのようなものが想像される。

火災になってから一度、舁山で出る、という文言がある。曳山と舁山の差は、櫓側に頭貫、一番上に貫が前後左右等に、頭貫、中貫、腰貫という 3 段の貫がある点である。中貫に対して、担い棒を下に通すと舁山になる。曳山は腰貫を大きくして、石持に載せ、屋台が載る。櫓の上に舞台を組み立てて柱を通す。上部と下部構造が、そういうバランスでできる。

タイプⅠからⅡの間、おそらくタイプⅡAに見えるような石持の寸法が、タイプⅠからⅡに変わっていくが、当初の石持の場合は385×182×542で、非常に薄く軽い、長さも短い石持が使われていた記録がある。それが、天明元年の「鷹山家台修復」[文献 8]では、少し大きな石持を購入した記録があり、1 尺 6 寸×8 寸、長さが 2 丈 1 尺×3 丈 1 尺と記載されている。はっきりしないが、石持を大きくすることと、車輪などが大きくなって、櫓の寸法が大きくなることで、10m の高さの真松が支えられるよう構造変化するのだろうと類推される。

最初のタイプⅠの場合は、やや細い芯柱が後ろ寄りについている。それは各山同じであるが、後ろ側で立ち、切った松を上に着ける。高さは 6.8m ぐらいと類推して描いている。

タイプⅡに至って、棟木から上に 10m となっている。生木でかなり重いため、鉾に近く、櫓の中心部に寄ってこないと転倒する恐れがある。それと石持の基材が、松やケヤキなどの比重の重いものを使わないと、バランスがすごく悪い。

タイプⅠは、上部の松の低いスケッチをしているが、その部分には囃子方 3 名くらいと人形と洞籠が載ったくらいの形で、やや軽かったと思う。タイプⅡの四本柱にして、囃子方の人数がもっと乗るようになると、下部構造が非常に重くなってくる。車輪も現在の直径 1、935 を、設計図では入れている。タイプⅠでは、直径 1、805 となっているが、車輪を船鉾から借りたという記述を根拠に、船鉾で一番小さな車輪の大きさを入れてある。このようなバランスで進化の過程を説明できるかと思う。

舞台の寸法は、タイプⅠでは縦横 3、214×2、333 という寸法が記載されている。菊水鉾の櫓を借りて四本柱を挿し通す設計をしてみると、タイプⅡB のような、北観音山の舞台に近い寸法になる。3、300×2、450 が舞台の手すりの外袖であったので、いま現在の南観音山の 65mm を採ると、先ほどの修正値になる。

最後にもう一つ。いま四本柱で設計しているが、それは北観音山を参考にしている。岩戸山、南観音山は屋根を大きくするプロセスが、進化の記録のように見られる。南観音山には 2 本の柱が中央の梁を支える形で、岩戸山には前後に 4 本、2 本ずつの柱が中屋根に、それぞれ残っている。それは普段、赤い布を懸けて、外から見える黒塗柱にはなっていないが、そういったプロセスが残ったものだと思う。

鷹山は北観音山のような四本柱にするとよいのではないかと思う。その場合、下部構造は、四本柱の下に、足固めが縦横に絡み、それが 4 方の枠に繋がっているという違い。それから、禿柱のある鉾のような火打ちという材料が、北観音山には仕込んであると考えられる。今年の夏に諸点を確認しながら、最終設計をさせていただこうと思う。

村上　タイプ分けについて補足がある。タイプ 0 は復原の想定外だが、表との対応で提示した。タイプⅡA はいろいろ議論を尽くし、山の取り方が難しいので、タイプⅡA－①は真松が低く、タイプⅡA－②は真松が高い。表はタイプⅡA の中に①と②を分けてある。

植木　基本的な調査結果を踏まえて、形態変遷についての話があった。具体的には史料、並びに部材から割り出していった変遷となる。特に史料では、柱の数が 4 本から 6 本へ、最終的にはまた 4 本へという形になっており、それに対応して石持の大きさにも変化があり、次第に大きくなった。

タイプⅠと、タイプⅡの 2 つに大分でき、洞と人形飾りを活かす曳山の形態ということに係わって、タイプⅡの現在の曳山の形式となると、基本的には人形を活かす観点が飛んでいく。その辺りが、議論の柱になると思う。細かいタイプ分けを言っても仕方ないので、基本的に山洞と人形を活かす形態と、現在の四本柱の曳山の形態。この大きな仕分けの中で、議論を進めれば、整理しやすいだろう。以上について、積極的に意見をいただきたい。

小嵜　タイプⅠのような前後に屋根が分かれる形は、絵画史料では出てこないのか。

村上　出てこない。

植木　タイプⅠ、Ⅱについて特に疑問はないか。なければ、残されている人形飾りを活かすかどうかの観点から、少し議論を頂きたい。

西村（吉）　人形が主体なので、タイプⅠでも面白いと

は思う。ただ、祭自体を再建しようとしている人を中心に考えると、お囃子が乗る方がいいかと。町内の意見だが、お囃子が 45 人いて、再建を担っているので、伝統的なものとは関係ないが、祭を動かすのは人間という観点なら、なるべく人形よりお囃子を主体にする方がいいのではという気が個人的にはしている。

植木　町内からは囃子優先という意見が出た。人形についてはどうお考えか。人形を外さないと囃子方はフルメンバーでは乗らないだろう。

西村（吉）　スペースは認識できていないので、できたら人形も載せてとは思う。全く人形なし、ということではないと思う。

西村（健）　御神体は絶対山に載せるべきだと思うので、その中で最大限の舞台の大きさを確保していただければ。御神体も載せて、人がどれだけ乗れるかで、やっていけたらと思う。

植木　とりあえず残されている人形を活かす、という前提で、あとは残されたスペースで囃子をできるだけ乗せていくという、保存会からの意見である。では、人形飾りをどう活かすか。例えば、形態的には 2 択 1 案、あるいはⅡA－①でもいい。形態的には特色があって大変面白いだろうと思うし、山洞があるので、人形の配置もそれに応じて自ずと決まるような気がする。忌憚のない意見をお願いしたい。

林　保存会の思いはあるにしろ、私はまず御神体ありきでこの場にいる。やはり御神体を奉じて、それを囃子ながら屋台が動いていく、というのが本来だろう。それから、この木版画[絵画 14]はいつの時代のものか。

村上　宝暦である。タイプ 0 は提示したが、復原案では論外である。

林　過去に 3 体の御神体がどういった形で載っていたかは全く分らない。この絵で見ると鷹遣が前の方にいて、樽負が真ん中ぐらいにいて、粽を食べているのが山の後ろから、まったく脇から外を見ている感じである。そういう風に 3 体をばらばらに載せて、その間に囃子方が混在するのか、前の方に 3 体を押し立てて、後ろの空間を囃子方とするのか。どちらかと言えば、お祭の山車はどんな山車人形が載っていて、その趣向が山そのものの特徴になるので、やはり私の立場としては、人形飾りが目立たないよりは、はっきり目立つように前面に押し立てて、後ろの空間全部を囃子方が使う方がいいのではないかと思う。

植木　いま人形の専門の立場から意見をいただいた。これについては、保存会も基本的には異存はなかろうと思う。人形配置は、これから決めなければならないが、タイプⅡB なら、結局適当に配置する以外にないと思う。タイプⅠでいうと、山洞がポイントになるから、人形の位置も自ずと決まるだろう。構造上、タイプⅡA－①と②は松の高さが違うが、平面図的にもかなり違うのか。

木下　それほど差はない。古文書の方は、けっこう大きく、ほぼ現在の他の山に匹敵する広さがある。板割とか描かれていたが、構造と合わないので、平面図を下げた。板割のところに人形を建てる穴を彫るという案もあったが、ここでは提示していない。欄縁周りは十分囃子方が並べる間合いになっている。人形が主体のつもりで、私どもは計画している。

植木　平面的に大きな違いがないとなると、タイプⅡA－①か②という話になってくるかと思う。山洞を活かすなら、洞から松が立つⅡA－①。タイプⅠからタイプⅡB にする中間に位置するような変遷の形。これはいま、祇園祭にはない。そういう意味では、非常に特色のある形態である。史料的にも一応の値打ちがあるということで。ただちょっと松は低くなる。

木下　松の位置が後ろ寄りになるので。あまり高いものを後ろ寄りにするのは、バランスに問題がある。

植木　バランス上の問題はある。

西村（吉）　タイプでいけば、Ⅰの方がいいわけか。

木下　なぜか四本柱で、後で大きな屋根がかかったと。鷹山の衣棚町文書によるといち早く、北観音山よりも先に大屋根をかけたという記録にも繋がるので、変化したのではないかと思っている。

村上　前後屋根というのは、懸装品も違うので、歴史上鷹山だけの形のようである。鷹山が祇園祭の曳山の大屋根化の先例となっている。Ⅰは、前後屋根のどちらが高いかはわからない。それと、大火後にまた前後屋根の形が復興している。大火後の寛政 10 年（1798）、前後屋根に付け替える時に、岩戸山は一つの屋根に変わっている。鷹山は一つ屋根で復興してもよかったのに、前後屋根で復興している。

植木　岩戸山の場合は、御神体人形が屋根の上に載っているから、屋根下の空間に大きな問題はない。鷹山の場合は、かなり大きな人形が 3 体ある。それを考えると、平面の大きさをどうするかということになる。

前屋根・後屋根の 2 つのタイプというのは、船鉾の形と一緒である。前だけ仮屋根を付けていたところに、後屋根が付くという変遷をしたのだろう。もし平面的な大きさに問題がなければ、前後の屋根型か一つ屋根にするかの選択肢が出てくるのではないか。一言ずつ意見を頂きたい。

藤井　私は人形が乗るものだという解釈をしていた。現場ではないから面積比がわからないが、どれくらい囃子方が乗れるのか。人形の配置によって人員が変わるだろ

うが、見込がわからなくて、申し上げにくい。

久保　前回、どこまで決まったのか、承知してないので、コメントのしようがないが、タイプⅠ云々、人形の問題はおっしゃる通りだと思う。史料根拠、つまり文書がどういう記述か。文書の記述から話が始まるので、結果の話だけ聞かされても。

植木　前回、史料批判をして、第一級史料をまず押さえるべきだと。基本となるのは町内にある出入帳か。

久保　ここに提示されている史料がどの記述に基づいて、どの絵が描かれているかの説明をしていただきたい。史料が報告されているのに、どこの記述が根拠になって、柱なり構造なりがタイプ分けされているのかがわからない。要するに、史料の読み方。ひとつひとつの書かれていることが解釈で話をされているので、わからない。

村上　放下鉾のように図面が残っているとわかりやすいが、それはない。木材の図があったり、あるいは材の長さなどを書いたものはあるが、図面はない。

久保　素朴な質問だが、先程、絵にはないが、前後屋根が天明にあると説明があった。史料のどこに記述があるのか。それを教えてもらわないと分からない。

小島　史料は１つではない。それらを拾い出して根拠にし、結果としてまとめを提示している。

久保　結果だけを聞かされてどうか、と言われても。検証の過程がどういう史料に基づいているかわからないので。

木下　（典拠の説明、略）

村上　図面化しているが、史料は断片的なので、木下委員の経験値で大きさを入れてもらっている。タイプⅡBであれば、大きくしないと持たないとか。経験値の根拠は示しがたい。

久保　その設定根拠が史料に基づいたらどうなのか、という、極めて単純明快な質問であるが。

植木　出入帳でいけば、要するに二重屋根で、障子屋根ということだったらしいと。

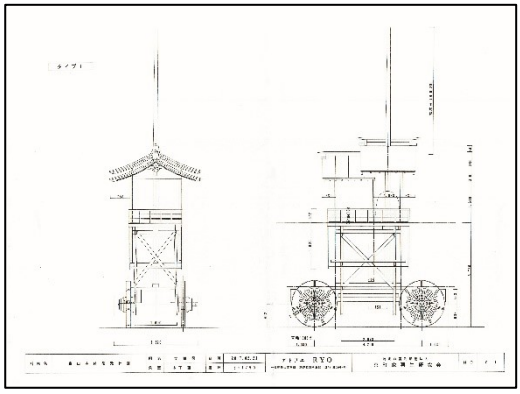
久保　障子屋根という言葉は。障子屋根というのは、北観音山あたりにも出てくるのか。具体的にイラストでもあるのか。

村上　北観音山の大屋根自体は文字で、布張りだったと。

久保　タイプⅠの具体的な文書記述の根拠、あるいは絵の表記。それらがどう絡まりあって、ああいう構造の屋根になっているのかということがわからない。

植木　必ずしもきちんとはでてこないが、一応の基本的なデータに基づいて、経験値を加えていくとタイプⅠとⅡが導かれたと。そのあとはほかの状況を踏まえての相関的な考え。

木下　さっきの文言に準えて描いてみたスケッチがある（挿図２）。



挿図２「鷹山本体復元計画」タイプⅠ　京町家再生研究会

「鷹山道具類預り覚帳」[文献 26]と合わせて見てもらいたい。

久保　「あゆミ屋根」というのはどういうことか。

村上　わからないが、この部材帳は山建ての部材も入っているので、おそらくは足場ではないか。「あゆミ」なので人が歩いているという風に判断して、図面から外している。

木下　「屋臺之部」を正確に起こしたものである。表屋臺の棟木が、前の屋根が１本、後ろは松で分かれているので２本、棟桁１本、後ろ２本というのも同じである。表軒２本。こういう数字を拾っていった。表後にも分かれている。束７本。７本梁が渡っているということである。内は「束三丁」というのは、束のところの３丁。千鳥板というのは束を挟んで２枚ずつ破風が３か所あって６枚。下魚は前と後に２枚。後屋根内垂木４枚。但し桁２本。そういうことで、二段の屋根を構想した。水引の文言と対応させた。前水引後水引という文言があったので。

村上　天井の梁の幕。

木下　天井の布が２枚というのと、そこにあせり板のようなものがはまっているというのが、上下の桁と長押の間に入っていると。そういうことである。

久保　「千鳥板」とは。

木下　破風板のことだと思う。昔、千鳥破風というのがあって、この場合切妻になっているが、いわゆる入母屋の破風板のことをそういう風に呼んだ。

久保　千鳥破風があるわけではないか。

木下　それに似たようなスケッチがあるが、そういう形はふさわしくないかと。

植木　史料的な読みの限界があるので、結局は経験値を組み合わせないと、なかなか具体的な形にならない。史

料を踏まえて出してもらったということで、了承いただけないか。

西村（吉）　運行に対してのバランスはⅡBの方がいいのか。

木下　真松が中心に寄って来れば。左右の揺れを、火打ちのようなものをうまく四本柱の間に差し込んでいる。それがちょうど鉾と山の間にある構造だと思っている。

植木　今の山を見ていると、曳山は全部鉾化を目指している。鉾柱、真柱が基本で、下までずんと通して、屋形を組み付けるというような形態。そうではなく、山にはこういうものが載っているという構造である。そういう観点で、二重屋根を持つ。しかも、洞というのは非常に特殊。形態的には面白い。御神体を活かす上でも正しいのではないか。ただ、全体に松の高さがでてきて、それはやむを得ないところだろう。その辺りを含めて、いかがか。

吉田委員（以下、吉田）　今回が初めてなので、分からないことが多くご教授いただきたいが、史料を見たところ、根拠として、年代が未詳のもの、天明元年（1781）のもの、文化11年（1814）のものを使っている。ものによっては、タイプⅡのものと年代比較したもの、例えば舞台であると両方とも年代が一緒のものが使われていたりもあるが、全体としてはⅠの方が古いというのがわかる。

祇園祭というのは、当然のことながら変遷していると思うが、現存している、巡行しているものは、どちらかというと古いものが残っているのではなく、比較的新しいものが残っているのではないかと思う。そういうものが巡行しているなかで復原すべき形というのは、古いものではなく、他のものと年代が近いものがいいのか。それとも、こういう古い史料で復原する方がいいのか。各委員はどのようにお考えなのか。

村上　曳山は鉾化して、縦に伸びようとしているので、下が大きくなっていく。ただ、鷹山には懸装品がないので、タイプⅠでも、横に広がるコンセプトなら囃子方も乗れるし、人形も載れる。そういったことは可能になるが、やや恣意的に過ぎる。基本的には縦に伸びる。だから、岩戸山の人形の例がある。その時代までいかずに巡行を止めた鷹山が、どこを目指されるかだと思う。

植木　基本的には祇園祭の山鉾は4つのタイプがある。「鉾」という真木が中心にある構造のもの。洞に松を建てるという本来の山のスタイルのもの。山を持たない鉾も持たない、文字通りの人形飾りを中心とした、いわば作り物を中心とした山のもの。囃子ものという傘鉾を中心としてお囃子のつくもの。以上、4つのタイプが祇園祭の大きな特色である。1種類ではなく、本来的な山鉾の屋台の歴史を反映するような山が祇園祭には現存している。これは最大の特色だと思う。

山の場合、鉾化を目指して次第に大きくなり、山はお囃子を持たないので、次第に、お囃子を持ちたいという思いがあって曳山化していく。

歴史は歴史として、一番最後の新しい曳山の形に合わすというのもある。その辺りには必ずしもこだわらないというのが前回までの議論の流れで、一番基準になる史料を押さえて構想を立てていくべき、という合意に至った。それを踏まえての今回ということで議論いただきたい。

小嵜　前回の会議後、絵画史料を個人的に調べてみたところ、華山本で一部禿柱を間違っているところがあるにせよ、他の山鉾の描写を見ても、説得力がある。いくつかのパターンを出してもらっているが、タイプⅠでやるとして、この時代の史料で他に染織品などの信頼できる史料がどれだけあるのか。全部想像でいくのか。全体的な史料の残り具合を含めて、タイプを決めていく必要があるのではないかと思う。

福井　先ほどの吉田委員のご質問については、以前お話ししたと思う。きっと山鉾のスタイルというのは、植木委員長のご指摘のような経過をたどって来たと思うが、結局お祭りに参加する人間が、やりやすい形で変化してきている。ただし、林委員が言われるように、御神体を奉持するというのは、大目標である。だから、御神面を奉持する唐櫃が認知されている。それが第一ながら、できるだけ現在に近い形で再現をされるのが一番妥当なことと思う。囃子方がどれくらい乗れるかというのは、工夫で目一杯乗ったらいいわけで、それは現場の問題。形態については、大屋根でもって、もちろん御神体を載せて、人間は付け足しでできるだけ乗る。こういう考え方を決めた方が、話が進めやすいと思う。

植木　ただこの絵（華山本）は天保5年で、鷹山はもう出ていない。だからこの絵の史料性がそれほど高いとは思えない。実際に写生的に描いたのかどうか。他から推定してこのように描いた、という気がしなくもない。

小嵜　他の絵画史料は検討する必要もないと。

植木　画像史料の読み方の難しいところではある。

小嵜　当時の文献や水引とかに照らし合わせても一致している。どこかに欠点はあるので、どこを拾っていくべきかでしか動いて行けないと思う。拾うべき絵画史料はどれかということで、以前、冷泉為恭の話も出ていたが、為恭は現実を見て描くタイプではないし、そういうのを排除していくと、四条・円山派あたりの画家はまだしも信用できるのが実態だ、というのが、日本絵画史の人間から言えることである。

植木　基本的な流れとして、人形を活かす。全体のデザインは、最終的にはバランスを考えて構造的にきちんとした形で割り出していく以外ないと思う。細部までは決められない。囃子方がどれだけ乗るかという問題は、結果的に対応していくしかないと思う。大津祭を例に取れば、大津祭は後から祇園囃子を導入したうえ、二輪車から発展した三輪なので、床面積が小さい。しかも、巨大なからくりが載っているから、人間が乗るようになってないところに、強引に囃子方が割り込んでいる。つまり、囃子方の納め方の工夫の問題だろう。人形を活かした山への復原をする、という方向でよろしいか。

そうすると、タイプⅠ、タイプⅡA－①、タイプⅡA－②。この 3 つから選択していくことになると思う。ただタイプⅡA の下の方、洞だけがぽつんとあって大変収まりが悪いように思う。真松はこちらの方が安定するということか。

木下　芯に近づくほど良い。

植木　せっかくだったら洞と真松が一体の方が望ましい気がするが。この場合はむしろ床で止めることは可能か。構造的に、下まで通さないのはいかがか。

木下　10m の松は生木だと結構重い。揺れるのをどう止めるか。

植木　その高さがどの程度必要なのか。

木下　岩戸山でも南観音山でも、真木を屋根の上まで立てておいて、その上に 10mの松を建てている。

植木　真松をそれなりに大きく見せようとなると、下まで通さないと構造的にもたない。

木下　だから、観音山も岩戸山も、真松はまず桧の真木を通して、それに松を上に足すという形なっている。その方がいいのではないか。構造的には安定する。

植木　そうすると、いずれにしてもタイプⅡA の 2 つ。あとは、洞を貫く形にするかどうか。

西村（健）　真松が洞から出ているということで、真松が真ん中、今のイメージより前に出てきて、真松の後ろの空間を囃子方が占めるというのではいけないのか。後ろの空間を有効利用する。それだと、揺れや安定感の話は終わる。ただ囃子方が顔を見せたいときに見送があると顔が見えないという問題だけは残るが。

だいたい御神体の位置が、正面を向いて見栄を切っているというのではなくて、ばらばらになってもいいのではないか。隙間に囃子方がぎっしり入ったら、初めての人は何が何だか分からない。だからこの通り、御神体を固定することから始まるのか、時と場合によって場所が変わるのかで、だいぶ変わってくると思う。

木下　経験から言うと、鯉山で鯉がどれだけ踊っているか見せたい、というのでだんだん鳥居も高くなっていって、鯉のヒレと舞台に上がる方々の位置関係が少しずつ変化している。本当は舞台に上がって様子を見ながら、最後に舞台に穴を開けて挿す方がいいのかもしれない。

林　大船鉾には少し関わっていたが、鉾の屋台ができて初めて巡行で見た時、神功皇后が載っているのを知らなかった。どうして神功皇后が装束も出来ているのに載っていないのか、と思っていたら、実は載っていた。関係のあった私が下から見ていて、神功皇后が全然分からなかった。だから、もったいないと思った。

木下　その代り、龍頭が見えたり。奥ゆかしくていいのではないか。

植木　その議論は今は置いて、結局は、人形飾りをきちんとするという前提で話を進めていきたいと思う。保存会では、見送は必ず必要か。四方吹き抜けで、後ろは洞が見えるのではだめなのか。洞自体を見送代わりにすることも、選択肢としてあり得るのではないか。

西村（健）　前が少々出た方が、後ろが使えるのでは。囃子方の顔が見える。

岸本　例えば絵画史料なり、史料の中で見送の存在が確実であれば、見送をするということだが、それがなければ、必ずしもあったとは言い難い。史料に基づいた方がいいのでは。

植木　人形飾りを活かそうというのであれば、四方吹き抜けの方が見えるのではないか。

福井　しかし、記録に見送とあるようなので。林委員のご指摘もよく分かる。人形の配置が歴史的に高いのなら、そうしたら良い。囃子方はその間に適当に配置して、文字通り神事を行うというのが基本。御神体は、位置がどうも正面に 3 体並んでいるのではなく、絵画史料で確認できる配置に意味があるようなので、踏襲されたらいいのではないか。

囃子方は適宜乗ればいい。どこもそうなっている。長刀鉾の太鼓はお稚児さんの後ろで打っている。だからそれは適当でよい。宵山の時には見送を外しておけば良い。雨が降ってきたら見送を外したら良い。見送は、ちょっとかっこいい、ガウンのようなものではないか。だからどこも競って、良いものを着けた。実際に記載がある見送をなしにするのは、町内が見送を着けたいという時に困る。人間はフレキシブルなので、落ちないように乗れれば良い。本体の人形の基本的な配置、全体の図体の大きさ。それらができるだけ歴史的に近世に近いところで、記録に沿って。大きな屋根が正しければそう決まればいい。

しかし、私も確かに山洞の位置は納得がいかない。下に山洞があって、上の網隠しのようなところが洞にも見える。

林　私は御神体の位置に固執しているわけではない。御神体を各史料の通り、置くという話でなら先ほどの話はいい。

岸本　大津祭へ見送を譲渡されたという記録があって、確かに見送はあった。それなら福井委員の指摘のとおり、懸けるのが筋。絵画史料を見ると、御神体の位置はだいたい決まっているようだから、それも踏襲した方がいいと私も思う。

長刀鉾も囃子方が100人はいるが、100人乗れるわけもない。交代制で乗れればいいし、実際乗っても顔が見えるのは7、8人である。その辺は固執しないで、古来の形にできるだけ忠実にされることを勧めたい。

久保　話の流れが見えてきた。委員には美術史の専門家がいるので、復原案がどう転ぼうが、できるだけそれに歴史的意味付けをしてあげることだろうと思う。復原した鷹山がマスコミに出た時に、「これは何を根拠にしているのか」と必ず聞かれる。その時に、例えば、「舁山からこういう風に大屋根化して、歴史的流れがあって、こういう考えで選択した」というような、説明をした方が、祇園祭の格が上がる。そうではなく、いいとこどりするとか、あるいは「祭りというのは形態が変わるから、その最新形態でいい」というレベルなら、そんな復原の話は日本全国にいっぱいある。

応仁の乱まで遡るお祭りなので、この復原にもこういう歴史的意味があるからこう復原できる、というアイデアを我々は説明する。だからその基本線で言うと、まさに落としどころとしては福井委員の言われたような辺りかと思う。

植木委員長の言われたタイプの3択。タイプⅡA－①、タイプⅡA－②、タイプⅡB。この3つを比較して選べと言われたら、あまり詳しい説明を聞かなくても、迷うことなく私だったらⅡA－①を選ぶ。これならいろいろ説明できる。私は屋台の変遷を研究しているわけではないが、意義を考えると、やはり屋台のなかで洞は中核。外したらいけない。

となると、洞から真松がでるのはどう考えても最優先だろう。だいたい、屋台などの形態はだんだん本義が分からなくなって、状況に合わせて形態変化をしていく。だとしたら、どこに落とすかと言ったら、一番ちゃんといい意味付けできるところの形態に落とすというのが基本。美術史をやっていたら、その感性はみんな共有しているはず。だから、この3タイプの中ではⅡA－①が一番古い形態と言える。

小島　ⅡA－①というのは、言われることはよく理解できるし、それが基本形であるのは共有できている。ただ、技術的に、バランス、安全性などを考えたときに、果たしてこれが可能かというのは再検討しないといけない。重心が他の形と、ずいぶんずれている。どういう形でバランスをとって、上に大勢人を乗せるのか。たとえ人が少なくても、どういう形でバランスをとるのか。運行は、根拠の話とはまた別の、安全性というもう一つの大きな問題が関わってくる。いくら歴史的であっても、巡行する以上人の命を守るということで、きちっとバランスが確保できての最終形態ということでご理解いただきたい。

福井　タイプⅡBは洞が外れているが、たとえば洞の後ろにも人が入れるのか。安全が第一で、危ないことはできないが。

藤井　タイプⅡA－①は、安全性の検討なしに候補に上がっているのか。

木下　松を小さくしており、下の石持も小さいものを入れている。一応、安全だという前提である。小ささが安全性である。担いだという記録がある。つまり、人間が何人かで担いだという重量。

藤井　洞があって囃子方が乗れるということか。

植木　議論としては、基本の形態をどこに決めるかというのが大事なことである。およそ意見が出たようである。タイプⅡ②の方は洞と真松とのずれがあるので外すとなると、タイプⅠとタイプⅡA－①。このあたりで落ち着けるということでよろしいか。

ただ、安全性の問題で真松の立つ位置が前の方に移動することも当然ある、ということだが、基本的な形として、タイプⅠかタイプⅡA－①。この2つの選択肢から絞るとなると、屋根型からか。もし真松が中央に寄ると、例えばタイプⅠだと変な形になるのか。

木下　タイプⅠは文書の記述によって再現したものなので、四本柱になって大屋根になる場合はタイプⅡBの方になる。だから洞があるかないかというのも、非常に重要な話になる。そういう進化の過程をとっている。

植木　御神体を活かすということになったので、タイプⅡBは外れた。安全計算のときに、松の高さに固執するかという問題があるが、その辺りは構造計算の話で出てくるだろうから、とりあえず基本的な形態の候補として、タイプⅠかタイプⅡA－①。

木下　タイプⅡBにも、真松の周りに洞を置く設定はできる。どうしても鷹山に洞籠を設けるべきというご意見があれば、そこに置ける。雉をとまらせたり、犬を置くということも。

植木　洞を無視していることになる。基本的には、屋台組自体が洞に替わっている。ここまでいくと、すでに、人形を飾る意識が後退している。

山田　華山本で再現されるなら、タイプⅡBになるとい

う理解だが、そうではないのか。

小嵜　私もそう思っていた。ただ、禿柱が赤白で描いてあるが、他の曳山もそう描いているので、それは誤りである。

山田　禿柱の間違いはあるが、それ以外は文献史料、華山画とタイプⅡBとは一致すると。

小嵜　似ていると思う。

植木　この記述の信用性は危うい。

小嵜　人形と洞は必ず両立しないといけないものか。

福井　真松に対する正当性が山洞であろう。

小嵜　真松はある。

福井　保存会では、真松の高さはそんなに高くと思っておられないのではないか。この50年間で両観音山ともどんどん背が高くなった。歴史的にいうと山洞があって、山洞の中に真松が立っていて、屋根からすぐのところに枝ぶりがある。安全性のため、どこまで（真松を）中央に持っていくか。保存会が真松の高さに重きを置かないなら、適正なスタイルでということであろう。

植木　何にポイントを置くかということで、真松をポイントにすれば、現在の曳山になる。飾りを中心にして洞を活かすなら、真松は二次的な、見た目の処理の問題になってくるだろう。

久保　もし、華山の表現が的を射ているなら、歴史的に、その意味するところはなんだろうか。やはり大屋根化していくタイミングは、これまでも指摘されていたように寛政年間、おそらく一番早いのは、岩戸山だろうと。寛政年間から文化年間、あるいは文政にかけてと、およそ20年の幅で曳山が大屋根の形態に変化している。鷹山が大屋根化するのは文化7年なので、10数年間での形態変化をイメージしたら、華山の表現は事実関係としてはありか、という気はする。本義が忘れられて真松が高くなるのと同じで、屋根も形態変化する。鷹山はその形態変化のかなり後ろ寄りという前提で、華山の形態、つまりタイプⅡBをチョイスするという説明はつくと思う。どういう選択をすれば、説得力のある説明ができるか。私の先ほどの発言は、3つの絵の中ではこれが古い、いい形態だからという意味で推しただけであって、華山が間違っているとはしない。

　祇園祭の金具についてこの辺のものを見ていたので、私なりに大屋根の形態変化について考えてみたら、10数年あったら、それぐらいの変化はするだろうと思った次第である。

植木　まとめに入りたい。各位のご意見を伺っていると、タイプⅡAの上の形態に落ち着きそうな気がするがいかが。特に異議はないか。松の位置に固執するわけではない。

村上　柱が6本あるタイプである。

山田　話の流れがよく見えなかったが、個人的にはタイプⅡBがいい。華山の絵とも合致する。囃子方の意見も述べてもらう。

西村（健）　私もタイプⅡBが妥当だと思う。

福井　木下委員、これは山洞ありという想定か。山洞の有無は非常に重要である。

木下　山の進化の上でも、山洞が歴史的に重要なのは分かる。象徴的に残すこともできる。

林　鷹山に関しては、山洞に犬が乗る。他の山とは違う必要性があると思うし、安全性という意味での真松の位置は別にして、洞がないと犬の行き場がなくなる。

福井　やはり山洞は必要。上の案で、ちょっと前に寄せて、真松を少し短くしたら、妥当な所に収まるのでは。

西村（健）　タイプⅡBでも洞を載せられるのか。

福井　そうだろう。もう少し真松の背が低くていいのではないか。そうすると山洞の位置が後ろに寄るので、構造や人形配置のバランスは良くなるだろう。できるだけ山洞の位置を後ろに振った方がいいのではないかと。

林　保存会が真松の高さに拘泥しないというなら、問題が解決するのではないか。

山田　真松の高さにはこだわらない。

植木　保存会に確認しておきたい。鷹山の山鉾の復原は、即、国の指定文化財に入るということを意味している。気ままに自由にというわけにはいかない。だからこの委員会が立ち上がった。史料等を踏まえて、こうあってほしいという議論がここでされている。それに対して保存会がどうしても具合が悪いというのであれば議論が飛んでしまう。強制するわけではないが、一応納得できるところまで議論を尽くして基本的な計画が組まれていくということは、保存会に十分に認識していただきたい。

山田　その点は十分理解しているが、先ほどの議論の中で華山の絵と合致しているという話があったので、それならばタイプⅡBという理解をした。

村上　大体結論は出たと思うが、補助柱を入れるかどうか。四本柱でもいいが、その場合舞台の下に、いわゆる火打ちのようなものを入れる。それで四本柱は実現できる。

　真松の下に洞を造る。それは人形重視であるという点。舞台の大きさは決まらないが、デザインとしてはそうだと。今日決まったことをこう理解しているが、それでいいか。

植木　そうである。補助柱の要・不要は、追加で確認してもらえればデザインは決まる。

木下　歴史的進化で六本柱という記述が明確にあり、文

化７年（1810）の頃の記録に沿って、四本柱になるという変遷をたどった。それがタイプⅡＢの出現の意味である。そういう進化と、委員会で議論している復原の目標をどこに置くかということを、考えていただけたらと思う。

村上　ただ、タイプⅡＢに洞がついていたかどうかは分からない。分からないので洞は抜いてあるが、タイプⅡＢに洞が付いたもので合意ということになれば、デザインとして確定できる。

植木　もう一度繰り返す。残った御神体を、いかにうまく活かしていくかというその原則と、洞に立つ山という本質的な骨格というのを、どのような形で抑えていくか。これが一番大事である。そこで選択肢がタイプⅡＢ以外になって、タイプＩかタイプⅡＡになったということである。その中から、安定性の問題で異論があるにせよ、今のプランでいけば、大方はタイプⅡＡに落ち着くのではないかというところまできた。特に異議がなければ、基本的なプランとしてこれで進めていきたいとが、これについてよろしいか。

鷹山保存会　タイプⅡＡ－①は真松の下に山がある。タイプⅡＡ－②は、真松の下に山洞がある。合わせることも、できるのではないか。タイプⅡＢでも、松の下に山洞を設置することは可能と思うが。御神体を尊重するプランもあるのでは。華山の絵の時代には鷹山はなかったということだが、その前の文化３年（1806）の速水春暁斎[絵画 15]の絵では、まだ屋根が二段だったかもしれないが、御神体はあり、屋根の真ん中から真松が出ている。間違っているのかもしれないが、これと華山の絵は似ているし、タイプⅡＢにも似ていると思う。

植木　バランスの問題である。真ん中に真松を置いたら洞をどういう形にするのか。平面全部洞にしないと落ち着かない。そうなると、ほとんど象徴的な形で洞を構想せざるを得ない。

村上　ⅡＡ－①でもいいが、補助柱を抜くか抜かないかで大分変わる。

植木　実施設計の段階まで延ばしてはいかが。

木下　構造は動的な機構である。動きながら土台も揺れる。六本柱を四本柱にする時に、下部構造でいろいろ工夫がいるだろう。絵が四本柱になったということと、それを取り入れるかどうか。後ろ寄りの山、幕があって真松が低いイメージならば、６本のうち後ろ２本と４本の間に洞があるというふうに思える。それがバランスがよいということだろうが、振り戻してそこに焦点を当てるかどうかということも今日の議題だと思える。復原イメージの追求するところがどこかということを議論いただいていると思うのだが。

植木　しかし、四本柱になった根拠はないのではないか。

木下　いや、四本柱になった。

植木　その史料は。

村上　絵画史料しかない。

植木　史料を読んだら分かるが、文化年間に固まっている。四本柱になったという根拠は絵以外にはない。構造上問題がなければ、六本柱で後ろ寄りの洞ということになると思う。ただ、安全優先でいけば構造上落ち着かないなら、変更せざるを得ない。

木下　柱は多い方が安定感はあるが、囃子方の邪魔にはなる。シンプルなほどが人は動きやすい。もうひとつは鷹山というテーマ。風流の主題が、どこから来ているかというと、非常に演劇的な配置に思える。山自体もほかの山とはまた違うストーリーの可能性もある。

植木　結局は、御神体の人形飾りを出すという原則である。

それでは六本柱を念頭におきながら話を今後進めていくということでよろしいか。保存会には不満が残るようだが、調整はどのように。

岸本　今の議論を基礎に、保存会の意向も加えるが、基本は今日決まったことで、進めていく。

山田　もう一度うかがいたいが、タイプⅡＡ－①がいいかと伺えば、挙手が揃うということか。

岸本　委員各位の意見は、タイプⅡＡ－①でよろしいか。

植木　そういう方向で了承いただいたと思う。保存会がⅡＢ。

岸本　最後にもう一度想いを。

山田　委員全員がタイプⅡＡ－①なら従いたい。ただ、我々はⅡＢがいいと思うが、それにご賛同頂ける委員はいらっしゃらないだろうかと。

久保　ⅡＢがいいというのは、どういう意味でいいのか。

山田　最後の形なので、元に戻すのはおかしいのではないか。

久保　最後の形というのは絵画史料からか。

山田　絵画史料と模型からである。

植木　根拠は最後の絵しかない。

藤井　懸装品でも見ているが、それを支持する記述はない。四本柱になったというのは、絵画しかない。四本柱になり、前後がなくなって、水引がどうなったという文献史料はない。

村上　天水引だけでは、タイプⅡＢの根拠にならないか。

藤井　ほかの金具などを含めて、それを証左するものは

ないのか。

村上　わからない。

植木　いくつかのプランが出た中で、御神体をいかに活かすか。山の本質である、洞に松が立つという本質を活かすことを基本に考えることで議論が進んできた。結果として、タイプⅡA－①を基本プランにすることが望ましいと、委員間ではほぼ一致した。ただ、今後実施設計に向けて、安全確保等の諸々の問題のなかで若干、真松の位置が動く可能性はある。全体の山のデザインやバランスで決められていく。そういう協議が行われた。

村上　華山画によるか、柱6本でいくか。

小嵜　タイプⅡA－①は、年表で言うと文政になった段階、19世紀のはじめと考えたらいい。華山の絵は天保5年（1834）ぐらいなので、それより2～30年後の話。要はどの時代に戻すのかという話。19世紀初めに戻すなら、華山にこだわる必要はない。水引等で使えるデータがあるなら使えばいいが、時代が違うと理解したので、ⅡA－①で、私はOKかと判断している。

福井　あとは実施設計の段階で、真松の位置は少し調整し、但し山洞はありとすると。

植木　基本原則を踏まえて結論が出たと思う。

木下　今年の祭で精査し、保存会とも協議して、今日の基本的精神を実施設計に結び付けたい。

植木　平面の大きさと石持の配置の問題がある。石持の位置を下げれば、真松の位置を多少後ろにしてもそれほど影響はないだろう。真松も洞籠の高さも確保できる可能性はある。

木下　大きな石持を発注した史料があるので、タイプⅡの方に近寄っている。そういう歴史的史料もある、洞と真松の関係を重視しながら進めていきたい。

植木　では、基本的な形態については今申し上げた通りとする。この後、懸装品、金具等含め装飾をどのように進めるかという問題が出てくる。鷹山の美観を正すためにも、基本的な形を提示していく必要がある。これについては、どのように考えているか。

村上　懸装品について、大体のフォームは決まった。柱の本数や松の位置などの問題はあるが、装飾品に関しては、そう影響はない。

この検討会に引き続いて、祭のときに曳山の調査を行うが、別途懸装品に関してはワーキングで進めていきたいと考えている。

第4回検討会を6月に予定しており、この時までに布類、金具、御神体人形の3つに分けて、事務局から各委員と直に話をさせていただきたい。そうして大まかな懸装品のデザイン、あるいは配置について、いくつかの案を検討したい。それらを第4回の会議にかけて検討頂き、6～9月の間でそれを反映した資料を準備して、第5回でお出しするという形で進めていきたい。復興や展開力の一番大きな投資になるので、復原イメージを共有できる資料はなるべく早く準備したいと考えている。

要は基本設計なので、こういうものを作らないといけないというのではなく、復原イメージを共有するためのワーキングである。その前提で各委員のご協力をお願いしたい。

植木　次は加飾に関わる問題と復元イメージの検討ということである。そのためにワーキンググループを立ち上げ、具体的な仕事を詰めていく。担当の委員には、よろしくお願いしたい。

時間的には6月に予定されている第4回検討会までに案が提起されるということである。そこで決まった点を踏まえて、復元イメージに反映する。しかしこれは想定のための検討であり、結果としてどうしていくかは、その次の議事になると思う。

それでは、本日の議事の木部については以上である。ワーキングごとに検討するということだが、そのほかここで議論すべきことはあるか。

村上　ワーキンググループについては、「木部」は京町家再生研究会、「御神体人形」は林委員、藤井委員、小嵜委員、「懸装品」は藤井委員、吉田委員、小嵜委員、「金工品」は植木委員長、久保委員。事務局が間に入って、史料を作成・配布し、協議させていただく。

植木　最終的に全体調整をする場はあるのか。

村上　この次の会、6月の検討会議を考えている。そこで承認を得たものを想定図にする。

植木　本日検討事項は以上である。

（以下、報告事項、略）

以上

第4回

日　　時：平成29年6月26日（月）午後3時

会　　場：京都市職員会館かもがわ中会議室

出　席　者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府保護課（向田明弘）、京都市文化財保護課（課長中川慶太、担当係長村上忠喜〈当時〉、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔協力者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

1.　開会

（略）

2.　議事

植木　今回で基本的な復原想定図作成の詰めの段階に入る。基本的には各ワーキンググループ（以下、WG）に分かれて様々に検討頂いた結果を、審議して頂くことになる。京都市から検討結果について細かく報告してもらい、もし漏れがあれば後程議論頂いて、復原案のところまで進めていきたい。

村上　前回の委員会で、次の 3 点が共通理解となったと思う。1 点目は、鷹山は人形をしっかり見せる山がよい。これは大前提である。2 点目は、前後屋根ではなく、大屋根の形、すなわち文政期頃の、巡行の最終形態のものを基本設計とした復原案を提出する。3 点目は、図面は残ってないので、大屋根を乗せて安全性を担保できる形状を最優先する。この 3 点を前提として、前の委員会後、WG をかなりの数をこなしてきた。

（資料説明・略）

まず、この期間中の WG は、すべからく木部の WG にフィードバックしなければならない。金工品や懸装品の WG で決まったことを、木部の WG にフィードバックして、最後に立面と平面の鷹山基本設計図に結実させているということになる。

そこで、まずは、金工品の WG から説明したい。金工品の WG は大津にて開催した。参加者は、植木委員、久保委員、市文化財保護課 4 人である。金具に関する現品は一切残っていない。文書記録に出てくるのは文政元年（1818）『祇園会山鉾装鈔』[文献 17]と、天保 3 年（1832）「鷹山人形他一式覚」[文献 23・24]である。これらの記述をもとに復原イメージを描くしかないので、なかなか難しい。実際、今回の委員会は実施設計ではなく、基本設計図の作成が眼目である。大船鉾の時もそうだったが、復原の形を示さなければ、資金も集まりにくいと思われるし、一般市民に対するアプローチもしにくい。基本設計の委員会において基本設計図を提出するのが、一番大きな目標とするところである。

金工品に関しても、先程の史料 2 点からある程度形を想定しなければならない。金工品 WG では、「実際つくるとなるとどれくらい大変か」という話題が大部分を占めたが、他にもいくつか話がでたので、史料に示している。結論としては、金工品においても、冒頭述べたように文政期の金具類を、復原イメージに反映することになった。ただし、どのレベルの金具に復原するのかは、非常にシビアな問題である。費用がかかるので、相当大変な問題になるというご指摘もあった。金工品を作れる職人も少なく、それも問題ということである。

『祇園会山鉾装鈔』の中に、鷹の角飾金具の記述がある。山の上方四隅に付いている金具で、鷹が「赤総をつかみ翔る形」という表現が文書に出てくる。太子山の角飾りは、飛龍が房を掴んでいる形で、四隅に付いている、非常に豪華な金具である。こういった形のものを今後 WG で議論を詰めて頂いて、デザインを検討したうえで、復原イメージに反映してもらいたい。

他に、四方の角留というのもある。胴懸と前懸の間がまくれないように、2 点を金具で留めてある。それと同じようなことを鷹山もやっていた。かなり贅沢な金具で、蝙蝠形をしている。いわゆる吉祥の意匠である。

今後、最低 1 回は金具の WG を開催して、鷹が飛翔する姿をどういう風に描くかや、あるいは胴懸、前懸の角留のデザインについてなど、検討していきたいと考えている。以上が金具の WG の概略である。

懸装品については、WG を 2 回開催した。懸装品も金具と同様に、文書記録の文言だけでは図柄を想定しにくいことや、どのレベルのものをどう作るかといった費用の問題について、最初いろいろと議論があった。基本設計では、デザインがどのようなものになるかを一般に示す必要がある。

デザインの参考として、華山本がほぼ的を射ているのではないか、という結論になった。横山華山がこれを描いた天保 5～8 年は、鷹山が巡行しなくなって 7、8～11 年ほど経っている。しかしながら華山は、作品を描くにあたり、充分下調査をした跡が京都市立芸術大学芸術資料館に残っている。下絵は前祭のみで、残念ながら、後祭は残っていないが、調査をして図巻を描いた跡が確認できる。制作時には鷹山は巡行には出ていないし、絵には禿柱が描かれているので、この点で実際見て描いていないことは明白だが、天水引と一、二、三番の水引に関しては文書の記述と図柄が対応している。これについては、信憑性があるという結論に至り、天水引と一、二、三番の水引の図柄を、もう少しシェイプアップして、これを基本設計に採用することになった。

しかしながら、この絵でも胴懸から下の方は切れている。華山もこの辺りはちゃんと見ていないか、あるいは現物がなかったか、分からないが、小嵜委員からも指摘があったように、前懸はぼかしてごまかしたようである。前懸のぼかしている部分や見えない部分の胴懸、後懸、見送も分からないため、文書と現在使われている祇園祭、ないしは京都近郊の祭礼幕で上質なもののうち、記録と合致する図柄を出して、そこから検討することになった。現在の祇園祭で用いられている幕類のうち、記述の図柄に該当する作品の中から、どういうふうに考えるかの具体例を WG に出して頂く。今後、図を描くにあたり、WG

を進めて行く必要があると思う。

以上が懸装品の WG の概略である。

大船鉾では A3 ぐらいの大きさで復原想定図を描いた。ただ、大船鉾の復原想定図は、ヨドバシカメラの無形文化遺産展示室で、引き延ばして使われたこともあった。基本設計の図面自体が、マスコミや展示場で引きのばして使用される可能性があるので、かなりきっちりと描く必要がある。金工品を含めた図柄の検討を、9 月までに詰めていきたいと考えている。

御神体人形の WG は、計 2 回、開催した。

最初は、林委員と文化財保護課で WG をさせて頂いた。3 月の委員会ではいろいろな意見が出されたが、WG で議論したのは、大きく次の 2 点である。御神体の舞台上での位置をどうするか、そして、御神体の衣装をどうするか、である。そこに入る前に、鷹山を復原するにあたり、御神体をよく見せるという大前提があるので、御神体を立たせる舞台の高さをどうするか、これについて、林委員と WG を持たせて頂いた。

結果、林委員からは、御神体を見せるにあたり、屋根や舞台の高さはあまり関係ないのではないか、天水引で見えなくなる可能性はあるが、そういうことではなく、舞台上の配置を考えるべきではないか、というご意見を頂いた。他にも、鷹遣は左腕に鷹を乗せているが、その腕を舞台から突き出させる、といったご意見、または、御神体人形の現在の背丈は、鷹遣が約 180cm、犬遣が約 170cm で、背が高すぎるのではないかと考えていたが、人形のバランスからいうと大き過ぎるわけではない、人形はかなり大きいものだったのではないか、というご指摘もあった。

そういったことを踏まえて、第 2 回 WG を開催した。出席者は、林委員、藤井委員、小嵜委員、市文化財保護課であった。御神体人形について、現在、鷹山展示会を京都市の歴史資料館で開催しており、前委員会でも、絵画史料を提出してご説明させて頂いたが、中世から近世中期までの、鷹山の御神体衣装は現状の貴族風のものではなかった。袴姿であったり、髷を結った姿であったり、当時のふつうの服装をしていたものが、近世中期に狩衣・水干姿に変わってきた。鷹山の文書にもあるが、有職柄を使っていたが、徐々に、能衣装の柄に変遷したというご指摘があった。

鷹山保存会所蔵「鷹山御神体人形図」[文献 22・絵画 17]は、天保 2 年（1831）の作で、鷹山が巡行をやめて 5 年あまり後のものであるが、記録しようという強い意思を持って描かれていることが明らかなので、この図柄で復原想定図を作るべきだという意見で一致した。

今回提示したものは、中川氏に、絵画史料を用いて、林委員と何度かやり取りをして頂き、仮の配色で描いてもらったものである。実際の制作の際には、再度 WG 内で色目の調整をするつもりである。今の衣装とは全く違うのがわかる。以上が、衣装についての現在の到達点である。

また、雉は遺品が残っておらず、犬と鷹は、明治期の作である。御神体人形のうち、古いのは、首と腕だけで、これらは使用する。補足であるが、人形 WG で前提としたのは、今現在使われている首と腕を使用すること。加えて犬と鷹も、使用する方向で考えるべきだろうことである。衣装は保存会の意向もあるので、保留にしている。基本的には現在あるものを使いながら、衣装をグレードアップしていくという方向で話が進んでいる。

木部との関わりで問題になってくるのは、御神体人形の配置である。南観音山・北観音山は、観音像が 1 体である。岩戸山は 3 体であるが、それぞれが小さくて、尚且つその内の 1 体は、屋根の上に安置されている。鷹山では、すべて舞台上の平面で処理しないといけないので、御神体人形を平面にどう配置するかについて、WG ではいろいろな意見がでた。加えて山について、前の会議では、真松の下に山を置くと決まったので、その処理をどうするかという議題が出た。

まず御神体の平面配置については、鷹遣は鷹山の由来であり、応仁の乱後の記録にも「鷹遣山」と出てくるように、メインであるので、これを進行方向前側の四本柱の手前、すなわち舞台の左前の四本柱の脇に、舞台からはみでんばかりの迫力で配置するのがよいだろうとなった。樽負に関しては、鷹山は後祭なので、三条通を東進して、寺町通を下がり、四条通を西進するので、巡行コースの外側を向いて、樽負が配置されているのではという興味深いご指摘があった。様々な意見が出たが、最終的に、樽負は左後ろの四本柱の前に、外を向いて座らせるということになった。それに、山洞をつけて、その横にやや内側よりで犬遣を置き、鷹遣と犬遣が向き合う形をとるということになった。

話題としては少し別になるが、囃子方がこの間に入る。当然、前に太鼓が入って、ここで巡行の指揮をする。太鼓は鷹遣の前で犬遣の間で、前の方に入る。普通、太鼓は椅子に座っている。その上の空間から、山の上に設置された犬が見えるという形をとろうということになった。

山が相当スペースを取る。現行の犬の体長が 56cm あまりなので、山の上に乗せて見せようとすると、どうなるか。そこから山洞について、真松が入る山洞は真円でなくてもいいだろうという意見も出た。横から見たら、平たい形で、前から見たら立派な山。下部は、カーテンみたいなものをつけたテーブル状でもいいというご意見も

出た。テーブルにして、上に籠を置き、その上に犬を置く。先程の絵画史料の中で、犬について左前の足が太いと記述がある。おそらく、左前の前足で山洞に取り付けられていて、あとの 3 本は浮いている、自由な形。その方が山を駆け上がっている造形にしやすかったのでのではないか、と想定していた。ところが、現存する犬は、全て同じ足の長さである。足を切るわけにはいかないので、このまま使って山に乗せると、平面右上に置くのが使いやすいように思われるが、逆に山に昇らせる方がいいかもしれない。これは今後の課題で、今日の話を経た上で、もう一度 WG を開いて、図面化と考えている。

木部の WG については、3 回開催した。公式な WG 以外にも協議をしつつ、特に第 3 回 WG は 3 部制となったので、かなり詰めて相談した。また、金工品、懸装品、御神体の各 WG の成果を、木部 WG に返しつつ、やり取りをしながら詰めてきた。

木部 WG の説明に入る前に、三条衣棚町文書「鷹山破損ニ付諸方掛合」[文献 20]を確認しておきたい。これまでの刊行物では、鷹山が、文政 9 年（1826）の大風雨で懸装品が濡れて、それ以降巡行しなくなったという記述が、いろいろなところに出てくる。「鷹山破損ニ付諸方掛合」は、文政 10 年以降、鷹山が巡行しなくなり、それ以降、当時の京都所司代の下役であった雑色が毎年復興について聞いてくるのに対して、鷹山が回答した内容を、何年かにわたってとりまとめた資料である。その中に、「大風にて大破」とある。懸装品が濡れてだめになったというより、大破している。大破というのが問題で、鷹山は、おそらく寛保 2 年（1742）に、祇園祭の曳山のなかで一番早くに前屋根を付ける。この前屋根は、北観音山などと比べても、非常に豪勢で、翌年には塗りの屋根になる。水引もかけて房飾りもした、豪勢な屋根。それが、これも祇園祭の曳山の中で先駆けて、天明 2 年（1782）に前後屋根ではあるが、大きな屋根になる。残念ながら、6 年後の天明の大火で焼失。10 年間は、舁山として出て、天明の大火の 10 年後である寛政 10 年（1798）に、前後屋根の曳山として復活、文化 7 年に大屋根に変える。しかし、鷹山の記録を見ても、屋根に対して、下の方をいじった記録がない。例えば、北観音山は大屋根にして、下も大きくしているが、そういった記録が鷹山にはない。ここからは想像だが、下が軽くて上が大きくなって、結局大風…台風だと思うが、大破してしまったのではないかと推測できる。

ここから冒頭申し上げたとおり、鷹山の人形を見せるのを第 1 に、文政期の形で復原するというのが第 2 の前提と考えて、第 3 が安全を担保する。これら 3 点をふまえて、木部の WG を始めた。

京町家再生研究会には 10 年以上前から山鉾の実測図を作って頂き、鉾や山はいろいろやってこられたが、曳山は初めてだった。このため、委員会にかけるにあたり、山鉾本体の調査は間に合わないので、せめて、岩戸山、南観音山、北観音山の大工方と手伝方の棟梁に集まってもらい、どのようにして山の構造を安全に保てるようにしているのか、ヒアリングを行った。それが第 3 回の WG である。今度の祇園祭の時に、我々も含めて京町家再生研究会がチームに分かれて各曳山につき、ビデオ撮影もして、細かく調査をする予定であるが、今回の WG の報告はこのヒアリング結果である。

歴史から言うと、天明の大火の前に前後屋根で屋根を大きくしたのは鷹山のみで、6 年後に焼けてしまった。火事の後、次々に山鉾が復興するが、曳山の中で一番に復興したのは、岩戸山である。岩戸山の棟梁にヒアリングした結果、真松は櫓の下まで突き抜けており、ユスリ柱、いわゆる補助柱は素木に布を巻いて、塗りの四本柱の内側に四本建っている。補助柱が櫓の下部に渡された梁、櫓の東西方向の梁に、ダボで付いている。屋形の塗りの四本柱の舞台の下には、木製でハコカナモノと呼ばれる、L 字型の部材を四隅に付けている。塗りの四本柱は、櫓の中央あたり、貫桁として南北方向にある。これは実際確かめたいが、ユスリ柱と櫓は縄がらみでは固定されない。すなわち、四本柱は南北方向の材で固定、その内側のユスリ柱は東西方向の櫓の構造材で固定する。そういう形で屋根を支えている。

岩戸山の復興が寛政 6 年（1794）。その 2 年後の寛政 8 年に南観音山が出る。この時の南観音山が大屋根かどうかは、史料がないので分からない。南観音山では、四本柱が舞台を突き抜け、舞台下にある素木の大きな角材と金輪で留められる。つまり、継いでいる形になる。継がれた素木の柱は、東西方向の櫓の貫と接合される。岩戸山と逆で、四本柱は東西方向の貫と櫓とで接合されている。補助柱は、観音柱と呼ばれ、真松の前の観音が座る東西、両脇の斜め前に入る柱である。棟梁も芯持ちかは分からないらしいが、長い柱で、櫓のいちばん底部、真松を受ける貫が入っているところまで、突き抜けてがっちりと固定されている。2 本の補助柱であるけれども、岩戸山と比べると長く、櫓の一番下で固定されている。

次に北観音山について。北観音山は、岩戸山や南観音山と固定のコンセプトが違い、補助柱で固定しない。櫓の舞台より下をがっちり固めて、その上に屋根を乗せる。図面では表現しにくいが、四本柱が舞台より下でちょっと太くなっている。四本柱は舞台を突き抜けており、舞台の下には箱型で中空の刀の鞘のような柱が取り付けられていて、その穴にすっぽりと入る。名称はないが、この

箱型で中空の鞘のような柱を、仮に箱柱と呼んでおきたい。四本柱は箱柱に差し込まれる。その箱柱の下には、ホゾ穴があり、ホゾは東西方向の貫が入り、箱柱の下部は南北方向の貫に支えられ、がっちり固められる。ということは、箱柱は櫓に取りついた東西南北の貫にがっちり固まって、舞台の下の櫓より外側で、立方体の形で固めることになる。さらに、箱柱と受けとなる櫓部分の梁と桁とは、縄がらみで固定される。より強固に、櫓と箱柱が、縄がらみできっちりと固定される。そこに四本柱が差し込まれる。北観音山の大工方が言っていたが、もしクレーンで屋根を吊ったら柱は抜けるという。そういう建て方はしないが、上からすぽんと落とし込んでいるというか、そういう構造になっている。こうして、四本柱で大屋根と長い真松を支える構造を実現しているのが、北観音山である。

以上がヒアリングで分かったことである。細かいところは、大工方も手伝方もよく分かっていないところがあるので、実際今度建てるときに、チャンスは 1 回だけなので、じっくりと見て、疑問点を全部解消して、次の検討会にスケール入りの基本設計図をお出しできればと考えている。

ここからは想像も入るが、鉾の場合、櫓と真木と禿柱は、手伝方が責任を持って建てる。鉾の構造については手伝方が責任を持ち、その上に大工方が屋根を取り付ける。ところが、江戸中期から曳山が鉾化を目指す。現在の曳山の職方というのは、大工方と手伝方に明確に分かれている。本来は手伝方が構造を把握していて、小さい屋根を付けるのが大工方の仕事。大工方が屋根を大きくしていくに従って、職人の業務分担が難しくなったのでは、と想像する。そういうところも含めて、補助柱や箱柱といった非常に面白い特徴ある組み上げ方が、これら 3 基の曳山には見られる。

すべての WG の成果を総合すると、人形 3 体を乗せる。四本柱のみで、補助柱なしで建てる山を目指したい。現時点での完成想定図の、正面図・側面図及び舞台平面図を資料に挙げている。こういった形で、WG の成果をまとめた提案として、委員会に提出させて頂く。

植木　極めて詳細な説明だったが、各 WG での検討結果について、各委員から補足があればお聞きしたい。懸装品、人形についてはいかがか。

林　今のところはない。

植木　説明通りで、基本的には WG の検討結果が承認された。問題は木部の構造に関わるところだが、それは質疑の段階で取り扱う方がいいだろう。つまり、各ジャンルの報告の集約になるので、後程補足があればうかがいたい。以上で報告が承認されたとしてよろしいか。

（各委員、承認）

植木　それでは、質問があろうかと思う。忌憚のないご意見を頂ければと思う。いかがか。

（各委員、質問なし）

植木　想定ということは、ある意味では理想ということなので、基本的な枠組みにふさわしい画が描ければいいということである。基本的に問題はないということで、それと関わる構造との絡みの問題に移りたい。

問題を整理しておきたいが、結論的に描かれている図が検討の土台となるが、松の高さはデザイン上、非常に重要な問題である。先程、提示された文政の史料で、重心になるべき下部構造等にかかわるバランスの悪さというのが、出てきたと思う。当然それは、真松の高さと関係する。そういうことも含めての、真松の高さは、およそこういうイメージでよいということか。京町家再生研究会から説明はあるか。

木下　文書の中に出てきたデータをできるだけ忠実に、歴史的に見て、最初、鷹山が前だけ屋根が架かった状態を、山に近いような部材の寸法・形で、一時舁山になったということも含めて、これを再現した。

前回配布史料「預物・蔵入置物留帳」［文献 5］の記述によると、石持を大きくした材料も買っている。長い材料と。それらがいつ、どのように組み込まれたか、時間的な順番は分からないが、被災後、鷹山が新しい材料をいろいろと買い集めていたということが、判明してきた。それらを、最終的に最大のもので組んだものがこの図である。それでも、最終的には材を含めた比重とバランスを考えていくと、もう少し大きなものにしないといけないかもしれない。今年 3 つの曳山を詳細に調査して、図面のプロポーションや部材の大きさの比率を考えて、最終的な寸法に置き換えていければと考えている。

植木　構造的な安全性を尊重するということと理解した。デザインにも関わる重要なことと思う。今後、保存会から、真松はもっと高かったのではないかという意見が出ることはないか。

木下　基本設計図の真松の高さは、今の岩戸山に近い。屋根の上から 10mではなく、舞台から 10mになっているので、7mくらいのプロポーションで描いている。
元々は、これくらいが真松の本来的な高さかと思うが、だんだんと高くなって、今では棟から 10mが南観音山や北観音山で建てている寸法である。

植木　現在の構造をもとに、起こした案ということか。

木下　絵画史料でも真松は低く描かれているので、その方が妥当と思っている。

植木　復原の原案ということでよろしいか。

木下　よい。

植木　これについて、保存会の意見はどうか。

福井　このあたりで保存会の印象や見解を話して頂くのがいいと思う。

植木　保存会には納得して頂く必要がある。

山田　何度もWGを開催して頂き、本当にありがたいと思っている。私としては、すごくいい形に近寄ったと思う。

西村（吉）　理事長の発言に、特に付け加えることはない。非常に満足している。

植木　想定としては、今出されている案が承認された。それでは、もう一点。曳山について、現在の構造のヒアリングをした結果に基づいた報告を聞いた限りでは、北観音山の構造が、最も完成度が高いと感じたが、いかがか。鉾に近い。四本柱の大屋根で、四本柱が下まで通って、四本柱と櫓部の土台とを繋いでいる。しかもそれが箱になっている。つまり箱ということは、柔らかいということでもある。そういう意味では、禿柱を使わない、鉾の形態としては古風な形態かと思ったが、木部の方で、その辺りの判断はまだできないか。

木下　3つの曳山とも、曳山は揺れる構造であるということをよく理解された構造物であった。それと、手伝方の努力がうまく合体している。どういう順番だったかは分からないが、鷹山が影響を与えて、それを受け取った観音山などが、それぞれに新しい屋根を上げる形をとったと思う。そういった進化の過程で揺れる構造を、ユスリ柱と言ったり、観音柱と言ったりして、それら四本柱を吊って、鞘柱（箱柱）を入れた。このように理解できるので、一番シンプルな形は北観音山だと想像できるが、実態は、夏の調査の結果で結論づけさせて頂けたらと思う。

植木　四本柱に大屋根という、基本的なデザインはこれでよいということか。

木下　棟の、フレームの組み方を聞いていると、四本柱で上のものを組んで、帽子のように被せるための努力をしている。それで縄がらみをしているのがよく分かった。非常に曳山らしい特徴だと思う。

植木　実施設計の段階で、更に構造的に詰めるということだが、外観のデザイン上、資料に提示されている原案でよろしいか。保存会はよろしいということであった。

　他、これに関連して意見はないか。京都市から何かあるか。

村上　検討から漏れている件が1つある。雉の位置は、絵に描かないといけないのに、どこに乗せるかというのが漏れている。真松に乗せるというのもあるが、絵によっては屋根の上に乗っているものもある。

植木　これは人形のWGで、議事にならなかったのか。

村上　人形WGに任せて頂けるか。林委員から何かご意見は。

林　この絵（華山本）の真松の高さ。幹がほとんどなくて、葉っぱの部分が割合下に来ている。この面白さが、もし他の曳山のように、幹の部分がずっと上にあったら、また考え方が違うと思う。真松の高さについて、今意見を聞いた方がいいのではないか。この短さなのか、観音山のように上にあがったのか、どちらを考えているかの、意見を聞いておいた方がいい。

村上　林委員の仰る通り、北観音山と南観音山で、鳥が取り違えられていたが、高くなりすぎて、みんな気づかない。鷹山の雉は、見えないと人形の意味が全く無くなる。どこに置くかというのは大事。ご指摘の通り、真松の高さとすごく関係してくると思う。

植木　この絵の特徴は、山の延長である特徴を残しているわけである。そういう意味では、あんまり真松が高くなると、少し意味合いが変わってくる。私はここに出ている原案の通りの高さでいいのではないかと思う。

林　私たちが今会議で言っていることは、未来では消えてしまって、保存会に出来上がったものがみんなの認識になっていくだろう。だから、保存会がどういうふうに思っているかという方が大事ではないかと思う。

岸本　私どもが子供のころに見ていた北観音山、南観音山の真松は、そんなに高いものではなくて、もっと低いものだったと記憶している。なぜそうなったかというと、鉾と同じように、できるだけ大きくと背比べをしていった結果、そのようになったと私は考えており、現在このような形で決めても、将来的に北観音、南観音より低いのは嫌だといって、どんどん伸びていく可能性もある。

　その辺は保存会できちっと記録を残して、決めておいた方が後々いい。それと、伸びれば伸びるほど、受けの基材もしっかりとしたものにしておかないと、やはりバランスが悪くなってしまう。そうすると、構造上の問題が出てくると思うので、この際高さは決めて、構造をきちっと計算して頂かないと、構造物として非常に危ないものになるのではないかと。その辺りだけは、最初に決めておかれた方がよろしいかと思う。

植木　その辺りは先程、保存会に意見を頂いたので、充分に認識して頂いていると思う。デザイン上、他、特に決めておかなければならないことはないか。

　理想図ということで、その通り実現するわけではないわけではないが、一応の目的、ここまでもっていきたい、という図である。

林　雉の留まり位置を心配されていたが、私はそれほど

心配しなくても、後から「あの辺がいい」くらいで、真松に留めたらそれでよいと思う。

植木　風の抵抗もある。

林　だから、「下から何番目でなければならない」とか、それほど硬く考えなくても、ある程度このあたりに留まればいい、というあたりで収めたらよいのではないか。

植木　デザイン上、いい塩梅のところで、描き込んで頂いたらいいということか。

林　そうである。

植木　他にはないか。飾り金具をどの程度、どこにするかなどは。

村上　これはもう一度 WG を開いて、中川氏にも同席して頂いて詰めたい。

植木　その辺りは久保委員から具体的な意見を聞いておいてもらいたい。

今日の課題である基本設計図、理想図の基本的な検討はここで一応終わり、ここで決まった形で、デザインしていくということで、保存会も含めて、承認頂くということで、よろしいか。

（委員・保存会、承認）

植木　染織、人形とも、原本で使えるものはできるだけ使う。

林　1、2 点、補足がある。御神体は保存会の粽を持つようにしているが、太く大きい粽の木型がある。その粽を、青い衣絹で包んで粽型にして持つ方が、古風だと思う。今のまま保存会の粽を持つようにするのか。どちらかに決めた方がよいのではないかと思う。

植木　粽を突き挿す形なのか。手にすぽっと入る。

林　その手の形になっていると思うのだが。

植木　これはその時その時で、差し替えられるということでもよいのではないか。

林　どちらかに決めておいた方がよいと思う。古風さか、現代に沿う方に改革してきたという意味で、現代の粽を持たす方がよいか。ただ今、この場で結論を、ということでもないので、お考え頂きたい。もう一つは、御神体人形の犬の首（丸紐）は、現行は前で結んでいるが、本来、後ろで結んでいると思う。

絵画史料（「鷹山御神体人形図」）を見ると、「鈴真鍮」と書いてあるので、史料の記載に忠実にするのなら、前に鈴を付けるべきである。明らかに、首の後ろで括らないとおかしいが、写真は逆になっている。現状のままなら、私は明らかにおかしいと思うが、保存会では現状のままがよいと考えておられるか。

植木　人形 WG から 2 つ保存会に課題が出た。委員会の持ち方でいえば、ここである程度、基本案を出した方がよいと思う。林委員のご意見は。

林　ふさわしいかどうかは分からないが、粽の型という本歌があるのだったら、私はそれを使った方がいいと思う。それから、犬の首に巻いているもの、あれは「チンコロ掛け」というが、絶対後ろで結ぶもの。もう一つ、「前に鈴がつく」という記述があったから、明らかに今の紐の結び方は変わっていると思う。

植木　では、犬の首の後ろ側で結ぶ、粽は本来のものを持つ、ということでよろしいか。

山田　粽については、本来のものを作るのが大変だから、現行のものを置いていたのだと思う。

林　昔はちゃんと絹で青い貿易羽二重で作っているのがあるし、不自然ではないと思う。

植木　今の林委員のお話をこの委員会では原案にするということで、よろしいか。

（委員・保存会、承認）

西村（吉）　樽負が昔、からくりだったという文献はあるのか。

村上　伝聞はあるが、確証はない。

西村（吉）　木部のいろいろ金具や御幣などの史料はあまりないのか。

村上　あるが、検討できていない。懸装品に関する文献史料では、金幣には紅房が付いている。欄縁は黒塗無地など。このあたりはこのままだと思う。

植木　部会の検討から外れていた部分ではあるが、史料の記載に則って、御幣は金幣、当然これに準じた形になるということだと思う。

それでは、実際に図を描く立場から、何かご意見、ご質問はあるか。

中川氏（以下、中川）　華山本の胴懸と、北観音山「斜格子草花文様」というタペストリーを参考にすると、北観音山では横にした状態、長辺が上、進行方向に対して横に寝かした状態の胴懸となっている。実際に絵を描くときに、北観音山の胴懸を参考にして描くよう言われたら、寝かせた状態で描いてよいのか。もしくはパターンを横に広げた状態で、上向きの正しい方向に絵を描きなおした方がいいのか。そういう細かいところが気にかかっている。

植木　胴懸について、絵画史料に基づいてということになれば、前懸は 1 枚もの、胴懸も横懸けで 1 枚ものである。図様の問題なので、こういう図柄を活かした横使いで、そういう形状で推量して頂いたらいいと思う。細かい文様までは、決めようがないと思う。懸け方がきちんとしており、額縁がついていれば。加えて、水引とのバランスがとれていたらよいのではないか。

中川　了解した。

植木　特に懸装品の WG から意見はないか。

藤井　大船鉾の場合、天水引などは華山本をもとに、あれを延長したような図を描いた。参考として、大船鉾などを見て頂きながら描けるかと思うが。今回の場合は水引などは描かないのか。どこまで図面に描かれるのか。

村上　全部である。

藤井　水引の 4 方向を別々にか。正面図も必要か。

村上　1 枚だけである。

藤井　胴懸と前懸だけで、見送は描かないのか。

村上　そうである。

藤井　現在必要なのは、胴懸。

村上　胴懸、前懸、水引 4 本である。

藤井　水引に関しては、絵画史料があるから描けるかと思う。胴懸、前懸に関しては、参考として現存遺品を挙げているが、この内のどれをというのは決まっていなかった。

胴懸も初期のものは、文献ではほとんどが毛氈と書かれている。絨毯かどうなのかも現時点では分からない。先程からのお話のとおり、どれをとってもいいようなものだが、どれか決めておかないと描けないということになるかと思う。そこまでは詰めていなかった。

植木　今すぐというわけにはいかないが、モデルさえ決めておけば、描けるのでは。

福井　そこで描いたものは、あとの作業の拘束の条件になるのか。

植木　理想図なので、そこまでのものではない。一応これがモデルだというものを、部会で打ち合わせをして、それを伝えてもらいたい。

本日の一番大事な検討事項は、以上で終わったと思う。最終的にデザインのもとになるのは、構造の基本設計図案。これに装飾がつけられていくということになる。

以上が承認されたということで、次の「(3) その他」に移る。何か議案はあるか。

村上　特にない。

植木　それでは、「3.今後の予定」について。

村上　今後は WG を予定している。図柄を固めて、指示を出すためである。

その後、10 月に第 5 回検討会を予定している。この時に、基本設計図を提出する。また、各委員に御執筆いただくところの目次立てを提示させていただくので、報告書執筆に向けての内容検討をお願いしたいと考えている。1 月に第 6 回検討会の予定である。基本設計図を描く方向と角度だけは決めておかないといけないのでは。

中川　前回の懸装品の WG では、左下から見上げた図で作成すると聞いている。

小嵜　前方か。

中川　前方からである。

福井　それなら、樽負は見えない。

中川　反対方向になる。

木下　人形の映りのいい方向はどちらか。

植木　左前方だろう。

村上　言い方が間違っていた。向かって右からである。

植木　人形飾りを尊重するということなので、ちょっと深く。それは基本的なところで了解を頂く。

村上　向きを変えるのは難しいので、固定としたい。向かって右、やや下から。樽負も全部見えるようにして。

植木　実はもう 1 つ、考えていたことがある。本体部の装飾で漆をどうするのか。想定図の上では、素木というわけにはいかないだろう。この辺りは木部の WG で理想図ということになるが、ご検討頂けるか。

木下　史料に表れているのをベースにすればよいと思う。

村上　それも WG で議論したい。今、屋根の調査もして頂いており、屋根の分割の具合を何枚構成にするのかという話も出ている。それと合わせて、繋ぎ部分も関係するので、金具も調整する。

木下　金具も、細部は別にして、形。鬼板、箱棟、鳥ふすまの形式はある程度決めている。

植木　実施設計はもう少し先なので、外観のデザインを出してもらいたい。

木下　了解した。

以上

第 5 回

日　　時：平成 29 年 10 月 24 日（火）午後 3 時

会　　場：祇園祭山鉾連合会会議室

出　席　者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、久保智康、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府文化財保護課（向田明弘）、京都市文化財保護課（村上忠喜、係長堀大輔〈当時〉、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔協力者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

1.　**開会**

（略）

植木　本日の議題は、前回までの審議を踏まえた上で、基本設計図、それから復原に関わる調査報告書。これらについて意見を賜わりたい。次第に従って進める。

その前に、3 月の検討会で 3 つのことが確定している。1 つめは御神体人形を活かすこと。つまり見せるということ。2 つめは構造。二重屋根ではなく単層の屋根にすること。これについては、曳山の構造調査が必要だということで、それがこれから提示される原案に反映される。最後に、安全性を第一に考えられなければならないこと。以上 3 点がこれまでの審議で承認された。以上を踏まえて議論を深めていただきたい。

まず、議事「(1) 木部基本設計図の提示」について事務局から報告していただく。

2. 議事

(1) 木部についての報告

村上 木部の設計について報告する。基本設計図を見ながら議題 (1) に入る。木下委員に説明いただくが、その前にざっくりとしたことだけ伝えておく。

植木委員長からの指摘と重複するが、3 月検討会で決定したこととしては、以下の事柄が挙げられる。御神体人形を見せることを第一に考える。すなわち補助柱を使わない構造にする。第 2 に、最後の姿の装飾を手本にしたいということ。構造は二重屋根ではない。第 3 に安全性を第一にすること。以上の原則に従い、6 月の段階で 3 基の曳山、岩戸山・南観音山・北観音山の大工方と手伝い方へのヒアリング調査を行った。これらの結果を基にして、7 月に曳山の木部調査を行った。その結果をフィードバックしたのが配布した図面だ。ヒアリング結果と現地調査と、先ほどの 3 点の原則を順守して復原想定図を作成した。

木下 6 月に各山の棟梁にヒアリング、7 月に曳山 3 基の構造調査を実施した。それにより第 4 回検討会に提出したものの理論的裏付けと、各部材の寸法に確信が持てたので報告する。

図面はまず真松が描かれた正面図と側面図。真松を省いた立面図・断面図・屋根図・天井図・舞台平面図・櫓平面図（第 4 章 - 1 - 3)。これらを確認しながらお聞きいただきたい。

正面図について。まず大屋根にそびえる松が見える。町内文書（三条衣棚町文書のうち「預物・蔵入置物留帳」[文献 5]）にあった寸法をそのまま採用している。舞台の床上 10m。5 間 3 尺という表記がある。屋根の加工の棟木までが 3m。ここから 7m 上がる形だ。

岩戸山の寸法がこのようになっており、南北観音山も大体この寸法であったようだ。しかし新町通の高圧電線が高くなり、今は棟木上 10m を採用しているようだ。これは吉田孝次郎氏（祇園祭山鉾連合会前理事長、以下、吉田前理事長）から詳細に伺った。復原案には約 7m 案を採用している。

舞台から棟木までが約 3m。舞台の高さが地上から 4m13cm5mm。この寸法は車輪の大きさに左右される。北観音山の現在の車輪の寸法は 1960cm、過去の車輪の寸法は 1870cm。どちらの径も採用できるが、小さい方で描いている。原則短い方の寸法を採用している。

屋根について。棟飾りは、正面に鬼板という木製の飾りがある。箱棟が乗っている。幅も丈もだいたい 1 尺 2 寸。その上に 3 寸くらいの鳥伏間（とりふすま）。形は御所型で、『諸国図会年中行事大成』[絵画 15]・『祇園会御祭礼山鉾之由来』[絵画 18]・「祇園祭礼図巻」[絵画 19]等と、鷹山模型（第 3 章 3 参照）などにも散見されたので、鳥伏間を付けた御所型の鬼板を採用した。

その横に大きな雲形の彫刻のようなものを付けている。鰭（ひれ）とか足元瓦と建築用語では呼ぶ。こうした意匠は金箔置。

破風板は 4 寸 4 分の傾斜角で、2 枚両側にある。真ん中の幅は 6 寸 3 分。板厚が 1 寸 5 分厚。上で 2 割増し、下で 1 割増しの幅にしている。破風先には渦巻文様を彫刻している。破風下には 2 段の眉が描いてある。召合せの中央には懸魚（げぎょ）が付き、4 寸の大きさで六曜の紋が付く。

奥に大瓶束（たいへいづか）があり、虹梁（こうりょう）と垂直に交わる。虹梁は 3 寸 8 分でいわゆる黒漆塗、ここに錺金具が装着される。

軒は 2 寸 5 分、755mm ほど軒先が突出し、3 枚に分けた化粧軒裏が分割して取り付く。その上に裏甲、その裏に飾りを付けた黒塗りの裏甲が 1 寸 3 分×17 尺。それに漆塗りの屋根が、だいたい 10 枚割りで載る。

屋根の上には足の滑り止めの桟が 2 本ある。片方の南側の屋根には、屋根の上に出られるかいこう（開口部）が採られ、その上に脚立のようなはしごが 2560mm の高さである。屋根の位置が高くなるときは、松の振れ止めに機能させるため、はしごを少し大きくする。

大屋根から舞台下の櫓にかけて、この案では 96mm 角、つまり 3 寸 2 分角の黒塗りの四本柱が舞台を貫通して、櫓の中貫（なかぬき）まで挿さっている。

舞台下の框（かまち）の横をすり抜けて、櫓の中貫にかけた足固めに 2 本、両側で 4 本の柱がある。足固めを支えるために、櫓の妻方向から持ち出しの受木を差し出し、足固めにしている。櫓の柱に持ち出しの受木をわないで架ける。妻側にも同じようなものが 2 本出ており、それらに支えられて妻方向の二本柱を繋ぐ横繋ぎの根絡みが乗っている。

こうして中貫のレベルで四本柱を四方に緊密に繋ぎ、車輪から石持、石持から櫓へと振動を伝えて、振動を櫓の上へ逃がしている。柔らかくスプリング状態になっているということだ。

特にこの案で一番肝心なのは、四本柱の下、框下1m60cm ぐらいの部分が箱状になっている。こうした鞘状の柱が、舞台下から柱を繋いでいる部分を支えている。その上に、化粧柱四本が挿さっている。こうして縦の振動が上下に吸収される。非常に微妙なスプリングが利いた状態で、上下する。屋根全体の四本柱の加工が柔構造なので、微妙に動く。破綻するような大きな動きはしない。こうした仕掛けが採られている。

その外側には胴懸下地が、舞台上には勾欄がそれぞれ付く。山洞の形は 1500cm の高さで描いてある。少し歪に見えるが、正面図では横幅 130cm、側面図 75cm。

櫓の腰貫が一番下にある。腰貫は一番大きな樫の木でできている。7 寸 3 分、217cm×105cm くらいの大きな断面の樫の木で石持に乗っている。石持の寸法は前の町内文書[文献 5]の寸法をそのまま書いている。町内文書には 2 回石持の寸法が登場し[文献 5・8]、2 度目の登場時には石持の高さ・幅・長さが大きくなる。

松・屋根・舞台・櫓・石持・車輪という部分があり、全体を動的構造として見ると、非常にリーズナブルだ。江戸後期という時代に、このような最高レベルの大工術に到達した日本の伝統構法に敬意を表する。

こうした形は北観音山で表現されたものだ。補足柱のある南観音山と、ユスリ柱のある岩戸山とで比較すると、非常に均整がとれている。180 年以上の年月に耐え、毎年組んでばらしているのに、損傷なく伝えられていると見受けられる。ゆえに、この寸法案を採用した。

平面図について。ほぼ北観音に近い寸法が、町内文書に書かれていた。システム全体のバランスが良いので、復原案に採り入れている。多少の寸法の自由はある。

櫓の貫の構造。3 段の構造と、中貫の妻方向・桁方向の 2 段の中抜きに、全体の加重と動きが伝わる。いわゆる足固めと、通し受け木というものの組み合わせだ。これが四本柱と、クッション機能を備えた箱柱とが関係するところの寸法だ。寸法対応が本当によくできている。この形は、櫓の上部構造と下部構造とが一体で設計・加工されないとできないということがよくわかった。

最後に屋根架構見上・櫓見下図について。屋根は北観音山に倣うと 10 枚割りになる。天井は化粧割の左右 3 枚割 6 枚。桁と桁、四本柱の中に囲まれる部分、虹梁から外側は、斜めの勾配に沿った天井板で、桁と棟木、化粧肘木などが全て塗となっている。

虹梁 2 本の内側には、金箔を押した板 4 枚が四方に付く。その奥はおそらく天井幕で隠された奥が見えている部分で、2 本の梁が真木を挟んでいる。その真木の周りに 2 枚のサクラでできた挟み板と呼ばれるものが、隙間を縫って真木の振れ止めとなっている。基本的な構造は以上だ。

村上　補足だけさせていただく。7 月の調査を終え、北観音山をベースに作図した。資料集の色塗り図をご覧いただきたい（第 3 章 - 2 - ③）。3 月の検討会で四本柱で持たせることが決まったので、どのようにすればよいかを検討した。

検討したのは、縦横方向の貫と梁との固め方であるとか、鞘柱を舞台にはめ込んでその上から四本柱に屋根を落とし込むなどだ。鞘柱というのは造語で、床下の 4 つの柱が刀の鞘のように中空になっていて、上から四本柱を落とし込む構造のことだ。木下委員も仰っていたが、屋根自体は軽い。下ががっちり、上が軽い。下にいい部材を使うことで、非常に柔らかにバランスを取る。屋根の各パーツは小さく軽く精巧に作られており、雲筋交や桁を通り、真松を取り囲んで、サクラ材で挟んでいる。

このあたりを参考に作図していただいた。サイズは仮。全体のバランスからサイズを調整していただく。京町家再生研には鉾復原の実績があるので、比率で寸法の想定が可能だ。

植木　図面について詳細なご説明をいただいた。各部材の組み構造など、詳細なところについては専門の方に任せる他ないかと思うが、全体を通して、意見・質問があればここで積極的にいただきたい。

木下　色のついた図面と、報告書の写真について。

図面にすると梁と桁の本数が同時に見える。それによりわかりにくくなることもあるので、組み立ての順を写真や動画に撮った。すべて明快に記録されている。作事方・大工方の苦労が記録されている。資料にまとめたのでご覧いただきたい。

最初に岩戸山。ユスリ柱 4 本が、化粧の四本柱以外にあるから、そこを良くみるよう大工棟梁に教えられた。岩戸山記録をご覧いただきたい。

（1）初日に部材蔵出し。（2）円山公園から町内へ搬出後、道路に並べる。（3）櫓を組む。（4）櫓を立てる時に、最初に 2 本、ユスリ柱を櫓の後ろ側に立てて縄絡みする。（5）この状態で倒し、（6）真木を差し込む。（7）戻した後、舞台の上に、ここではすでに欄干が付いており、四本柱とあと 2 本の櫓柱を立てる。（8・9）その周囲に仮設足場を設けて、（10）屋根を設置する。その時に、足場の上で桁と梁を全部組んで乗せる。8 本の柱に同時に乗せる。

南観音山も同様だ。舞台の上から、四本柱と 2 本の観音柱を立てる。二本柱・四本柱というのは、前の時代の山洞の象徴のように残ってきたという、各曳山の歴史

があるものだから、それを大事にしてその上に梁を乗せる。

桁から桁に梁を通して、梁を下から補足柱というか、象徴的な大事な柱が下から突く。上に突き上げる時梁材にはだいたいサクラ材を使っていて、粘強く、横方向に力を伝える。加重だけでなく横の動きを同時に支えるような、梁の状態と柱の構造になっている。

曳山の構造は、全体が一体になるように加工されている。縦横の揺れを、梁と柱が一緒に支え合う関係にある。だから足場の上で一気に組んで乗せる構法を採っている。これが大変手間がかかる。当日一気にしなければならないことなので、作事方・大工方が一緒になって行っている。塗柱やほかの部材を傷つけないよう、苦労されている。

次に北観音山。(6) 四本柱を立てる。舞台の上に鞘柱と四本柱を立てると、その下の仕事になるのが (7) 四本柱足繋ぎに縄絡みを施す。その後、真柱と棟木の取り付けがあり、次に (8・9) 屋根部材の設置で、梁が桁に上から顎懸で乗る。虹梁は横のホゾさしにするが、それは短いホゾである。

岩戸山と南観音山の中央部の梁は深く差して組んであるから揺れにものすごく強い。北観音山では上から落とすことで、引抜きにも開きにも効くようにして、金物のピンで止めつけている。

このような普通の建築の組み立ての仕方で組み立てている。最後には (10) の梁と真木の組み方で完成する。これにより部材が傷まず、大工の手間が省けている。加工が安全に無理なく行われている。

山建ては毎年繰り返されているにもかかわらず、部材の傷みが非常に少ないことが一目瞭然だった。それゆえ、こうした構法が優れていると判断した。

鞘柱について。同じような工夫は各曳山でしている。足固めは、岩戸山では桁方向の 1 方向、南観音山では妻方向にだけそれぞれ用いられている。

岩戸山は上から下まで柱を通すが、南観音山は添え柱をしている。この形は他の鉾にも、例えば放下鉾や月鉾などに見られる形式だ。揺れ止めの工夫として、添え柱の工法が採用されている。その点で、長刀鉾や鶏鉾とは違う。鉾でも揺れを防ぎたいということで、この工法が発展して拡がっていったようだ。

こうしたことが調査でわかったので報告する。

植木　基本設計図の確認だが、屋根の上から松を支える櫓の枠組みについて、一番発端の仕組みはどうなっているのか。

木下　7 本ずつセットで建てる。現場で柱と組んでいく場合もある。金物が 1 つ基本にあり、あとはロープだ。

植木　屋根の接合部の仕組みについて、最後に補足していただきたい。

木下　文献には金物の発注の文言がたくさん出てきた。

植木　揺れが掛かってきた場合、下の屋根との繋ぎ部分の強度の問題はどうなるか。

木下　屋根は繋がっていない。

植木　屋根の接合部に力が掛かってくる。この辺りは施工の段階で対応するしかないかもしれないが、振動を逃がすため、接合部にゆとりを持たせる必要があるのではないか。

本体部の勾欄周りの欄縁の設計はこの資料には入っていないのか。

木下　今は描いていない。

植木　それも是非お願いする。

木下　柱と勾欄の間のあたりの寸法は多少入っている。

植木　図面は一緒に描いておかないと、後から付け加えていくというのはよろしくない。欄縁の構造も含めて、基本設計図に加えるようにしてもらいたい。

木下　部材別に描く必要がある。欄縁と勾欄はセットで作成する。

久保　説明の図には装飾は無いが、報告書で何をどこまで書くか説明していただきたい。でないと意見の言いようがない。

村上　欄縁はまだ検討していないのが実情。木部の設計に終始している。妥当なラインで平均値を入れる程度にでしか、設計図には反映できない。

久保　これからのスケジュールは。

村上　基本設計はこちらで、実施設計は町内主催でお願いする予定だ。

久保　基本設計には、装飾部材は反映しないということか。

村上　反映するようにとの指示だが、平均値で記入する以上にはできないだろう。

久保　そういうことではなく、そもそもこの報告書が何に活用されるかといえば、例えばトータルとして完成するまでどれくらいお金が掛かるかとか。そうした試算にもし使われるとするなら、装飾部に関しても設計図案への記載が必要になってくるのではないか。

村上　基本設計ではあるものの、各部材によって濃淡がある。木部は実施設計に近いものになっているが、装飾物はその時々の実施設計での対応になると思う。あくまでもこれは今後、町内主導で鷹山を復原していくためのイメージのベースづくりだ。ただ、大枠となる木部に関してのみ、大船鉾もそうだが、基本設計に一歩踏み込んだものになる。そのつもりで進めていた。

ただ、植木委員長から指摘のあった欄縁については

想定していなかった。入れることはできるが、実施設計に踏み込むような細かい箇所まではできないと思う。できることは、テキストに起こして、設計図に平均値を書き込むぐらい。

植木　本検討会では、実施設計図というのはない。基本構想図ということで、これは木部にかかわる問題だから、原案として付け加えていただきたい。

幕の厚さの問題などは、実施設計の段階で実態にあった修正が出てくるのだと思う。それはそれとして、基本設計図の段階で必要な情報を付け加えておいていただきたい。

村上　形としては、上からはめ込むものと、L字のものとがあるが、どうするか。

植木　基本設計図に検討を加え、仕上げたらいいと思う。この件については、最もふさわしい形を専門の立場で選択していただき、基本設計図に加えていただく。

山洞はどうするか。木枠か。

村上　山に関しては、大きさだけの話は出たので、作るときは実施設計で落とし込んでいくということでいかがか。

参考までに、『増補 祇園御霊会細記』抜粋を配布した。これは役行者山本で、文化11年（1814）に附で書かれたものだが、「近年は洞もなく屋根も木の黒塗にして」とあるので、この段階では洞を取っている可能性がある。逆に、これ以外のことはわからない。文化11年なので変遷過程の話だ。今更議論を蒸し返してもと思うが、御神体人形をメインに見せる趣旨なのでこうした記載がある、ということを記憶に留めておいていただけたらと思う。

基本的には他の絵画史料でも山はあるので、犬の始末も考えて、山を想定した形で進めていくという点に変わりはない。

植木　ここに出ていない事柄については実施設計で進めていくということでよろしいか。

安全性第一なので、真松の高さをどの程度にするのか。屋根の上7mということだが。

木下　棟木板は岩戸山で8mある。総高は14m50cm。多少の誤差はあると思う。

小島　岩戸山より少し高いと思うが、南北観音山はほぼ同じ高さだ。南北同じ10m。

植木　これまでの議論を含めて、意見はあるか。特にないようなので、基本設計図を承認するということでよろしいか。若干の補足はあるが、原則承認するということだ。

（2）**復原イメージ**

村上　4月以降に行った各WGの結果を反映したイメージである。上から下へと説明する。若干、まだ検討すべき課題がいくつかあるので、逐一申し上げたい。

真松の枝の一番下のあたりに雉がいる。止まり木に留まっている表現は、「祇園祭礼図巻」[絵画17]（以下、華山本）に倣ったものだ。しかし、WGを経ても雉の位置ははっきりしないまま、このように描いた。

雉の位置は、鷹山の物語の中で、雉が犬に追われて藪から飛び立とうとしている表現がいいのか。というのも、北・南観音山でも鳥の人形を松の枝の中につけるのに苦労しておられるからだ。雉の配置場所について、本日の検討議題の1つ目にしたいと思う。

次に網隠しのスケール感。きちんと決めておかなかったので、議題に挙げさせていただく。

屋根の周りの意匠は華山本に基づいている。先ほどの木下委員の図面に合わせて加飾している。

天水引と一～三番の水引は華山本に拠っている。記録に残る文言と華山本と開きがないので、そのまま採用している。

金幣については、史料の表現を採用している。

御神体人形については、以前の検討会で示したように、「鷹山御神体人形図」[絵画16、文献22]（以下「人形図」）を参考にしている。吉田前理事長から寄贈され、今は保存会が所有しているが、御神体人形の配置はWGによって決まったものだ。ただ1つ、よくわからないのが樽負の粽について。今の粽で描かれているか。

中川　史料の粽をイメージしている。

村上　胴懸と前懸について、文政期の史料からは一体どんな文様だったかは追えず、WGでいくつか提示された現存する資料、カーペットの中から3つくらい中川氏に選んでデザインしていただいた。

四隅の錺金具について。一番論議の的だが、一番水引に掛かっている緋色の金具類。鷹が房を掴んで飛び立とうとしている図を表している。文献史料記載のものだ（『祇園会山鉾装鈔』[文献17]）。鷹が飛び立つ形というのはどんな形か。久保委員にも相談し、この時期の絵画史料から探し出した。小嵜にもお願いして探していただき、デザインにはめ込んでいる。

当時、鉾町の人たちが好んで使った史料を探し出した。これを基に、中川氏にデザインしていただき、久保の指示もいただいた。久保委員によると、まったく同じ図柄でなく四方に4つ、少しずつ違った方がいいとのことである。

その下にある、胴懸・前懸・後懸などを留める金具については、吉祥紋である蝙蝠。文書には蝙蝠と記述があるだけで、デザインはない。久保委員の話では、この時期のものは同じ型を四隅にはめることはないだろう。

それぞれ違う蝙蝠のデザインにし、動きのあるデザインにするといい。こうした指示をいただき反映した。ここはいわゆるＬ字金具にしている。房の色は記録の通りにしている。

最後に裾幕。図が白抜きになっているのは、吉田委員がプロジェクトの中でデザインを作成されることになっており、そのデザインと擦り合わせてから反映したいと思っている。吉田委員から指示を頂いて、仮のデザインを入れる予定だ。

車輪等についてはそのまま。以上だ。

植木　基本設計図を基にした説明であった。各位に渡って色々あるが、とりあえず雉の問題はおいておいて、まず一番重要な人形の配置について意見をいただきたい。これまでの議論では、向きまでは決めていなかった。

林　残っている記録から、どう現在の形に見せるかが基本だ。新しい方向を見出すことではないと思う。

シテの鷹遣は、鷹が乗っている腕を正面へ差し出した方がいいのでは、という話があったように記憶しているが、どう考えているか。

村上　鷹遣と犬遣が向かい合っている案を採用したところで終わっている。首の向きにもよるが、前向きに見栄を切るという意見もあった。華山本では、鷹遣は内を向いている。全く逆向きだ。

林　そうすると、鷹遣が持っている鷹を前の方へ出してアピールするのではないかと思うのだが、どっちがいいかというのは総意で決めるしかないと思う。何が面白いかということ。人形の同士の目と目が合うのは違いない。今、そこまで話を進めないといけないのか。基本設計図のイメージとして必要か。

村上　必要である。

林　御神体人形を宵山飾でしか見ていないが、3 体が正面を向いて並び、鷹を前の方へ突き出した姿は、鷹山というイメージが大勢にはっきりと認識される利点になるのかな、とも思った。しかし固執するものではない。

植木　このあたりについて、率直な意見をいただいた方がいいと思う。林委員の意見では、鷹が目立つようにということだ。ちょっと正面向きで。

植木　御神体人形を重視するならその方が見栄えがいいという考え方もある。舞台の床に穴をあけることにも関係するか。鷹遣の向きはかなり重要だ。絵画の方から意見はないか。全体のバランスの問題だが。

小嵜　絵画でこれというのは難しい。鷹を見せる方がいいと思う。

西村（吉）　人形の向き。鷹が外を向いて、鷹遣は中を向くという。これが正面になると、巡行でも正面から見る機会はあまりないし、下から見上げるかたちになる。後祭なら右回りで辻回しをするので、この配置がいいのではないか。正面を向くと、見辛くもある。向きはこの形がいいと思う。

福井　左手足を前に出して、体を傾けるかたちか。

植木　基本は正面だろう。

林　正面という言葉になっているが、鷹が前に差し出されるということは、首（かしら）が正面に向くことではないと思っている。首が正面を向くと、柱の横の方へ鷹が寄ってしまうので、全く正面を向くイメージはない。

舞台でいうと、瞬間をどうみせるか。この中のドラマが、犬遣に明確に指示を出しているようなシーンでもないので、少しだけ鷹が前にはみ出すのがテーマに合うのではないか。

植木　橋弁慶山も同じように、御神体人形の表現はある瞬間を描いている。最もふさわしい瞬間を意識して作られていると思うので、考慮した方がいいと思う。

小島　バランスは思っているのと違うと思うので、御神体人形が並んだ上で、色々な角度から見て考えるのがいいのではないか。

実際の置き方はバランスで変わると思うので、基本設計図はそんなに固執しなくていいと思う。ただ、本番の時に舞台に穴を開ける必要があるなら、模型を造ったり、人間がモデルになるなどして、一番良い位置関係を決めたほうがいいだろう。

村上　今日決めてもらわないといけないので、職員をモデルにしてポーズを決めたい。

（相談）

植木　実現も含めて、このあたりの議論は取り付けにも関わってくる。あくまで基本設計図だからそれでいいという考え方もあるが、もう少し体を外向きにひねる形で、鷹遣を配置するのがいいのではないか。およそそういうふうに、皆さんの相談の様子を見ていて思った。ちょっと正面に開く、ちょっと左に顔が見えるくらいか。

現在の鷹遣は腕が改造されているようだ。史料では鷹を乗せている腕は伸びているものが、会所飾りでは腕が曲がっている。現状で行くのか、本来の形に戻すかという問題にも関わってくる。

林　以前、会所飾りの御神体人形の衣装を脱がせるところを拝見した。大変しっかりしたもので、そのまま使ったら山の上の加重がすごくなると思う。よその山鉾でも、いかに御神体人形の、胴体をそれらしく見せ、重さを軽くするかの工夫をされている。今の御神体人形は、宵山飾り用の胴体だと思う。宵山飾りを拝見したが、造りや、3 人が並ぶ様を見ても、会所飾り用だという印象を受けた。

それから、着付けの衣装を片付ける時に、すごくい

い麻の胴着が揃っていたが、それは使っていなかった。膨れすぎるので着せてないのだろう。着物でいえば、肌襦袢と長襦袢の間のような麻の薄茶色のもの。それが畳んだまま入っていたと思うが。

西村（健）　結構傷んでいるものか。

林　明治期のものなので傷んでいなかった。しっかりしたものがあるんだな、と実物を見て感じた。それは使わずに、別のもので人形の肉付けをしている気がした。

内側のことはわからないが、山の御神体人形に着物を着せる仕方は、各町内で非常に違うらしい。裁縫を何もしないで、後ろに結びつけてあるだけ。下から見上げればそれは見えないし、申し送りがなくてそうなっていると思うが、膨らませていない。

今はそこまできっちり決めず、本番にもっと真剣にやったらいいのではないか。

植木　基本設計図については、やや正面を外す、ということでとりあえず行きたいと思う。

植木　いま議論になったことで、改めて大きな課題が1つ出てきた。衣装を外した御神体人形の本体。資料は押さえられているか。

村上　写真がある。

植木　林委員が実際に見た印象によると、御神体人形は、会所飾り用ということか。鷹遣の腕が伸びていたものが、曲がっているというのも問題だ。正面向き、3体並べての会所飾り用の改装ということで、ほぼ間違いないと思う。

そうすると、人形の体部が会所飾り用に改められている可能性があるということか。

林　改められるのでなく、それ用に作ったものだと。

植木　そういうことだと実際の御神体人形がどうであったか、調査記録はあるか。

村上　鷹山の会所飾りの体部の図面は取ったが、私が見る限り、稚児人形。例えば、鶏鉾はものすごく小振りだ。山の人形では、会所飾りの人形のような造りのものはあまりない。稚児人形であっても、あんなにしっかりした部材のものは見たことがない。林が仰ったように、もう少し簡素というか、軽いものを使われていると思う。ただ、当時の御神体人形の全体の姿はわからない。

林　巡行当時使われていた胴体と、今の宵山飾りで使われている胴体とは別物だろう。

植木　ということは、今ある新しい人形をそのまま使うか、この際元に戻って、軽量化した胴体を作り直すか。こうした問題が新たに出てきた。この場での検討は無理だろう。実施設計の時点までに専門的に調査をしてデータを揃え、それを受けてどう対処するか、検討を進めておいてもらえるか。

林　想定図のことで大体の形が必要なら、中川氏と相談して提示案を作成しておくので、それを基に決めてもらってはいかがか。最後のでき上がりとの差異は、そんなにないと思う。

植木　基本設計図はそれでいいと思うが、山用に新しく御神体人形をつくるか、今のものを乗せるかの問題がある。

林　最初から新しいものを作ると思っていた。

村上　私もそう思っていた。

植木　了解した。こうした検討をこれまでしていないので、原案を作っていく。

林　宵山飾りと会所飾りとでは、浄妙山が明らかに違うものでやっていると思う。だから材料のことは、今の会所飾りを使わなければならないということではないと思う。

植木　人形飾りの胴体の変遷については調査ができていない。基本的には面をかけて手足を付ける。本体はかごで編んで胴体を作るとか、桶で胴体を作るとか、全国的に見ると色々なタイプがある。軽いのははりぼて形式。高岡で古いのが出てきた。現在のものとは全く違う。要は衣装が見えるように、見栄えするように作られればいい。こうした問題を含めて、検討が必要だ。

植木　それでは、残された山に乗せる人形の本体部の課題については、検討を加えて実施設計までに決めておくこと。

久保委員の時間の都合があるということで、飾りの話を進める。

久保　錺金具に関しては、想定ということなのでこれで問題ないと思う。十分に文献史料の情報は反映されているし、鷹の絵も収集されている。もし鷹が飛び立つというのが約束事なら、例えば17ページの6番（長澤蘆雪「鷹図」〈第4章 - 4 - 注2〉）がいいかと思うが、細かく絵に反映するスケールでもなさそうなので、実施設計に向けての資料にすればよいだろう。

基本設計図を見て、むしろ屋根回りの金具意匠に違和感がある。確かに、華山本を基にするとこうなるが、垂木先が二重になっているかどうかが反映されてない。

となると、下から見上げた屋根まわりの金具のインプレッションが非常に強くなる。破風板に八双が3つ付いているが、裏甲・茅負にも段々が付くだろう。これは北観音山もそうだが、裏甲・茅負・二重垂木という具合に付かないと、非常に中途半端な印象だ。

これは基本設計図なので問題ないとは思う。ただ今後の方向性を、町内を中心に「ここが見せどころ」という議論をしていくのなら、それを念頭に置いていただく

といいと思った。

多分、破風でここまで大型の八双を打つなら、裏甲・茅負にも同じような八双が付くのが普通だ。それで、破風の金具装飾が完成した印象になる。側面の軒先の景観も同じことだ。仮に二重垂木にしないにしても、もし破風回りを比較的デコラティブな金具で強調して装飾するなら、金具なしの軒先には非常に違和感がある。

このまま中途半端でもいいが、事務局で検討いただければいいかなと。要はこれが報告書段階での基本設計図であって、実施設計で変えるならこれでいいと思う。現段階は華山本をもとにした、というのなら説明が付く。

植木　基本的に基本設計図上はこれでよろしいということだ。ただ実施設計の段階でどうするかは、これからの検討課題だ。その時に、絵画史料なども含めながら検討する必要がある、という意見だ。軒先の金具も含めて、全部が絡んでくる。一気にはなかなかいかない。基本的には、完成図という形で検討を進めていく必要がある。とりあえず今日はここまで。それでよろしいか。

それでは、いくつか問題ある。1つは雉。飛び立つにしろ、枝に留まるにしろ、落ち着きが悪い。今の図ではなく、どこに置くのがいいか。軒先の前後左右いずれかに乗せるのが一番見やすいだろうが。今ご意見をいただきたい。少なくとも現行案はやめるべきだと思う。見えないところに置いても。網隠しのところにする手もあるかと思う。

林　その辺だと固定するのが難しい。雉の生態の問題だが、それほどリアルにする必要はないのでは。

植木　要するに、犬に追われて飛び立つところをイメージするわけだから。雉が枝に留まっているイメージはない。だから鷹狩りの対象になる。

林　追い出して…。

植木　飛び出したところを捕まえるわけだ。他の鳥ならいいが。オナガドリとか。

小島　追い立てられて飛び立つところ。でも上だと犬と離れすぎる。

林　籠の山に乗せたら犬はいるわ獲物はいるわ鷹はいるわで。

植木　犬とは離した方がいいだろう。

福持　華山本にはこんな感じで枝に留まっている。

西村（吉）　屋根の上はおかしいか。

植木　庇の先あたりが一番無難な気がする。

村上　屋根の上というのはどちらか。向かって左か。

西村（健）　向かって左の端、顔が見えるぐらいで。

植木　おおよその位置でいいと思うが。

植木　向かって左という意見がでた。

小嵜　下から見えるのか。

植木　町内の意見は、そんなところでいいか。

福持　屋根の棟の上ではおかしいか。

西村（健）　あんまり真ん中にあると、御神体的な存在になってしまう。

福持　屋根の角度があるので、屋根方が乗った場合、蹴とばしたりして危ないのでは。屋根方に存在が食われてしまい、雉が目立たないのではないかと。屋根に乗せるとするなら、棟のラインかなと思った。

植木　巡行に関わる問題だ。屋根方の騒ぎにならないかということだが、そうなると棟に置くという案になるのか。基本設計図では正面に持ってこなければいいのではないか。

小嵜　後ろ側に持ってくる手はある。本当は山に乗っていたのだろうが。

植木　これはむしろ、屋根方に注意していただくということでよいのではないか。それにそんな端には乗らない。昔と違い、今は軒先に引っかからないよう注意するというのが仕事だから。屋根方の注意事項としていただき、端に置くのであればそれでよいだろう。

山田　華山本以外の絵画史料で松の中に雉のある解釈は。

植木　むしろ、絵画史料の史料性が問われると思う。

小嵜　華山本の少し前の『諸国図会年中行事大成』[絵画 15]では雉が枝に留まっている。思うに、屋根の形を見ていると華山本はこれを参考にしているのではないだろうか。華山の時代には鷹山はすでに巡行していないと聞いている。屋根の角度が似ている。そのあたりも含め、華山はこの版本を参考にしている気がする。そこまでこだわる必要はないと思うが。

植木　町内の意見を尊重して、向かって左の軒先の案でいかがか。

小嵜　「人形図」では真木に留まる、と記述がでている（「真木ノ松ヶ枝ニ止居丸彫ノ雉」）。

福井　雉が真松にいるというのは順当だ。山のチャームポイントで、姿も飛び立つところなのか、諸案あるかもしれないが、真松に乗せているのが上等だろう。

植木　そこまで写実性を主張するわけではない。雉の位置は、もともと経過的に移動していったものだ。網隠しに山の延長線上、洞の延長線上ということであれば無難だろうが。

福井　鷹に近いところには置きたくないし。

植木　それならば網隠しの木枠に取り付ける工夫をして、正面に乗せるとか。

木下　支え棒のようなものがいるかもしれない。

山田　小嵜委員が仰ったように「人形図」には、真木の

松の枝に留まっていると書かれている。

植木　それが完成形ということではない。インパクトはあるが。

西村（健）　網隠しに設置というと、屋根方の作業に支障が出てくる。

植木　そうすると松の幹。枝にかかるかどうかの。

福井　今このままではいけないものか。これで走り出した方が町内も進めやすいのではないか。

植木　それでは、枝に乗せるのでいいのであれば、修正なしということでよろしいか。

幕部についてこれから検討する。町内に鷹の紋のようなものはないか。

山田　芸大の方に新しくデザインしていただくことになっている。

植木　それを利用するのがいいだろう。

福井　芸大の方が裾幕を作られるそうだから。

藤井　お手元の資料に描かれている幕引きは、前回示された資料のなかにも色々なデザインがあり、その中のどれか１つが描かれている。今後、実際にどんな模様を使うか決めた上で、新しい図案を考えないといけない。先に裾幕のデザインがあって、それに幕引きを調和させるのは変な話だ。

以前、芸大が作ったのは大船鉾のもの。あの時上幕が残っていたので、それに調和するものということで下幕を作った。

今回は全体の中で１つということで、芸大が先行して裾幕を作る必要はない。先行して作ると、他のものが作りにくくなる。そうした進め方でいいのではないかと思う。天井も水引も全部新調しなければならないので、それにあわせて裾幕を考えていかなければならないだろう。

山田　裾幕は、予定では再来年にデザインしようということなっている。

藤井　再来年に他のものも全部デザインが上がっているのか。

山田　上幕の方のデザインが先に決まってきたら、それに合わせてもらえばいいのでは。

藤井　一緒か、上幕のデザインができてから裾幕を、という順番になると思う。

山田　現段階では無地がいいのではないか。

福井　イメージを付けないための無地でいうと、よくあるのは浅葱無地か。

林　歌舞伎では浅葱幕というのがあって、浅葱幕は「ない」ということになるので、薄い浅葱色を塗っておくのはどうか。

植木　町内で裾幕のデザインについては確認しておいてもらいたい。他の幕のデザインより先に、裾幕のデザインだけ先に決まっているのはよくないので。

木下　１つだけ。垂木を一重にしてはどうかという提案をさせていただきたい。案では二重垂木になっているが、議論の余地はあると思う。シンプルにすれば舞台の御神体人形が目立つと思う。煌びやかさを抑える設定はどうかということだ。

植木　復原イメージについては今のところ、それでいい。構造については、先ほど基本的なところは了解された。町内の意見は。

山田　復原イメージを変える？

植木　復原イメージはこれでいいということでよいか。基本設計図でどうするか。

木下　設計を二重垂木にすることもできる。

村上　設計図は一重か。

木下　岩戸山・南観音山は一重、北観音山は二重だ。

村上　想定図は北観音山を引用しているので、二重だ。

西村（健）　二重の方がいい。

村上　費用がものすごくかかるが。

山田　いくらぐらいになるか。

福持　錺金具の予算が倍になる。

小島　御神体人形を目立たせるには、あまり軒裏は煌びやかではない方がいいのではないかという意見だ。

西村（吉）　一重にすると、金具は付かないということか。

福井　一重分付く。錺りをちょっとずつ増やしていくことはできるか。

小島　ちょっとずつ足していくことはできると思う。現に岩戸山も、前後で錺金具の量が違う。「後で作ろうと思っていたが、景気が悪くなって作れなくなった時代がある」と仰っていた。

植木　確認するが、基本設計図は仕上がりと寸分違ってはならない、というものではない。

小島　あくまでこれは基本設計図というのなら、図面が一重でも問題はないと思う。一重にするか二重にするかや金具の有無は、実際のところで議論させていただくのが一番わかりやすいと思う。

植木　優先度も出てくる。予算と合わせて検討していけばよいだろう。金具については、希望を含めた基本設計図ということで、およそこのあたりに金具をつけていきたいという話だ。

中川氏の方からは何かあるか。

中川　確認をさせてほしい。一重垂木に書き直すのは可能だ。ただ違和感は感じる。設計図が一重なら、想定図も一重の方がいいかと思うが二重でよろしいか。

村上　逆も真で、一重に書き直してもらって、余力があ

れば実施設計で二重にすることもあるかと思う。

植木　そのあたりは非常に細かい詰めの話になるから、事務局で処理していただけるか。

村上　では一重で。

植木　「(2) 復原イメージ」については、若干の修正が入るけれども概ねこれでいくということでよろしいか。最後に、報告書の目次案について議事を進めさせていただく。

(3) 報告書目次案の提示

（略）

福持　中川氏から、皆さんに確認していただきたいことが3点あるということだ。1点目は、天水引の四方に飾り房を垂らすか省くか。岩戸山なら金、南観音山なら朱色、北観音山なら浅葱など、山ごとに異なる色の房が天水引に掛かっている。お手元の資料では朱の房が掛かっている。加えて、正面の天水引に、どちらの山も2本の飾り房が提がってる。あるいは場合により、釣っていることもある。お手元の資料では4本、見えるところでは3本だが、描いている。天水引周りの、合計6本の房飾りをどうするか。

2点目は力綱。三番水引の下から白い力綱が2本出ている。力綱の色の先例に白はなく、岩戸山は緑、南観音山は紫、北観音山は朱だ。何か色を付けた方がいいのではないか。

3点目は、御神体人形の樽負の姿勢を、立たせるか、座らせるか。樽負は、会所飾りでは座っている。背をそろえるため、立った状態にするのがよいのか。御神体人形の背の高さのバランスをどうするのか。

以上3点についてご意見をいただきたいとのこと。

中川　華山本には房がなかったが、今どの曳山にも房は付いている。房を目立たない色とさせていただいたが、この点を確認していただけたらと思う。

植木　その辺りはあくまで完成予定図なので、お任せしたい。

私も差し控えていたが、幕の場合、御神体人形をよく見せるために、絞りをどうするかという事柄がある。最初からこういうふうに枠縁を利用するのか、それとも房で絞るのか。

藤井　町内によって違う。実際問題、絞りをすると幕に損傷が生じる。見栄えは房が付いている方がいいが。

植木　全体がオーソドックスな形をしているから、とりあえずはそのイメージで仕上げてもらったらいかがか。幕の形状自体が変わるので。絵の処理の問題だから。

村上　力綱はいらないか。

植木　とりあえずはこれでいいと思う。

福持　樽負の高さはいかがか。

林　樽負はしゃがんでいるものと思っていた。それで粽を前にしてちょっと外を覗き込んでいる様子が、他の山には類例がないので面白い組み合わせだと思っていた。

中川　高さが今の状態だと背が高くなっているので、もう少し低めの方がいいのかなと。

林　そうだ。だいたいそのように描かれていると思うし、多少開かす程度でよいのではないか。

植木　それでよろしいか。それでは事務局にお返しする。

3.　今後の予定

4.　次回の開催

5.　その他

6.　閉会

（略）

以上

第6回

日　　時：平成30年3月12日（月）午後3時

会　　場：祇園祭山鉾連合会会議室

出　席　者：〔委員〕植木行宣、小嵜善通、岸本吉博、久保智康、林駒夫、福井藤次郎、藤井健三、京町家再生研究会（小島冨佐江、内田康博、木下龍一、三木佑美）、〔オブザーバー〕鷹山保存会（山田純司、西村吉右衛門、西村健吾）、京都府文化財保護課（向田明弘）、京都市文化財保護課（中川慶太、村上忠喜、堀大輔、安井雅恵、福持昌之、山下絵美）、〔協力者〕中川未子（よろずでざいん）、〔事務局〕祇園祭山鉾連合会（山口敬一）

1.　開会

（略）

2.　議事

植木　今日は結果をまとめた報告書の確認である。各委員の担当箇所について、審議をお願いする。

村上　今日は確認のための会議である。配布資料の説明をさせて頂く。次第・基本設計報告書の抜粋。報告書の全体版は回覧して頂く。報告書は現在全186ページである。議論を細かくして頂いたので、議事録がだいぶ分厚くなっている。70～80ページになり、併せて260ページぐらいになる予定だ。それから、目次・凡例・基本設計図・協力者一覧。一覧については、確認に協力頂きたい。漏れのないようにしているつもりだが、先生方が原稿を執筆された際に得られた協力者もあると思う。

今回、短い時間の中でかなり詰めて書いて頂いた。リライトも終了していないが、御礼を申し上げる。本日

は議論するテーマはないが、復原案の最終版を確認頂きたい。

本日、鷹山調査員会で往時の鷹山の姿を復原していただいた中川氏にもお越しいただいている。この図は基本設計の策定とは別の枠組で制作されたものであるので、人形の位置など若干変動する。ただ当委員会で決定した「鷹山は人形を見せる山にすべし」という方針はこの図とも合致するので、人形の向きが将来どうなるかは別にして、本報告書にも参考図として掲載することを考えている。

植木　まず、報告書全体について、それぞれご指摘頂きたい。何か質問等があれば、積極的にして頂くということで。補足があればお願いしたい。

村上　執筆して頂いた各委員には、執筆個所を抜き刷りして配布している。

植木　構成は事務局から出して頂いた通りになっていると思う。書き切れなかったところなど、何かあれば。

林　とても素敵な御神体で、皆さんの前に本来の姿で見える日が近いことを望んでいる。

文章は、過去の様々な史料から拾い上げ、最も正しいであろう言葉を綴り合わせて作成した。特にどこそこをどうしたいということはない。ただ、すべてが推測になる。例えば、首（かしら）の手直しがあったりするようなことだ。文章はよくまとまっており、概要を申し上げただけで特にはない。

藤井　衣装については現人形が残っており、それに着けた衣装があるが、記録では天明 2 年・5 年、文化 11 年・6 年、文政 10 年、天保 3 年に配置や人形の概要についての記録はあるが、衣装についての詳細な記録はない。ほぼ分からないのが現状である。現在の人形も近代に作られたものである。直垂でなかったりとか、古い形式ものとはやや違った形態である。現在の人形がそのまま昔の形とは捉え難いと感じている。同時に、鷹山の人形衣装に関わる重要な史料が近年見つかっている。そこには天保 2 年とあり、衣装についての詳細な記述がある（「鷹山御神体人形図」以下「人形図」、[文献 22・絵画 16]）。人形について申し上げることは、この 2 つである。「人形図」の詳細については、そのまま写して記録させて頂いた。

久保　こうした報告書では文責が大事である。特に学術的な内容を多分に含んでいるので、実質誰が書いたのかをわかるようにして頂きたい。史料編も、誰がどのようにどういう体制で報告したのか、現史料はどうなっているのか。歴史学的にはそこを問われるので、きちんと明示して頂きたい。でないと、せっかく報告書を作っても、中途半端な利用のされ方しかされないのでお願いしたい。

小嵜　私が主に扱ったのは華山本である。特に天水引・下水引の部分である。文献史料に載っている史料の名称と、描かれている図柄が一致しているということで、ご報告させて頂いている。もう一点、「人形図」について、残念ながら誰が書いたかは分からずじまいだった。『平安人物志』の全項目を見たが、一致する人物は見つからなかった。今後出てくるかもしれないが何ともいえない。あれだけの筆・文章が立つ人物なので、普通の人ではないと思う。そこが今回悔しいと思っている。

吉田　懸装品については、藤井委員と吉田が担当させて頂いた。報告は私がさせて頂く。これについては、基本になる文献を 2 種読んでいる。鷹山最後の姿が一番克明に表されているというものである。

1 つは、天保 3 年の「鷹匠人形他一式覚」（以下「一式覚」、[文献 23・24]）、そしてもう 1 つは『祇園会山鉾装鈔』（以下、『装鈔』、[文献 17]）。「一式覚」の方を基本文献とし、それを補うのに『装鈔』を用いた。なぜなら「一式覚」に書いてない複数の情報が『装鈔』に書かれているからである。

最初にこの 2 種の文献を吟味し、どちらの表記に合わせるかをよく考えた。基本的には「一式覚」に合わせ、それを補う形で『装鈔』を用いた。

もう 1 つ重要な史料は華山本で、大変克明に描かれている。胴懸以外の水引の部分は、「一式覚」とほぼ一致した形で描かれていることが分かった。従って、水引部分は華山本を踏襲して用いるのが適切だろうという結論に至った。

胴懸部分については華山本にほぼ見られない。それが問題となり、さらに実物資料を追加して検討していくことになった。「一式覚」の内容に該当すると思われる実物資料を多数洗い出し、それを混ぜていく形で、最終的にどのようなものがいいかを検討した。

この中で一番重要なのは、前左右の胴懸について、「毛氈」という表記が出てくる。毛氈とはいったい何かが問題となった。古文書をあたると、『増補祇園会細記』[文献 16]に様々な毛氈の表記が出てきた。それが現実の何にあたるのかを調査したところ、インドやペルシャ系の絨毯に該当することが判明した。胴懸部分は、いわゆる絨毯。さまざまな文化圏で絨毯は作られているが、おそらくインド・ペルシャ系のものだろうと推定できた。

文様については幾つかあるが、例えば蜀江形や草花の文様。こうした表記があるので、それに近い絨毯の文様を図版として掲載した。このような幾つかの文様を念頭に置きながら、同じものを作るわけにはいかないの

で、デザインを起こしていくのが望ましいという結論を導き出した。

見送については、「花鳥縫結」という表記がある。花鳥の縫い結めとは何か。縫結というのはおそらく全面に刺繍をされたものと想像されるが、『装鈔』で見ていくと、日本製と中国製を詳細に識別して書き分けているところがある。そうしたところを見ていくと、おそらく日本製ではなく中国製の刺繍の縫い結めだろうと推定できた。従って見送は花鳥の文様の、糸を縫い詰めるようにして刺繍をした作品である。おそらくこのようなものが懸けられていただろうと思われ、そうしたものが復原の対象になるのではないか。こうした結論を導きだした。

木下　今回、2年かけて本格的な屋根のついた曳山、岩戸山・北観音山・南観音山の3基を実際に調査して、再生研のスタッフ全員で調べた。どのようにして鷹山がつくられたか。それがどう3基に影響して進化していったのか、という経過をつぶさに検討できた。それぞれの山鉾の特徴が、時代と山の個性と重なりあいながら変化してきたのがよくわかった。結論的には1番近い形として、北観音をベースにした。それに町内に残された町有文書の文言と矛盾しないようにして基本設計案を作ることができた。

多方面で皆様にお世話になり報告書ができることに御礼申し上げる。今後、曳山の維持管理とともに、再生研こぞってご協力させて頂けたらと思う。再生研は次代に引き継いでいく研究・実務者の集まりだと思っているので、よろしくお願い申し上げる。

植木　報告にあった通り、報告書が世に問われていくことになる。史料に基づいて復原案を構成した。それと基本設計図は構造に関わる確定的なものである。ところが復原案は現在想定し得る案であるから、実施設計は必ずしもそれに縛られるものではない。ベストで実現可能な方向性を探っていくことになると思う。

設計図はここで確定した。最終的な細部は微調整が必要である。この点だけ念頭に置いて頂きたい。

先ほどの久保委員の指摘はもっともな話である。要するに分析をする者はきちんと名前を出すべきである。特に調査報告の場合は、誰が調査をして誰が記述をしたのか。私どもは報告書を読むときに、誰が書いているのかを見る。将来に向けて、誰が執筆したかははっきりさせて頂きたいので、この点は反映して頂きたい。

村上　ご指摘を反映させていただき、細かく書かせて頂く。

植木　報告書の復原原案をどうするか。実際的な問題が残されている。本調査委員会は責任終了だが、具体化する段階がある。どれだけ調査が生かされるか。そのあたりは連合会の方も十分ご承知頂いていると思う。どう手当てしていくかである。

そこで基本設計図。皆様から意見を賜りたいと思う。あくまで基本設計図である。一番の問題は人形配置。人形をどこに置くか。今の人形をそのままの形で装着できるのか。

林　足元は宵山飾り用である。現実のものとは違う。

植木　平面図のどこに位置するかは明記できるが、実際に角度などは現場で微調整していくことになるだろう。その点を踏まえ、こういう図で問題ないか。意見を賜りたい。

村上　よほどこれは、というところだけでお願いしたい。

林　山洞が高すぎて、天井まで届いているようでは困る。

村上　委員会で正面から見せるという話になったので、囃子方の太鼓が前にいて、頭越しに山と犬が見える設計であるが、確認をしておく。実施設計で調整すればいいと思う。

山田　洞は緑色か。

村上　緑色に描かれた絵画史料がある。

植木　あくまで全体図を示したものということである。懸装品、水引は新しくされることになるだろう。毛氈とされた絨毯の類の詳細などは具体化の時に。塗りはどうするなども。この辺りは一般の人に向けてのアピールである。そのように了承頂ければいいかと。

山田　皆様のおかげでここまで来ることができた。オリンピックのカーリングで藤澤五月選手が「私たちの夢を自分の夢と思って応援してくださっている方がいっぱいいらっしゃって」と仰っていた。僕たちも同じ気持ちだ。先生方に感謝している。保存会に資金が3千万円くらい貯まっている。人材については現在囃子方しかいないので、去年から建て方の勉強に3人ほど行かせている。車方、屋根方、その他の諸々の人材はこれからである。懸装品は全くない。この3つを同時に進めていかないといけない。

木部の基本設計については、再生研にお世話になり、御礼申し上げる。実際の製作は、株式会社安井杢工務店にお願いする予定だ。初期から安井杢の社員に囃子方に入って頂いているのと、現時点では社長に保存会の理事をして頂いている。去年、北観音山に建て方の研修に行って頂いているのは、安井杢の大工。そうした次第で、今後の木部は再生研の指導のもと、安井杢と共同で、実際の製作を進めていけたらと思っている。

御神体人形については、林委員の指導を頂きながら連合会と相談し、どういう形で進めていくかを決めていく

必要があると思っている。懸装品については、先生方の指導のもと連合会と相談し、調達するか製作するかを決めていきたいと思っている。

引き続き皆様の意見と指導を頂きながら進めていきたい。

植木　現在の状況を説明ただいた。これについてご質問があれば。個々の専門の委員に、その都度相談をかけるのか。

山田　連合会に伺いながらと思っている。

植木　その辺り、連合会との協議のもとでできるだけいい方向でやって頂けたらと思う。個人的にされると各委員も困られると思うので、きちんと設定したうえで意見を頂けるようにして頂きたい。具体的な実現に向けて、各委員から指導を得るということであるので、依頼の際には積極的に協力を賜りたいと思う。

山田　オフィシャルで発表する時には、いつからの巡行を目指すのかというと「2026 年までに」としている。1826 年に最終の巡行をしているからだ。200 年の節目ということで、2026 年を目指すと言っていたが、最近では 2021 年までにできないかとなってきた。遅くとも 2022 年にしたい。人材・もの・資金が同時に順調に進んでいっての話である。どれが欠けても難しいと思う。

岸本　ここ 2 年間、連合会指導で委員会を開催し、ご協力をいただいた。報告書ができると、連合会の指導は終わる。今後は保存会が主体となり、復興へ向けて動かれていく。今後とも各委員にはアドバイスを頂きたい。ただし、当連合会の審議会専門委員との調整をどうするかが今後の課題である。重複して就任頂いている委員もいらっしゃるが、復興のためのアドバイスをしていただく委員と、専門委員とのすり合わせを今後していかなければならないと思っている。慎重に進めていきたい。京都府・京都市にもアドバイスを仰ぎたいことがあるので、よろしくお願いしたい。

植木　議事は以上である。

村上　福井副理事長のご挨拶をお願いいする。

福井　各委員に色々と指導を賜り、膨大な史料、横山華山の作品であるとか、吉田前理事長の探してこられた絵画史料とか、貴重なものも残っているものは残っている。それをベースに、先生方が真剣にものを書かれ、その末席に私も参加することができて、こんな幸せな話はない。平和な時代に山鉾が再建できるというのは、すごいことだと感激している。これからはいよいよ町内がねじを巻かないといけない。資金調達のためにもこういう見えるものは重要だと思う。200 年に 1 度くらいのことが起こっている。各委員の力を頂戴できるよう期待する。

以上

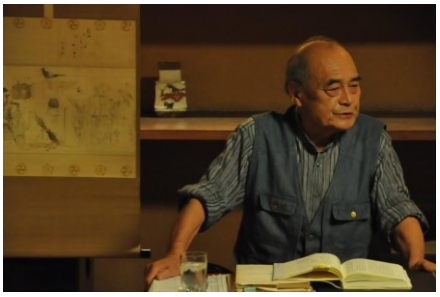
放鷹への歩み

私は鷹山が所在する衣棚町に生れ、10 歳まで暮らしておりました。その後、左京区に転居しましたが、家業の呉服商はずっと衣棚町で営んでいます。明倫学区の男の子の多くが思うように私も囃子方になりたく、父が他の鉾町の知人に聞いてくれたのですが、願い叶わず、子供心に「どうして町内の鷹山を復活させないのか」と大人を恨みました。

しかし町内で復興の話が全く無かった訳ではなく、昭和に入ってからも数回持ち上がったそうです。ただ、当時は全てを町内で賄うのが当り前との認識でした。莫大な資金や運営体制の難しさに復興計画が前に進む事はなかったそうです。

鷹山の歴史と未来を語る会

今回、復興の話が具体化したのは、町内の長老的存在の八田章氏の呼びかけに、江戸期に鷹山の運営を担っていた「千吉」の当代、西村吉右衛門氏が賛同されたことによります。私も、八田氏からお話をうかがって、「子供の頃の夢を叶えたいので、お手伝いさせて下さい」と仲間に加わりました。もう一人、町内で生まれ寿司店を営み、北観音山で 34 年間お囃子を続けられてきた西村健吾氏の参加を得て、この 4 人が世話人となって、「鷹山の歴史と未来を語る会」を立ち上げました。この会は、祇園祭や鷹山の歴史から、他の山鉾町の運営の実際など、講師をお招きして学ばせていただくとともに、講師を囲んで集まってくださった方々と意見交換をするというもので、平成 24 年（2012）10 月から平成 26 年（2014）7 月までの間に、6 回開催しました。その活動を通じて、私たちは復興に向けた確実な手応えを感じることができました。以下は、「語る会」の活動の記録です（肩書は当時）。



「鷹山御神体人形図」について解説してくださった吉田孝次郎氏

鷹山の歴史についてご講義いたいただいた廣田長三郎氏

第 1 回　祇園祭と鷹山の歴史

講　師：吉田孝次郎氏（公益財団法人祇園祭山鉾連合会理事長）

平成 24 年 10 月 17 日　（於 ちおん舎、参加者 28 名）

第 2 回　鷹山の歩みと京の町

講　師：廣田長三郎氏（郷土史研究家）

平成 25 年 1 月 16 日　（於 廣田長三郎様宅、参加者 21 名）

第 3 回　大船鉾の歴史と復興

平成 25 年 3 月 28 日　（於 ちおん舎、参加者 26 名）

講　師：松居米三氏（公益財団法人四条町大船鉾保存会代表理事）

第 4 回　大船鉾のお囃子復興とその音色

講　師：木村宣介氏（公益財団法人四条町大船鉾保存会理事）／大船鉾囃子方

平成 25 年 9 月 26 日　（於 ちおん舎、参加者 25 名）

第 5 回　南観音山の歴史と一年

講　師：酒井英一氏（公益財団法人南観音山保存会監査役）

平成 26 年 4 月 22 日　（於 ちおん舎、参加者 33 名）

第 6 回　講演「笛によせて」と演奏

講　師：藤舎名生氏（横笛演奏家）

平成 26 年 7 月 15 日　（於 ちおん舎、参加者 47 名）

囃子方の設立から保存会の法人化へ

この「語る会」の活動と並行して、平成 26 年（2014）3 月に西村健吾氏を中心に 8 名の囃子方が活動を始め、7 月 15 日の第 6 回「語る会」では約 20 名の囃子方による公開練習会もさせていただきました。この囃子方のメンバーの中に弁護士と公認会計士がおり、彼らの強い助力もあって、町内の有志を中心とした鷹山保存会の設立の話が進み、平成 27 年 5 月 15 日には「一般財団法人鷹山保存会」を設立することができました。

法人化の直後、山田啓二京都府知事（当時）、そして門川大作京都市長には、財団設立の報告に伺い、ご支援をお願いし、いずれも復興への協力をお約束頂きました。平成 28 年（2016）1 月 19 日には、公益財団法人の認定も得られ、このあたりから復興がおぼろげながら目に見え始めたように思います。町内に校舎を構える京都医健専門学校からも御寄付と人的支援をお約束いただいています。また、町内に拠点をお持ちのアートアクアリウム・アーティストの木村英智氏から、元離宮二条城での売り上げの一部を寄付してくださるというお申し出もいただきました。

平成 27 年 6 月 30 日　鷹山保存会の主要メンバーで市長を訪問

もともと衣棚町には町内会とは別に「衣棚町鷹山保存会」という任意団体があり、平成 20 年（2008）4 月に指定された京都市指定有形民俗文化財「鷹山装飾品」（13 点）を含む御神体人形を管理し、祇園祭宵山での居祭りの運営をしております。衣棚町の住民が全員一致で復興に賛同するということは難しく、また種々の制約もあり、両者で協議を重ねた結果、平成 27 年（2015）5 月に衣棚町鷹山保存会から公益財団法人鷹山保存会が御神体人形を引き

継ぎ、復興を推進するという形になりました。復興への不安や心配をお持ちだった住民の方もいらっしゃいましたが、今では皆様からご理解・ご協力を頂けるようになってまいりました。

祇園祭への参加

平成 27 年 7 月の後祭では、189 年ぶりに宵山でのお囃子を復活することができ、授与品の販売も始めました。平成 28 年 4 月からは、祇園祭山鉾連合会にも準会員として加盟させていただき、岸本吉博理事長をはじめ役員の皆様、他の山鉾町の皆様に暖かく迎えていただきました。大変光栄であると同時に、祇園祭の一翼を担う責任の重さも痛感しています。皆様から仲間として認めていただきましたことは、感謝に堪えません。また、八坂神社とのご縁をいただき、平成 28 年からは毎年 6 月に舞殿でお囃子の奉納をさせていただくことになりました。さらに、森壽雄宮司には「祇園祭 鷹山」と揮毫していただき、授与品の扇子のデザインに使用させていただいております。

平成 29 年 7 月 21～23 日　宵山でのお囃子の演奏

平成 29 年 10 月 25 日　アートアクアリウム城～京都・金魚の舞～（於元離宮二条城）でのお囃子

平成 29 年（2017）の後祭宵山では、7 月 23 日の晩に、三条通の烏丸通から西洞院通の間の短い距離ではありましたが町内での日和神楽を実現しました。

現在、囃子方は 48 名の大所帯となりました。鷹山の巡行復帰への想いは、本当に皆様のおかげで、少しずつ実を結んできているところです。

調査研究事業と基本計画策定事業

祇園祭山鉾連合会では、我々の鷹山復興に懸けた想いを汲み取ってくださり、平成 28・29 年度の 2 年間、文化庁の補助事業として、鷹山の歴史と往時の姿を探る調査研究事業を立ち上げてくださいました。その成果はすでに、平成 30 年（2018）3 月に報告書として刊行されています。

また、祇園祭山鉾連合会は調査事業と平行して、鷹山基本計画策定委員会で鷹山基本設計の策定に取り組んでくださり、この度、晴れて基本設計が完成した次第です。委員の先生方

には、検討に検討を重ねていただき、また京都市文化財保護課の皆様にも多大な協力を得ることができました。この基本計画をもとに、私たちは具体的な実施設計を進めてまいりたいと思っています。

私は、これら全ての事象は「鷹山ご神体」のご意思が働いていると思っています。まさに神がかりな良き風が吹き、次々と復興への兆しが起こっています。200 年の時を経て「そろそろ眠りから覚めて、祭りに参加するので、皆の者、手伝ってくれ」と、復興に関わる全ての人達をお呼びになったと思わざるを得ないほど、それぞれの分野において充実しています。

また多くの方から多額の御寄付も寄せられつつあります。かつて、町内だけの資金と人力で復興しなければならない、という呪縛で実現できなかった「鷹山復興」ですが、明るい未来が見えてきました。越えなければいけない課題がまだまだありますが、一歩ずつ地に足をつけ、難題突破を楽しみながら、復興への希望と信念を持って、しっかり前進して行きたいと思っています。

今後とも鷹山への応援、ご支援を心よりお願い申し上げます。

平成 30 年 6 月

公益財団法人鷹山保存会
代表理事　山田 純司

主要参考文献

宮内省式部職編『放鷹』吉川弘文館　1932 年
京都市文化観光局文化課編・発行『祇園祭――山鉾実測』京都市文化観光局文化課　1968 年
祇園祭山鉾連合会編・発行『近世祇園祭山鉾巡行志』1968 年
京都市文化観光局文化課編・発行
　『重要民俗資料　祇園祭山鉾由緒及びその附属品目録――第一集（十六基分）』1969 年
同志社大学人文科学研究所第二研究（日本封建制研究会）編・発行
　『祇園会山鉾「鷹山」関係資料（上）――京・三条衣棚町文書』1969 年
同志社大学人文科学研究所第二研究（日本封建制研究会）編・発行
　『祇園会山鉾「鷹山」関係資料（下）――京・三条衣棚町文書』1971 年
京都市文化観光局文化課編・発行
　『重要民俗資料　祇園祭山鉾由緒及びその附属品目録――第二集（十三基分）』1971 年
京都市文化観光局文化財保護課編・発行
　『祇園祭山鉾由緒及びその附属品目録――第三集（五基分）』1972 年
祇園祭山鉾連合会編・発行『近世祇園祭山鉾巡行史　改訂版』1974 年
藝能史研究会編『日本庶民生活史料集成　第 2 巻　田楽・猿楽』三一書房　1974 年
松田元『祇園祭細見　山鉾篇』郷土行事の会　1977 年
菅沼晃次郎編『大津祭総合調査報告書　13　西王母山（桃山）』
　大津祭曳山連盟・大津市教育委員会　1978 年
若原史明『祇園会山鉾大鑑』八坂神社　1982 年
西尾市教育委員会編・発行
　『西尾市社寺文化財報告書　工芸・金石文　2　金・木・陶工品（西尾市悉皆調査報告 5）』2000 年
佐藤康宏『若冲・蕭白（小学館ギャラリー 新編 名宝日本の美術 27）』小学館　1991 年
上野市教育委員会編・発行
　『上野天神祭総合調査報告書　三重県指定無形民俗文化財』2001 年
植木行宣『山・鉾・屋台の祭り――風流の開花』白水社　2001 年
植木行宣「山・鉾・屋台の祭と芸能」（『藝能史研究』61 号　2003 年）
植木行宣・山路興造・三上皓造・小島富佐江監修、京町家再生研究会編
　『祇園祭山鉾構造解説書』祇園祭山鉾連合会　2007 年
植木行宣・山路興造・三上皓造・小島富佐江監修、祇園祭山鉾連合会企画
　『京都祇園祭――鉾の構造と組み立て』松竹京都映画株式会社　2007 年　[DVD 35 分]
茨木市史編さん委員会編『新修茨木市史　第 9 巻　史料編　美術工芸』茨木市　2008 年
福井貫二『祇園祭山鉾重量測定報告書』祇園祭山鉾連合会　2009 年
村上忠喜「鷹山装飾品」（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編・発行

『京都市文化財ブックス第 23 集　京都の五山寺院』2009 年）
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編・発行
『京都市文化財ブックス第 25 集　写真でたどる祇園祭山鉾行事の近代』2011 年
大塚紀子『鷹匠の技とこころ――放鷹文化と諏訪流放鷹術』白水社　2011 年
亀山市・亀山市歴史博物館編『亀山市史　美術工芸編』亀山市　2011 年
MIHO MUSEUM 編・発行『長沢芦雪 奇は新なり』2011 年
京都国立博物館編・発行『特別展観 百獣の楽園―美術にすむ動物たち』2011 年
花林舎編『祇園祭山鉾懸装品調査報告書　渡来染織品の部』祇園祭山鉾連合会　2012 年
花林舎編『京都近郊の祭礼幕調査報告書　渡来染織品の部』祇園祭山鉾連合会　2013 年
大船鉾復原検討委員会編『凱旋　祇園祭大船鉾復原の歩み――基本設計図完成報告書』
四条町大船鉾保存会　2013 年
花林舎編『祇園祭山鉾懸装品調査報告書　国内染織品の部』祇園祭山鉾連合会　2014 年
京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編・発行
『京都　剣鉾のまつり調査報告書』2014 年
大津市教育委員会編・発行
『滋賀県指定無形民俗文化財　大津曳山祭総合調査報告書』2015 年
八坂神社文書編纂委員会編『新編　八坂神社記録』臨川書店　2016 年
安井雅恵「祇園祭礼図に見る絵入版本の力」（『美術フォーラム 21』34 号　2016 年）
祇園祭山鉾連合会編・発行『祇園祭山鉾錺金具調査報告書Ⅰ』2016 年
祇園祭山鉾連合会編・発行『祇園祭山鉾錺金具調査報告書Ⅱ』2017 年
祇園祭 山鉾連合会編・発行『京都・祇園祭　鷹山ふたたび』2017 年
祇園祭山鉾連合会編・発行『祇園祭山鉾錺金具調査報告書Ⅲ』2018 年
八反裕太郎『描かれた祇園祭――山鉾巡行・ねりもの研究』思文閣出版　2018 年

次のステップへ～むすびにかえて

狂言「鬮罪人」には祇園会の出し物を寄合で決める草創期の山鉾町衆の姿が活き活きと描かれている。

文政 9 年（1826）を最後に巡行から外れた鷹山が復興の緒に就いた。山鉾町衆の一人として嬉しい限りである。

異同はあるが多くの資料を残す鷹山の復興には現代町衆の思いも然ることながら、謎多き鷹山だけに判る限りの伝承を確りと受け継ぐことも又、大事なことである。

町衆の希いを大きな柱に、多くの方々の知恵を得て骨格が定まった。不易流行、受け継ぐべき揺るがぬ軸足を外さぬ限り、少しずつ時代の工夫を加えることも又、可なりと思う。愈々これからが本番である。

平成 30 年 6 月

公益財団法人祇園祭山鉾連合会
副理事長　福井 藤次郎

協力者一覧

公益財団法人 岩戸山保存会
公益財団法人 永青文庫
大津市歴史博物館
公益財団法人 函谷鉾保存会
公益財団法人 祇園祭船鉾保存会
公益財団法人 菊水鉾保存会
公益財団法人 北観音山保存会
学校法人 滋慶京都学園 京都医健専門学校
独立行政法人 国立文化財機構 京都国立博物館
地方独立行政法人 京都市産業技術研究所
京都大学生存圏研究所
京都市立芸術大学芸術資料館
京都市歴史資料館
京都大学附属図書館
京都府立京都学・歴彩館
國學院大學博物館
衣棚町鷹山保存会
サントリー美術館
譲伝寺
神宮徴古館
西王母山桃山保存会
独立行政法人 国立文化財機構 東京国立博物館
公益財団法人 長刀鉾保存会
公益財団法人 鶏鉾保存会
公益財団法人 八幡山保存会
公益財団法人 放下鉾保存会
溝咋神社
公益財団法人 南観音山保存会
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
小島冨佐江　木下龍一　内田康博
丹羽結花　三木佑美　野間洋平
園部隼平　山本瑠美
立命館大学アート・リサーチセンター
立命館大学映像学部
鈴木岳海　黒田一馬　田村将章
永田一貴
井上幸治
岡田隆明
奥平俊六
門脇むつみ
川井秀一
杉山淳司
大東敬明
野地秀俊
八反裕太郎
平井俊行
松尾芳樹
松村篤之介
三島敏明
吉田孝次郎
和田光生

＊五十音順、敬称略

放　鷹　――祇園祭 鷹山 復興のための基本設計

編　　集　公益財団法人祇園祭山鉾連合会
発　　行　公益財団法人鷹山保存会
〒604-8203 京都市中京区三条通新町東入ル衣棚町 41 番地
TEL 075-221-3355　E-mail info@takayama.or.jp
発 行 日　平成 30 年 6 月 20 日
編集協力　一般社団法人システム科学研究所
〒604-8223 京都市中京区新町通四条上ル小結棚町 428 番地